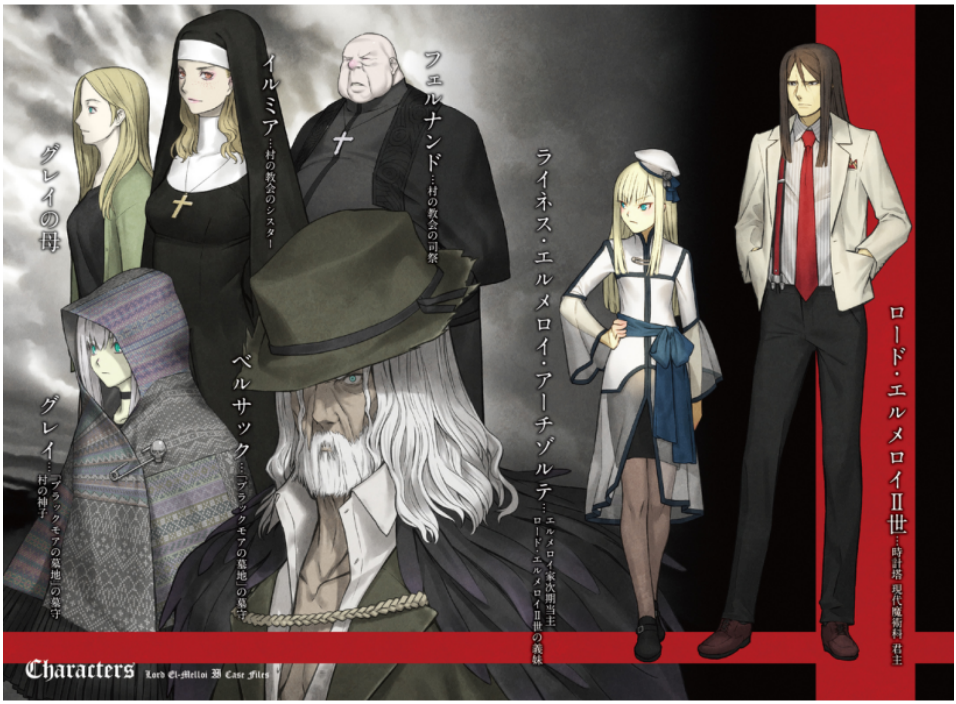

6
三田誠
イラスト 坂本みねぢ
「case.アトラスの契約（上）」
ロード・エルメロイII世の事件簿


ロード・エルメロイII世の事件簿
6
「case.アトラスの契約（上）」
三田誠
イラスト 坂本みねぢ


ロード・エルメロイII世…時計塔 現代魔術科 君主
ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ…エルメロイ家次期当主 ロード・エルメロイII世の義妹
フェルナンド…村の教会の司祭
イルミア…村の教会のシスター
ベルサック…「ブラックモアの墓地」の墓守
グレイ…「ブラックモアの墓地」の墓守 村の神子
グレイの母
Characters Lord El-Melloi II Case Files



「よろしい」
　と、ライネスがうなずいた。
　それから、しみじみと呟いた。
「いつか、君がそう切り出すだろうと思ってたよ。これは予想というより願望だけど」
　どこか困った風で、自分の思い違いでなければ、なぜか愛しげな口調だった。
「では、しばらく私の――ライネス・エルメロイ・アーチゾルテの口から語らせていただこうか。君と兄が出会う前の物語をね」

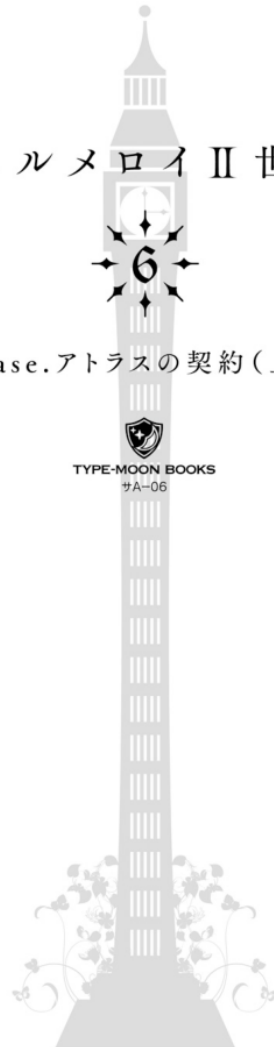
――序章より

ロード・エルメロイⅡ世の事件簿

6

「case.アトラスの契約（上）」

TYPE-MOON BOOKS
サA-06



Lord El-Melloi
Ⅱ
Case Files

ロード・エルメロイⅡ世の事件簿

6「case.アトラスの契約（上）」

目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 033

『第二章』 077

『第三章』 141

『第四章』 217

『転章』 275

『あとがき』 286

ロード・エルメロイII世の
事件簿
6「case.アトラスの契約(上)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次　Contents

序章

第一章

第二章

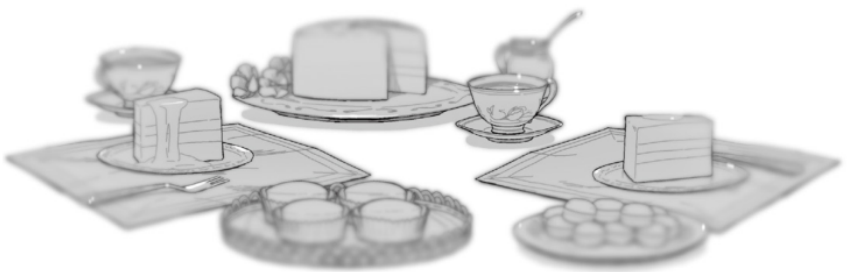
第三章

第四章

転章

あとがき

✦序章✦



いつものように、教室は賑やかだった。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジが有する中でも、とりわけ古い講堂である。扇形の階段教室になっており、かなりの席が埋まっている。本来エルメロイ教室は十数人ほどの少数授業らしいのだが、聴講生たちでその三倍は詰めかけるのが常だった。

科学嫌いの魔術師ではあるが、一応セントラルヒーティングも入っていて、構内の空気はほんのりと暖かい。普通の大学との違いは、せいぜい壁にかかった蜜蠟の淡い香りぐらいだろうか。

もっとも、現代魔術科でも研究棟や訓練室はまるで違うし、第一科ミスティールや個体基礎科ソロネアの大教室に至っては、暖房冷房も純粋な魔術でまかなっているそうで、結果として一桁以上違う金額が毎月費やされているとか。

見栄とは金がかかるものだよ、とは誰の言葉だったろう。

「……」

なんにせよ、鼻孔をくすぐる蜜の香りは好きだった。季節や天候に合ったものを常勤講師のひとりが毎朝選んでいて、集中力向上の効果があるという触れ込みだ。一度お礼を言いに行ったことがあるのだが、「蜜の手柄は蜂と花、薬の手柄は草のものだ」とけんもほろろに追い返されたものだった。

（……今なら、それでもありがとうって言えたかな）

当時はロンドンに来たばかりで、他人と話すことなどほとんどなかった。

だから、ひとりぼっちの自分を慰めてくれる香りがとても嬉しかった。講師の側にそんな意図がなかったとしても、この心が温まったのだから、せめてお礼を言いたいと思っているのだけど……。

そんな物思いにふけりながら、視線を戻す。

ちょうどレポートの返却日でもあり、授業の半ばからは正式な生徒たちがひとりずつ前に出て、師匠の講評を受けていた。

「前期から格段の進歩がある。その調子でもう一度励むように」

「ふん。ずいぶん回り道をしたな。一口にカバラと言っても、魔術基盤は複数ある。今回はアヴィケブロンが開発したものが適切だった。今後はマナ学の面も、最初から気をつけたまえ」

「なるほど。単位取得には十分なレポートだ。次からは課題を変えていこう。いささか難題になるが、鉱石の側面から攻めてみてはどうだ。必要なら鉱石科キシュアのつても紹介しよう。それで、こちらの講義がおろそかになっては本末転倒だが、今の調子なら両立も十分可能だろう」

　意外かもしれないが、ひとつずつの言葉に気遣いが垣間見えた。

　生徒の方もそれを感じているのか、少々厳しいことを言われても、凹むような者は皆無だ。それぞれに奮起したり、今後の目標を自覚したり、名にしおうエルメロイ教室の土台はこうしたところにあるのだろう。

　もっとも、当然のことではあるが、穏当なやりとりばかりではない。

「フラット！　レポートの出来はともかく、また取得単位を間違えてるわけだが！」

「だからスヴィン、張り合って同じ間違いをしようとするな！　追試の問題を考えさせられるのは私なんだ！」

　などの叫びもまた、扇形の教室に轟きわたる。

　そのたび、言い訳やら怒号やら魔術やらがあって、しれっと教室に戻っているイヴェットや、至極真面目に勉強しているカウレスも、それぞれに巻き込んだり巻き込まれたりを繰り返す。

（……なんだか、ドキドキする）

　教室の隅にちょこんと座って、自分は胸元を押さえていた。一応、今回は自分もレポートを出しているだけに、師匠の言葉がくすぐったい。

　場違いだとは、分かっている。

自分は魔術師じゃない。単に師匠の内弟子なだけだ。いくつも偶然が絡み合った結果、たまたまこの席にいることを許されているだけだ。重々分かっているのだけど、それでも自分が教室の一員だという事実が、不思議なほど胸にしみいってしまう。

錯覚してしまう。

もうしばらく、ここにいてもいいのではないかと。

そんな感情を噛みしめているところで、不意に聞き慣れた単語が教室に響いた。

「グレイ」

「……は、はい！」

緊張とともに、立ち上がる。

階段を下りて目の前まで行くと、師匠はぽん、と手の甲でレポートの表面を叩いた。

「まず、レポートの形式が間違ってる。テーマが統一できずにとっちらかりすぎ。前提になるカバラの資料も読み込み不足。そもそも資料同士の相性を考慮しなかっただろう。違う流派の資料を採用したせいで、前段と後段の論理が矛盾している。時計塔の場合、司書に確認してもらうだけで八割方は防げる。今後注意するように」

「……す、すみません」

しょぼん、と頭こうべを垂れる。

自分でも何かおかしいとは思っていたのだが、司書に訊くなんて考えもしなかった。言われてみれば当然なのに、どうして気づかなかったのか。

「……ただ」

と、師匠が付け加えた。

「付記にあった死霊術近辺の考察には、断片的だが、目を見張る記述が載せられていた。肉体・精神・魂の三要素それぞれから死を探るのは基本的だが、体感的なアプローチが面白い。十分査読した上

で、君に問題がなければ、私の論文に引用してかまわないかな。もちろん名前は併記させてもらうが」

「も、もちろんです！」

「感謝する。査読時と私の論文の執筆時には、別途連絡しよう。──では、次、イヴェット・L□レーマン」

　まるで、何もなかったかのように、続いて魔眼の少女の名を呼ぶ。

　はいはい噂の愛人候補ですよと教室にアピールしては、何人かの強烈なブーイングを浴びる眼帯少女を、自分はふわふわした気分で見送りつつ、席へと戻った。

　それからも、師匠は次々と生徒たちのレポートを採点していく。

　いままでと同じように──あるいはいままで以上に、精力的に講義に励んでいる。年末の怪我なんてとっくに完治したと言わんばかりだ。実際、身体の傷は塞がったのだろう。仮にも君主ロードの端くれなのだから、治療用の魔術には事欠かない。前の事件で退院した後も、万が一にも後遺症が残らぬよう診せてくださいと、何人もの弟子がひっきりなしに申し出ていたぐらいだ。そのすべてを師匠は断っていたけれども、松葉杖を突きつつ、少しだけ嬉しそうにしていたのを覚えている。

（……でも）

　精神こころは、どうなのだろう。

　前回の事件は、あまりにも深く、師匠の内面を抉っていた。あくまで他人の事件に巻き込まれていただけのこれまでとはまるで違って、師匠をこそ狙い定めた事件だった。だからこそ、どのような影響が起きているのか想像できず、自分もひどくもどかしい時間を送っていたのだった。

　そんな中、

「おめでとうグレイちゃん！」

　不意に、後ろ側の席からぐいと身体をのめらせて、金髪の少年が手を振ったのだ。

「フラット……さん」

　白い歯を輝かせた少年は、先にレポートの講評を受けていたフラット・エスカルドスだった。エルメロイ教室でもこれだけ目立つ相手はほとんどない。

「すっごいよね！　教授が自分の論文に採用したいとか、滅多に聞かないんだから！」

「い、いえ、拙せつの故郷での知識が、たまたま興味を持ってもらえただけですから」

「それだってすごいよ！　だって、グレイちゃんはまだここに来て半年ぐらいじゃない。俺が教授に初めてレポート出したときなんか、そりゃもうどうにか目に留まりたくてさ。半端なものだったら教授は何度も見ているに違いない、ここは質より量だって一大決心して、時計塔中をかけずり回って蝙こう蝠もりの目玉とか糞尿とかを段ボール箱いっぱいに用意したんだけど、なぜかすっごく怒られたんだよね！」

　元気よく、教室に箱を持ってくる少年の図が、目に浮かぶようだった。得意げに片目をつむって鼻の下あたりを擦っていると、なおさらそれっぽいかもしれない。

「あのときは鼻がひんまがりかけた──って、あ、待てずるい！　僕にもグレイたんと話をさせろさせるべきすぐそこをどいてどくべきどかなければ！」

「あ、ル・シアンくん」

「ル・シアン犬って呼ぶな！」

　同じ金髪でも、こちらは癖っ毛の少年がずずいと席を寄せてきて噛みついた。

　スヴィン・グラシュエート。フラットと並んで、現役世代の双璧と言われるふたりだ。野性味のある印象は、女生徒の受けがいいらしい。自分にはよく分からないのだけど、確かに顔立ちはふたりとも整っている。

　もっとも、それもふたりの衝突がなければだろう。

「え、だってル・シアンくんはル・シアンくんだし！　あ、ひょっとしてグレイちゃんの汗とか嗅ぎたかった？　でも教授に近づけちゃいけないって言われてるし……よし、だったら俺の匂いを嗅ぐといいよ！　ほら存分に！」

「よしわかった。やっぱり不倶戴天の敵だったなフラット！」

　少年の手に、魔力が爪のごときカタチを取る。

　ぐいんと唸ったその爪の軌跡の外へ、フラットが驚くほどの速度で脱出した。

「あはは！　前に橙子さんにやられたんで、自動行動システム組んでみたんだ。僕の意思を無視して、強化の要領で魔力だけで神経を動かすの。昔遊んだゲームで、ロボットを事前のプログラムだけで動かすのがあったから、あれで思いついて──あいたっ！」

　べらべらと喋りながら回避していたフラットが、後頭部を思い切り、後ろの椅子に打ち付けた。

「あ、つつつ……環境設定はまだまだ精度が足りないか」

　痛がりながらも、持ち上がったフラットの指から魔弾が射出。

　スヴィンの肩の辺りで弾けて、綺麗な虹に似た円環を講堂につくった。

「わ、すごい！　ル・シアンくん、また対魔力あがってるね！」

「五月蠅い。ここで始末する！」

　まるで、アメコミのヒーローみたいに、スヴィンの両手に魔力の爪が生えて──

「ふたりの制止を要請する」

　講堂の講師席から、厳かな声が飛んだのだ。

「……ふたりを止めたヤツには一単位授与、アシストに貢献したものにはレポート免除、もしくは個人教授を一時間用意しよう。今回は聴講生の参加も認める」

いっそ冷ややかな師匠の声とともに、熱い歓声があがった。たちまちふたりを取り囲んだカウレスの電気魔術やイヴェットの魔眼、炎や氷に『変化』させたチャクラムやナイフ、そのほか元素魔術にルーン魔術、黒魔術ウィッチクラフトと、荒れ狂う嵐のごとき魔術の渦があっという間にふたりに対抗する。

フラットとスヴィンは教室の双璧だが、けっして周囲も黙して見守るばかりではない。隙あらばその座を奪い取らんと、情熱あふれる魔術師たちが狙い澄ましている。聴講生たちすらその例外ではない。だからこそ、こんなにもこの場は滾っている。

あまりにいつも通りの、エルメロイ教室の日常。

胸が苦しくなるぐらいの。

「──どうした、グレイ」

生徒たちに指示をとばしながら、師匠がすぐそばに寄り添っていた。

しかめ面をしているのは、物的被害が出ぬよう、注意を払っているためだろう。こんなこともあろうかと、ほかの教室よりずいぶん頑丈に造ってあるそうだが、だからといってほいほい壊れた品を補充できるほど現ノ代ー魔リ術ッ科ジが裕福なわけじゃない……というより、師匠の気質の問題だろうけど。

「さっきから物憂げな顔をしていたが。レポートについては最初はあんなものだろう。単位はやれないが及第点といっていい」

「あ、いえ、そういうわけじゃ」

駄目だ。

どうしても、真正面から見据えられない。さっきの講評のときは耐えられたけど、今は。

そのとき、ちょうど授業の終了を告げる鐘が鳴った。

「す、すみません。また今度！　お先に失礼します！」

頭を下げて、自分はそそくさと教室を退席したのだった。

＊

学術棟の外にでると、ひんやりした風が頬を撫でた。

意外かもしれないが、ロンドンの冬はさほど寒くない。曇り空で日照時間こそ短いが、偏西風やメキシコ湾からの暖流の影響もあって、最低気温が氷点下に至ることは少ないからだ。それでもフードの下に風が直撃すると、思いがけない冷たさに驚いてしまう。ついついゆるんでいた自分の気持ちを引き締めさせるような、冬の妖精の手のひらにも似た冷たさ。

指先に息を吐きかけて、自分はスラーの通りから歩き出した。

わざとゆっくり歩いても、せいぜい十分ぐらい。

ほど近い地区の、瀟洒な屋敷だった。

さほど大きくはないが、よく手の入った庭が印象的だった。蔦の絡まった古めかしい煉瓦造りの壁に、鱗状の屋根はどこか御伽話フェアリーテイルめいている。実際住んでいるのは魔術師なのだから、そう言っても間違いにはあたるまい。

いつも通り、水銀メイドのトリムマウに案内されると、部屋には紅茶の豊かな香りが漂っていた。あらかじめ訪問の時間などは伝えていたのだけど、ひょっとして気を遣わせてしまっただろうか。

はたして執務机の後ろから、

「やあ、いらっしゃい。少しだけ待ってもらえるかな」

と、主たる少女が、声をかけてくれたのだ。

自宅ゆえ隠す必要もなく、その瞳は本来の焔ほむら色いろに輝いていた。執務中だったようだが、すらすらと書類にサインを記し、ほんの数分足らずで紙の束がみるみる消えていく。たまに目配せすると、それだけでトリムマウが該当部分の詳細を解説するあたり、なんだか息のあったジャグリングでも見ているみたいだった。

「いやはや、帰ってきたら帰ってきたで忙しいもんだ。こういうのは可能な限り兄に押しつけておきたいのだが、あれだと派閥周りの細かな貸し借りとかうまく処理できないからな。結局のところ、こういうのは日頃の根回しに如しくものはない」

　一息ついて、こめかみのあたりを揉みながら、ライネスが言う。

「アニムスフィアに行かれていたんですよね」

「ああ、ずいぶん寒い思いをしたよ」

　と、少女は肩をすくめた。

　魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの後始末で、あのオルガマリー・アニムスフィアと協力体制を結ぶことになり、天体科アニムスフィアの都市を何度か訪れては打ち合わせを繰り返していたそうだ。

　オルガマリーの父──天体科の君主ロードであるマリスビリーは中央の権謀術数から距離を置いていたのだが、前回の件でオルガマリーは進出に興味を抱いたらしい。あの魔眼オークションで消費しなかった金と、持て余している原子力発電所（！）だとかを売却する方針で、新たな計画を提出したという。

　なんとなく、あの強気でしかし繊細な少女の得意げな横顔が見えた気がして、自分も嬉しかった。

「さて、ではお茶にしようか。今日は新しい店にチャレンジしてみてね」

　と、執務席から離れて、ライネスがウィンクした。

　こちらもすすめられるまま、トリムマウの運んできた、綺羅星のごときお菓子までご馳走になってしまった。

「……あ、このシフォンケーキすごいです。その、ギリギリまで甘いのに、甘ったるくはなくて」

「うん。こっちのガレットもなかなか。ピスタチオを練り込んだ生地に、ほんのりと酸っぱいアプリコットの組み合わせが慧けい眼がんだな。早朝から買いに行かせた甲斐があった。今度から定期巡回ルートに加えさせるか」

時に宝石のようで、時に絵画のようで、お菓子はどれも素晴らしい。

ロンドンに来てから知ったことだけれど、甘味には人の心を癒す作用がある。絶対にある。そんじょそこらの魔術なんて目じゃないほどに、心からとろけるような気分になる。だけど、今回ばかりはその美味に酔いしれていられなかった。

ライネスも、続く展開を予期してか、心なしか苦い顔ではあった。

紅茶とお菓子をいただきつつ、しばらく会話を進める内に、

「……やっぱり、そういうことになったか」

ため息混じりに、口にしたのである。

師匠の言葉やら最近の行動やらに対しての反応だった。おおよそは年末にも伝えてあったのだが、細かな経緯もまじえて、口頭で話すのはこれが初めてとなる。

──同時に。

ふたりきりで事情を話す内に、自分ももう一度事件の結末を思い出して、胸にぽっかりと穴のあいた気分になった。さきほどの講堂で、師匠の顔を見据えられなかったその理由を思い出してしまったのだ。

あの事件の結末。

つまり、師匠は、第五次聖杯戦争を辞退すると。

「まったく愚かしいな。我が兄は」

と、指を組み合わせて、ライネスがソファにもたれかかった。

ひとつずつ、改めて情報を確認して、精査して、積み木みたいに組み上げているらしい。やがて、頭の中でカタチができあがったのか、少女は物憂げに口を開いた。

「なるほど。もうひとりの王──フェイカーに一矢報いたのは嬉しかろう。君があまりに嬉しそうだったから止められなかったというの

も無理はない。この十年で、おそらくは初めて我が兄が自分自身の達成を噛みしめられた出来事だったろうからね。第四次聖杯戦争以来のひとつのけじめがついたんだ。それは清々しい気持ちにもなっただろうさ。

　だけど、第五次聖杯戦争を辞退した理由とは直接つながってない。まったくもって、肝心なところで我慢ばかりを覚えている兄だね。いやまあ、そういう躾をした私の影響もあるかもだけど」

　ふん、と鼻を鳴らす。

　ああ、ライネスの言いたいことなんて明白だ。

　つまり、師匠が第五次聖杯戦争を諦めた理由。その一番核心にあたるところ。

「もうひとりの王を、放置なんてしてられないからだろう？」

　と、少女は当たり前に開陳する。その姿は、どこか師匠に似ていた。血のつながりなんかなくても、兄妹というものはどこか似るものなのかもしれない。

　もうひとりの王。

　先の事件──魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで出会ったサーヴァント。

　師匠や自分と敵対することになったサーヴァント。新たなエクストラクラス・フェイカー。ドクター・ハートレスを名乗る、かつての現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長に仕えるもの。

　そこまでの経緯を思い浮かべたところで、改めて目の前の少女は続ける。

「聖杯戦争に参加してでも王に会いたい、王は優勝できる器で劣っていたのは自分だけだったのだと証明したい、というのは兄の私心だろう。対して、もうひとりの王フェイカーがサーヴァントとしてほかの誰かに仕えてるならば、これを見定めるのは王の部下としての義務だ。いかなる私心も封印して、必ずやそのマスターの目的や行く先を見極めねばならない。ましてや自分が奪われた触媒で召喚されたのだから……なんて、兄なら当然考えるさ。

ついでに言えば、現代魔術科の君主ロードとしても、かつての学部長が何らかの暴走を起こしているなら、速やかに対処する必要がある。エゴを最も大事にする魔術師としては愚かとしか言いようがないが、兄が自分を律してる倫理というのはそういうものだ。どうやっても、ありたい道と、あるべき道を取り違えられない性た質ちだからね」

呆れたように、ライネスが息をつく。

それだけで、自分は苦しくなる。胸にごつごつとした石がつまったみたいだ。あれほど王に会うのを切望した師匠が、「もういいだろう」と清々しく笑ったあの顔を思い出してしまう。

いいはずなんか、ないのに。

未練はあると、自分でも言っていたのに。

あれから一度だけ、あのアトラム・ガリアスタが、スラーの街を訪ねてきた。

第五次聖杯戦争を辞退したという師匠に憤慨し、「ああ、僕なら君らエルメロイと同じ轍を踏んだりしないとも。せいぜい指を咥えて、勝利者となった僕の帰還を待っているがいい」と捨てぜりふを残して、去っていった。

あの傲慢な青年からは意外なことに、言葉の表向きが失望でも、その芯からは無念さが滲んでいた。もう一度、今度こそは魔術師として競い合うのだと思っていたのだろう。彼が考えている戦いと、サーヴァントを伴う聖杯戦争は異なるかもしれないけれど……
ひょっとすると、その違いは致命的かもしれないけれど、でも、彼は自分の代わりに怒ってくれている気さえした。

あるいは、師匠をウェイバーと呼ぶ自称親友──メルヴィン・ウェインズなら違う答えを持っているかもしれないけれど。

そんな心境を見透かしたのか、ライネスの言葉はこう続いた。

「アトラムは、もう日本に発ったそうだ。以前から部下を派遣して、冬木市にあれこれ仕掛けを施していたようだしね」

「冬木市」

　その都市の名前には、自分も聞き覚えがあった。

「聖杯戦争の土地……ですね」

「ああ。まだ七騎が揃ったという報告はない。でも、すでに何騎かは召喚されていて、水面下での前哨戦を始めているだろう。先代ロード・エルメロイと同じ轍は踏まないとか、あの石油王がしつこく言っていたあたりからすると、こうした前哨戦には積極的に関わっていくつもりだろうな。兄も当時世話になった夫妻に、街をしばらく離れるよう旅行チケットを送ったそうだし」

「……」

　新しい聖杯戦争が、ついに始まる。

　セイバー。

　ランサー。

　アーチャー。

　ライダー。

　キャスター。

　アサシン。

　バーサーカー。

　いずれ劣らぬ七騎の英霊が激突するという、現代の神話。若き日の師匠が参加し、かろうじて生き残ったという大儀式は、今回どのようなカタチをとるのだろう。

　そして、その始まりを、師匠はどのような気持ちで捉えているのだろう。

「それに……」

「それに？」

　訊き返すと、ライネスはかすかに眉宇を寄せた。

「いやいや、理屈があるわけじゃないんだが、どうもあの兄は私た

ちが考えるより踏み越えてしまってる気がするんだよ。言葉面だけ追っていけば至極まともなのに、それを繋ぎ合わせた先は、明らかにありえない結論に到達してるみたいな」

「……はあ」

　返事は、曖昧になってしまった。

　でも、なんとなく分かった。確かに師匠にはそうした面がある。事件の糸口を見つけたときや、魔術を解析する瞬間、突然ひとりだけの世界に没頭する。探偵小説の名探偵たちだって似たことはするだろうが──師匠の場合は、とりわけ切実で、突き詰まった気配があった。

　そうしなければ、生きていけないというような。

　探偵の生態などではなく、張りつめた楽器の弦のごとき儚さと、相反した奇妙な力強さを、師匠からは時々感じさせられる。

　だったら、と思った。

「ハートレスは、どうなんでしょうか」

「ドクター・ハートレス、か」

　名を出して、ライネスは眉をひそめた。

　前回の事件の黒幕。新たなるサーヴァント・フェイカーを召喚したマスター。聖杯戦争など起こるはずのないこのブリテンで、そんな悪しき奇蹟が起きたからこそ、師匠はこの地に足止めを食うこととなった。

　ならば、そのハートレスはどのように逸脱してると、この少女は見るのだろうか。

　目の前のマカロンを手に取って、紅茶を一口。ほのかな甘い香りとともに、ライネスはもう一度口を開いた。

「そもそも、明らかにハートレスとやらは、以前の事件から兄と深く関わってる」

「以前から、ですか？」

「イゼルマだよ。冠位グランド魔術師・蒼あお崎ざき橙子への報酬としてとある聖遺物──菩提樹の葉を購入するための闇オークションに、大量の金を出した人間がいただろう」

それで、思い出した。

冠位魔術師に依頼するため、イゼルマはとっておきの呪体を用意した。魔術師専用の闇オークションで、膨大な金額を注ぎ込んでのことだと聞いてはいたが、結局その金の出所は分からないままだったのだ。

「あれは、おそらくハートレスだよ」

「……っ」

一瞬、口の中のチョコが塩のように感じられた。

それほどに、ライネスの発言は自分の心臓を穿っていた。

「イゼルマだけかどうかも怪しいもんだ。君は、あの法政科の魔術師──化あだし野の菱ひし理りを覚えているかな」

「……あ、はい」

「で、菱理は彼の義理の妹として、個人的な用向きで追っていると言ってたんだろう。だったら、おそらくは似たような事件を何度もドクター・ハートレスは起こしている。実際、七年前に起きた魔眼所有者の連続殺人事件だって、ハートレスが犯人だったわけだからね」

ぽつぽつと、少女が語る。

その洞察は、兄と似て非なるものだ。

師匠があくまで魔術師として、魔術師の動機や在り方から事件を繙ひもといていくのに対して、彼女はあくまで事実を並べ、対象の取った行動から相手の本質を把握しようとしている。いうなれば、政治家としての推理力だろう。

相手が敵か味方か、適切に把握するための能力。

きっと、彼女が生きていくために培ってきた『力』だ。

「けして、ハートレスは事件の黒幕というわけじゃない」

　と、ライネスは否定した。

「さっきのイゼルマでも、犯行自体には絡んでない。七年前の事件だって、もとを辿ればマリスビリー・アニムスフィアが冬木の聖杯戦争を調べようとしたことが発端だ。いうなれば、単なる背景情報だよ。彼がいてもいなくても、何らかの代替人物オルタナティブが現れて、似た事件が起きた可能性は極めて高いだろう。

　しかし、だからといって排除するには、あまりにも密接に絡んでいる。……ふん、あの兄が敵だなんて、大層なことを言いだすわけさ」

「理由が？」

「似てるから。あるいは真逆だから」

　言葉は、鋭い刃に似ていた。

　すうと人差し指をあげて、ライネスは続ける。

「魔術をただの秘奥として見ていない。自分の人生と一体化させていない。最果ての目的としていない。もっとも、これらの特質は兄にとっては苛立ちのもとだろうがね。いずれも、しないのではなく、できないだけだ。兄は魔術を愛しているが、魔術は兄を愛さなかったから」

　きっと、よくあることなのだろう。

　生涯をかけても成し遂げたい何かがあり、しかしその才能には恵まれなかったということ。師匠が周囲とほんの少し違ったのは、それでも諦めず、あがきつづけ、少しだけ違った何かに辿り着いたことだ。それが飢えを満たしてくれるかどうかは、別として。

「だが、あれは違う。真逆だ。できないのではなく、しない。現ノ代ー魔リ術ッ科ジの前学部長となれるほど魔術は彼を愛したが、彼は魔術を愛さなかった。でなければ、こうも多くの優れた魔術師が失われるのを見過ごさなかっただろう。ああ、もちろん法政科だって似たような考え方ではあるがね」

　淡々と、ライネスの言葉が積み重なる。

コップに水が溜まっていくのを想起した。縁まで盛り上がった中身は、もうほんの数滴で決壊してもおかしくない。水は薬か、はたまた毒か。

「さて、兄が解体者だとしたら……あれはなんと呼ぶべきだろうね」

師匠と、ハートレス。

ともに、現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長についたのは単なる偶然だろうか。

嫌な予感が、茨のように喉元を締め付けてくる。ただの妄想かもしれないのに振り払えない。魔術師が直感を無視してはならないと、師匠の言葉が蘇ってくる。

しばし、沈黙が部屋を閉ざした。

かぐわしい香りが鼻孔をくすぐるまで、それは続いた。

トリムマウがティーポットを入れ替え、新たな一杯を注いだのであった。

「ふむ、とりあえずはこんなところかな」

その紅茶を口にして、少女がもう一度ソファにもたれかかる。

こちらの体調に気を遣ったのか、最初からライネスが指示していたのか、今度はハーブティーだった。銘柄は分からないが、陰鬱に閉ざされていた心を、爽やかな風味がほどいてくれた。

ああ疲れたと肩を揉みつつ、今度は悪戯っぽい顔つきで、ライネスが囁く。

「どっちにせよ、こちらのやることなんか決まってるだろう？」

と、形の良い片眉をつりあげる。

「愚か者でも兄は兄だ。だいたいまだしばらくは健在でいてくれな

いと、私の苛める相手に困る。支援して、たっぷり恩を売りつけてやるさ。つまるところ、君もそのつもりでここに来たんだろ」

「はい。……あ、苛めるのは違いますけど」

　あわてて手を振った自分に、ライネスがくつくつとおかしそうに笑った。

　その笑い声で、少しだけ楽になった。友達に笑ってもらえると、気持ちが楽になるのだと、初めて知った気がした。

　深呼吸する。

　うなずき、自分は胸を押さえた。

「師匠は、拙に助けてほしいと言いました。だったら、全力を尽くすのが弟子としての義務です。そして、全力を振るうためには、拙はもう一度向かい合わなければなりません。だから、ライネスさんから話を聞きに来ました」

　そう。向き合わなければならない。

　いままでずっと逃げていたことに。ロンドンの居心地のよさで、ずっと目をそむけていたことに。

　自分の場合は、そう。

「あの故郷に戻る前に、初めて拙と師匠が会ったときの物語を」

「よろしい」

　と、ライネスがうなずいた。

　それから、しみじみと呟いた。

「いつか、君がそう切り出すだろうと思ってたよ。これは予想というより願望だけど」

　どこか困った風で、自分の思い違いでなければ、なぜか愛しげな口調だった。

「では、しばらく私の──ライネス・エルメロイ・アーチゾルテの口から語らせていただこうか。君と兄が出会う前の物語をね」

✦ 第一章 ✦



1

　──いよいよ、盛夏にさしかかる頃だった。

　といっても、ロンドンの夏は基本的に涼しい。

　なにしろ最高気温で二十五度に差し掛かるかどうかといった案配だ。平均だとせいぜい十五度程度で、夜に至っては防寒が必要になるくらい。うっかり薄着でやってきた観光客が、風邪をひいてせっかくの旅行を台無しにしてるのを見ては、こっそりほくそ笑むのが、この季節の私の趣味だった。

（まあ、年々温暖化の傾向が見られるらしいし、この趣味にも寿命がありそうだけど）

　温暖化の理由を何に問うかは研究機関にでも任せるが、個人的にはいよいよ科学もここまで来たかという思いはある。

　魔術も奇蹟もなくたって、ちょっとした富豪が全力を傾けてアマゾンあたりの熱帯雨林を伐採しまくれば、あっという間に世界の危機だ。もはや核爆弾も必要なく、お手軽に私たちは心中できる。ちなみに、ここに至らない理由を、魔術の世界では抑止力なんて名前で呼んでいるのだが、だいぶ余談過ぎるので割愛しておこう。

　閑話休題。

　ロンドンの夏なんて話題になったのは、そこを離れる用事ができたからだった。

「すまないがレディ。一週間ほど、私用でウェールズを旅しようと思っている。その間、業務を任せてかまわないだろうか」

　などと、兄が持ちかけてきたのである。

（我が兄が！　私用で！　旅行！）

と、つい内心ではしゃいでしまったのは許してほしい。

なにしろ、君主ロードに封じてからは、想像を遙かに超えて真面目に務めてきた兄である。ひたすら胃痛に耐えていたようだが、正直数回は逃げるだろうと予想していた。そのときに備えて、追跡用の魔術や折檻用の部屋も用意していたのに、完全に無駄になるとは思ってもおらず、正直忸じく怩じたるものを感じてもいたのだ。

だからこそ、ついこちらも本気になってしまった。

どうしても必要な根回しや業務を前倒しで終わらせ、それでも残った雑務は日頃お世話になってる二級講師のシャルダン翁に押しつけて、私も兄に同伴することを条件にしたのである。

ああ、念のため付け加えると、いまさら逃げると思ったわけではない。単に弱みを握っておきたいからだ。十年近く前の極東での戦い以来、趣味のゲームやたまの手紙を除くと、かつてのプライベートをほとんどにおわせないこの相手は結構な難物だ。お気に入りのペットである以上、首輪は多い方がいい、と私の勘が訴えていた。ついでに苛められればなおよろしい。

だからまあ、ウェールズの片田舎までついていったのは、そういう理由である。

スーツケース片手に、まずは早朝のパディントン駅からディーゼル列車。

独特の揺れを楽しみつつ、用意していたお菓子を独り占めして、ウェールズ首都のカーディフまで約二時間ほどだ。英語とウェールズ語が併記されるようになった看板を眺めつつ、そこからバスに五時間ほど揺られ、さらに徒歩で山道を登っていく。

これがまたなかなかの獣道で、人間の足を効率的に潰すためにつくられたような凹凸と傾斜の繰り返し。道を切り開いた相手に、ほほうお主もなかなかの好き者だなと肩を叩きたくなる。

時折聞こえる鳥の甲高い鳴き声。

泥や糞尿や腐った実の臭いが混ざり合い、ねっとりとした山岳ならではの空気。

鬱蒼と茂った枝葉ばかりでいつまで経っても変わらない景色は、

常人の精神なら適度に滅入らせるだろう。山は異界だなどというが、それこそ一歩ごと、古い時代の冥界にでも踏みいっているかのようだ。あるいは、巨人の胃袋にでも呑み込まれていくような倒錯した感覚が、ずっと心の底にへばりついていた。

　ちなみに、先に弱音を吐いたのは兄である。

　だいぶ私が先行していた、薄暗い坂道の途中で、

「……君、少し、待ってくれないかな」

　と、嗄れた声で呼び止めたのだ。

「いやいやいや。この程度で疲れたとか言うのじゃあるまいな、我が兄よ。少しばかり継続的に魔力を回すだけのことだぞ？　これだけ大マ源ナの豊潤な土地ならいかにもたやすいことじゃないか」

「愉しそうに、人の恥部を攻めるのはやめていただきたい」

　息を荒らげつつ、うつむいた兄が抗議する。

　そんな様子に、つい唇がほころんでしまった。

　諦めているようでいて、この兄はきちんと毎回悔しがってくれるのだ。

　まあ、まだまだ自分の未来について絶望してないのだろう。才能はないととっくに見切りをつけているくせ、その結果については挑戦者の気概を失っていない。とんだ矛盾。非合理。でも、だからこそ実に遊び甲斐がある──もとい、こちらを飽きさせない兄ではある。発掘した幼い自分を誉めてやりたい。

「だいたいレディ。君の魔力制御だってまだまだむらがある。これぐらいの時間になると無駄が馬鹿にならないぞ。仙骨から頸椎五番までの経路をもっと緻密に想像すべきだ」

　で、すぐこれだ。自分のについてはまるで駄目なくせ、他人の理想的な完成形には明確なイメージがある。本当にいびつ極まりない。なんだこれ？　私を喜ばせるための専用玩具か？

「おいおい。これ以上私がうまくなったら、我が兄を置いていってしまうじゃないか」

「だとしても、すぐに追いつく」

　追いつくとは、距離のことか魔術のことか。

　どっちにせよ、その強がりがまた笑えてしまって、つい足を止めてしまった。

「それはいい返事だな」

　口元を修正しつつ、一応言われた通りの経路を意識して、魔力を循環させていく。

　なるほど効率はよさそうだ。正直体力のなさについては私も大差ない。疲労を軽減するよう、血流や自律神経に働きかけて、可能な限りの速度で慰撫していく。

　ついで、水筒の薄めたワインで唇を湿らせて、山頂の方角を見上げる。

「で、もうすぐなのかな」

「……地図だとそのはずだ」

　近くの樹木に背中をもたれかけさせて、汗を拭いつつ、兄がうなずく。

　ご丁寧にシガーケースから葉巻を取り出して、口に咥えた。その葉巻がわりと体力を奪ってる気はするのだが、まあ香りは嫌いじゃなかった。ついでに、動物避けぐらいにはなるだろう。

　くぐもった匂いが、ゆっくり山道に広がっていく。

　それにつられて、山頂を見上げて、ふと私はとある授業を思い出していた。

「そういえば、峻厳な山の上に建物を建てるのは当時の流行のひとつだったとか、兄の講義でも言ってたな」

「ああ。ある種の宗教において、険しい山岳に寺院をつくるのはそれ自体が信仰の証だった。信者に対しても、それだけの苦行を乗り越えたという達成感や一体感を与えることができるからな。もっとも、こうした傾向は時代を経て、宗教が権力化・世俗化するに従っ

て薄くなっていく。そんな遠地にいては集権化していく政治に参加できないからだ」

　宗教の変化。

　信じるものは変わらなくても、信じ方は時代につれて変わっていく。

　インターネットが行き渡り、この変化はさらに加速するのだろう。じきに礼拝はパソコンの聖堂に向かってするものだとなってもおかしくない。いや、その頃にはパソコンも陳腐になっているかもだ。

　過去へと走り続ける魔術でさえ、現代の要素を受け容れざるを得ないのだから。

　ああ、エルメロイが現ノ代ー魔リ術ッ科ジを担当することとなったのは、あくまで先代の急死によるものだが、最近はある種の必然を感じることが増えていた。長らくメイン学科とされながら放置されてきた現ノ代ー魔リ術ッ科ジに、君主ロードが来ることは時代の流れだったのだろうと。

　正直に言えば、面白い。

　根幹的に、私の性質は乱世に向いているのだ。そもそも鉱石科キシュアにエルメロイが居座ったままなら、自分が後継者に選ばれることもなかったろう。魔術刻印の都合上、基本的に魔術師は一家にひとりしか意味がない。本来なら、私は顧みられることもない分家のスペアとして、淡々と生命を消費して終わっていたはずだ。

　そういう意味では、考古学科と鉱石科の枠をふたつもぶんどったメルアステアに少しばかり感謝していなくもない。機会があれば、懇切丁寧に殴り倒してやりたいという意味の感謝だけど。

「ふむ、信仰ね。そういえば、今更で悪いが、一体ここはどこなんだ？」

「……の墓地」

　掠れた声音に、つい瞬きしてしまった。

「ん。それは私でも聞いたことがあるぞ。表ではさっぱりだが、こ

ちらの世界では最も有名な霊園のひとつだ。名前ばかりは聞くわりに、場所はいまいち不確かだったが……そうか、ウェールズだったか。これは盲点だな」

　唇に手をあてて呟いた私に、兄は小さく息をついた。

　葉巻の煙を掻き混ぜるみたいに、指を動かす。自分の頭を巡らせるための、準備体操みたいな仕草であった。

　それから、

「到着の前に、ひとつ講義をしておこう」

　と、言ったのだ。

「人は、古より死を恐れてきた。そもそも生命がいまよりもずっと軽く失われやすい時代だったわけだが、だからといって自分の死をやすやすと甘受できるはずもない。いまも昔も、自分の命はひとつしかないのだから」

「まあ、それはそうだろうね」

「だからこそ、古代の人類は、その恐怖を克服するために、死の向こう側を定義した。現世と線を引いて、向こう側の世界を陰いん府ぷだとか黄泉だとか名付けたんだ。これによって、死は終焉ではなくなった。無への拡散ではなく始まりとなった。この段階の死とは、先に待っている先祖たちのもとへ、ようやく現世を終えた自分が迎え入れられるという仕組みにほかならない」

　どうやら、調子がでてきたらしい。

　まだ呼吸が整いきってるわけでもないのに、こういう話を始めると止まらないあたり、筋金入りだなと感心する。ほとんど生理機能を無視して、兄がこれだけ喋りたおすのは、魔術の話以外ではゲームぐらいだ。もっとも魔術はともかく、ゲーム友達は時計塔ではほぼ見つかっていないみたいだが。

「神しん代だいにおける黄泉の国はいまよりも遙かに近しい存在だったが、死も似たようなものだ。それは身近な異世界への旅だった。一方通行ではあっても、そこからもうひとつの世界へつながることを、古い人々は疑わなかった。向こう側の呼び名を古代メソポタミアにちなんでキガル大いなる地と呼ぶか、はたまた北欧神話に

ちなんでヴァルハラ歓びの家と呼ぶかは、ずいぶんと趣が変わるがね」

　確か、ヴァルハラは北欧神話の主神オーディンの宮殿だったか。

　選ばれた戦死者だけが、戦乙女に連れて行かれるというそこでは、何百という門が開かれ、毎日煌びやかな宴が催されているという。日が昇れば彼等は戦いあい、再び死んだ者も夕べには蘇り、新たな戦を期して肉を喰らい、美酒を酌み交わすのだとも。

　だからこそ、現世においても人々は死を恐れず、むしろヴァルハラへと運ばれるために、喜び勇んで名誉ある戦へと加わったのだとか。私には理解しがたいが、なるほどそうした考え方は、さきほどの定義とセットなのだろう。

　古い、死の価値観。

　あるいは、人々が共有した、最古の魔術のひとつ。

「なるほど、死が異世界への旅か。ずいぶんロマンチックな言い方だな」

「むしろ現実的かもしれないぞ。北欧ではヴァルハラと近い発音の山も多くてね。彼らはそこを死の国と考えていたのだろう。少なくとも、そう定義することで、人類は死を克服できずとも、その恐怖を緩和した。海外など遠い時代だ。海の向こうに旅立つよりも死の国はずっと近かったし身近だった」

　そこで、一拍おいた。

　細長い葉巻を指に挟んだまま、兄が水筒で唇を湿らせる。手の甲で拭ってから、もう一度ゆっくりと話し始めた。

「墓は、そうした世界を形にしたものだ。極めてミニマムに区切られた死後の世界と言ってもいいだろう」

……ああ。

　ようやっと理解できてきた。

　墓とは、単に亡骸を埋葬するだけの場所ではない。いままで話してきた死後の世界から、さらに一歩踏み込んだ概念なのだ。

人がつくりだした、極小の死後の世界。

それこそが墓であると。

「だからこそ、各地の王は巨大な墳墓をつくりあげた。墓こそは死後の世界そのものであり、新たなる宮殿であり、さらなる征服へ打って出るための砦でもあった。莫大な費用の副葬品を封印したのも、無数の兵士の人形を配したのも、死後の世界がそこにあると認識していたためだ。ファラオにせよ、王にせよ、皇帝にせよ、彼らは死が終わりだなどとは思っていなかった。ああ、アジアにおいては風水を気にして、死後の世界をさらに強化することさえしたな。くわえていえば、これらの墳墓を隔離して生の世界と切り離した大陸側と、これらの墓を生活に取り込むことで死のエネルギーさえ取り込もうとした極東側でも分かれる。後者にはフランスのカタコンベなんかも含まれるな」

微妙に脱線しつつ、熱に浮かされたような兄の言葉が、ぷかぷかとウェールズの空にほどけていく。

「もっとも、これらは古代における、墓の作り手側の認識だ。さきほど言ったように、信仰だって変化する。古い時代には墓はそのまま死後の世界だったが、後の世代の人間からすれば、墓は窓として認識される方が多いだろう。信仰薄い者でさえ、墓は死者にアクセスできる窓だと、無意識に考えている」

墓の前で祈りを捧げる行為は、確かにそうだろう。

死者の霊が安らかであるようにR□I□P、と私たちは祈る。ほとんど口癖のようなものであるとしても、かくあれかしと願っている。死後の世界を信じているにせよいないにせよ、墓をそういうものだと認識しているからだ。

「いずれにせよ、死後の世界と、墓地とはセットの概念と言っていい。古代でも現代でも、我々はそこにもうひとつの世界を覗いている」

「もうひとつの世界、か」

鸚鵡返しに、私も呟いた。

つまり、それが今回の目的地。

「……じゃあ、我々は死後の世界に行く、とでも言いたいのかな？」

「かもしれない。とりわけ、古い墓地では生よりも死の方が正当な主人だ。我々はあくまで客人であり、ほんの少しの間、その境界に滞在させていただくに過ぎない。その程度の覚悟は必要だろう。まして、名高きかの墓地ならば」

「……なるほどね」

　いつもながら、ずいぶんと迂遠に話が戻ってきた。

　ただ、講義の意味は理解できる。墓という存在の魔術的な歴史を確認するとしないのとでは、後に見るものの意味はずいぶん変わってくるだろう。どんなに美しい詩の文だって、書かれた言語の知識なしには、ただの紙切れに違いない。

　小さくうなずいてから、ついでに尋ねてやる。

「で、この旅の目的は、フィールドワークか何かかな？　我が兄は、時々現代魔術科とはあまり関係なさそうなことを調べてるようだが」

「正直に言おう」

　と、兄は口にした。

「私が勝つための手段が、そこにあるかもしれないからだ」

「──勝つ？」

　疑問形で話したのは、一応分からないふりをしておくのが礼儀かと思ったからだ。実際のところ、兄の目的は露骨すぎる。だからまあ、今の内に、もっと弱みも握っておきたかったのだけど。

　肩をすくめて、わざとらしい呆れ声で続けてやろう。

「そうか。諦めてないんだったな」

　何を、なんて決まってる。

　第五次聖杯戦争。先代ロード・エルメロイが無残に死に、この義

理の兄が生き残ることとなった魔術儀式が、もう一度始まるのだ。本来は六十年周期といわれていた聖杯戦争だが、前回の最中に何らかの異常が起きたらしく、わずか十年で再開することになったとは伝え聞いていた。

　だけど、死後の世界にその勝利手段を求めに行くというのは、いささか物騒で、かつ示唆的過ぎはしないだろうか？

「行くのはいいが、私との約束は忘れていまいね？」

「もちろんだ。エルメロイ派の借金をどうにかすること、魔術刻印を可能な限り速やかに復帰させること、君が成人するまで君主ロードの座を安定させること、君に家庭教師を用意すること、この四つだろう？」

　一拍おいて、力強く彼は言ったのだ。

「なんとかする。少なくとも、すべて目星はつけておく。そうすれば行ける」

　おやおや、とつい瞬きせずにはいられなかった。いまだ呼吸は荒いままで、ぱたんと倒れてしまいそうな声音なのに、いつもとは打って変わっていっそ野性味さえある横顔が、眩しく感じられたからかもしれない。

（……まあ、困るのも、同じ理由なんだがね）

　と、小さく嘆息する。

　つまるところ、この兄は止められない。私が未熟だからというより、おそらく本人さえも制御できないのだ。とっくの昔にそういう生き方を定めていて、人としての生き方すら食い潰しながら、願いを叶えるべく進んでいる。

　時々、思い浮かべるイメージがある。

　彼方を目指す渡り鳥が、ほぼ翼を休めることなく飛び続ける映像だ。とりわけ海を渡るとき、彼らは島や流木にでも出会わない限りは、最低限の生命を保持するためのエネルギーすら注ぎ込んで翼を動かし続ける。雨も嵐もくぐりぬけ、ついに同胞が墜落しても振り向かず、そこまでの犠牲を払って最果てに至ったとき、彼らは報われるのだろうか。

（ああいや、ちょっと感傷的すぎるか）

　と、一旦連想を打ち切る。

　まあ、玩具に去られても退屈だし、思った以上に役立つ兄ではあるので、本当ならもうちょっと首輪を締めておきたいのだ。とはいえ、締めすぎてうっかりメルヴィンあたりに介入されても厄介だ。生かさず殺さずにおいておかねばならないのが、なかなか難しい。

　そんな考え事をしつつ、もう一度山道を登りはじめて、少しした頃だった。

　何かが、樹木の間で動いた。

「――っ?!」

　物音に視線をやると、樹木の間からばさばさと翼の音がこだました。

　一斉に飛び立ったのは、十羽近い数の黒い鳥だった。

「鴉からす、か」

　見上げた兄が呟き、視線を空から樹木の間へ戻す。

　そちらは、私も気づいていた。

「鴉は魂を運ぶ」

　と、低い声がこぼれたのである。

　さきほど鴉たちが飛び出したあたりから、黒い影が分離した。

　黒衣を纏う男。おおよそ六十歳ぐらいだろうか。初老とはいえ、外套越しでも分かるほどに逞しい体つきをしており、伸び放題の蓬髪には古ぼけたトラベラーハットをかぶっていた。



「このブリテンでもそうだが、大陸のケルト神話でも、しばしば鴉は登場する。すなわち死者の導き手。墓守の鳥。ゆえに彼らはまたとなけめネバーモアと鳴く」

　鴉の一羽が、男の肩に舞い降りる。

　兄が、口を開いた。

「墓守と言いましたね。あなたはひょっとして」

「時計塔の魔術師が、俺に用だったか？」

　おや、と思う。

　一目でこちらを魔術師──それも時計塔と見抜くとは。それとも、結構前からこちらの会話を盗み聞きしていたものか。

　居住まいを正した兄は、深々とお辞儀した。

「ロード・エルメロイII世と申します」

「たてつづけの客人とは珍しい。まして、俺を訪ねてとはな」

　と、男は告げた。

　踵を返して、背中を向けたまま、こう続けたのだ。

「墓守のベルサック・ブラックモアだ。話があるならついてこい」

　森のただなかへ、驚くほどの速度で遠ざかっていく姿を、あわてて兄が追う。

　私は一度だけ振り返って、もう見えなくなった鴉の方角へ目を細めた。

　鴉が魂を運ぶという古い伝説に、とある名前を思い出したのだ。

「ブラックモアの、墓地……」

　それは魔術師の間で囁かれ続ける、この土地で最も古い墓地のひとつであった。

2

　ベルサックが案内した先では、険しい山肌にへばりつくようにして、小さな村が存在していた。

　人口は、せいぜい百人を少し超えるぐらいだろうか。いつ消えてもおかしくないが、それでいて悠久の時間を微睡みとともに過ごしてきたような村落だった。多くの建物は煉瓦づくりで、百年以上は経っているように思える。行き交う人々も一応現代の装いだが、全員中世や近世のそれに着替えても違和感はなさそうだった。

（……とりあえずは、ウェールズの田舎ならありそうなラインではあるけど）

　これだけ険しい山中であることを考えれば、トラックなんかでの輸送は困難だろうし、やたらと古くさいことも無理はない。兄が魔術師としてひ弱なのは間違いないが、それでも一般的な都会人よりはマシなのだ。

　もっとも、そんな浅はかな計算はほんの数分ほどで打ち砕かれた。

「おや、ベルサックどの。そちらの方はどうしたのかな？」

　と、こちらを呼び止めたのは、司祭服のでっぷりとした中年だったのだ。

　でっぷりというより、丸々とした、と形容した方が正しいだろうか。あんまりに膨れ上がった身体は、もはや人間大の脂肪球に近しい。それこそ、こんな重量をよく山村まで運んできたな、と感動したくなる有様だ。具体的には坂を転べば止まらない。むしろ転がさせてほしい。

　司祭の後ろには、うら若いシスターも控えていた。

　こちらは、おそらく二十歳かそこら。頭衣からこぼれた金髪に鳶とび色いろの瞳、淡いそばかすがチャーミングだった。そんな若い

尼僧がいるとは思わなかったのだが、私の思考は別の方向に刺激されていた。

（おおっと教会）

　つい条件反射で、密かな警戒態勢に入ってしまっていたのだ。哀しいかな、聖職者に会った際の、時計塔の魔術師の性のようなものだ。

「フェルナンド司祭」

　と、ベルサックは名を呼んだ。

「私への客人のようでして。通してかまわないでしょうか」

「おやおや、どうぞどうぞ。教会の門はいつも開かれておりますゆえ」

　二重顎どころか三重顎になった猪首を動かして、フェルナンド司祭はこちらにも視線をやった。胡散臭いヤツらという感情をびたいち隠さず、眠たげな眼をますます細めてから、ゆっくりと身を屈めた。

「ふむ。初めまして、フェルナンド・クローズと申します。お名前を伺っても？」

「エルメロイII世と申します」

「ライネス・エルメロイ・アーチゾルテです」

　兄とそろって、ここは正直に名を語る。

　反応を窺ったが、司祭の表情にはとりたてて感情の乱れが生じなかった。こちらの世界の住人ならば、エルメロイの名前をまるで知らない……ということはないと思うけれど、さてポーカーフェイスか単に素人なのか。

「ほうほう。ふたりはご兄妹……であらせられるのかな？」

「うん！　どこにいくにも離れられないぐらい仲良しなんだ！　なあ我が兄よ」

　これ見よがしに腕をからめてくっついてやると、実に嫌そうな悶えが伝わった。おいおい我が兄よ。ここは仲の良さをアピールして、相手の油断を誘うところだぞ。Ｂ級のスパイ映画ならだいたいそうしてるだろう？

　兄だけに聞こえるよう小さく舌打ちしつつ、なるべく年相応の潑剌とした笑顔で、話を振る。

「ところで、そちらのシスターは？」

「シスター・イルミアよ」

　はすっぱな口調で、若い尼僧が言った。

　わりととりつくしまもない。これなら、まだしも司祭の方が脂っこいけど、何かしらの収穫がありそうというものだ。脂っこいけど。

「では、今日は訪問を求めてる信者がいるのでおいとまします。申し訳ないが、教会への案内はベルサックどのに頼んでもかまわないかな」

「もちろん、そのつもりですとも」

「申し訳ない。変哲もない小さな村ですが、どうぞごゆっくり」

　会釈して、フェルナンド司祭が遠ざかっていく。

　数秒遅れて、さっきのシスター・イルミアが、こちらの頬に唇を寄せたのだ。一瞬そういう趣味があるのかと期待してしまったところに、

「長居しない方がいいわよ」

　と、耳打ちしたのだ。

　こちらを一瞥もせず、足早に司祭を追っていく。

（おやおや）

　なんだか、ウキウキしてくるじゃないか。

　歓迎されてないムードは大好物だ。敵意や悪意は盛りだくさんの

方がファイトが湧くというものだろう。しかし、司祭とシスターでの愛想の違いはわりと気になるね。

　ともあれ、私たちはそのまま村の北端にあたる教会へと導かれた。

　鱗状の壁に蔦の巻き付いた、質素な教会だった。

　教会の扉を開くと、意外と広い空間が開けた。

　天井も高く、よく掃き清められた、落ち着いた聖堂だった。

　けして華美ではないが、長椅子にせよ金属の燭台にせよ埃ひとつ積もってはおらず、この村の信仰心の高さが窺える。日曜のミサにはさぞ人が集まることだろう。しわぶきひとつ起こらぬ空間で、誰もがありがたくあのデブ司祭の説教をいただいているのは、ある種宗教の原風景かもしれない。

　だが、一番目を引くのは、聖堂の奥だった。

「……黒いマリア」

　と、兄が呟いた。

　その通りに、聖母像が真っ黒に塗られていたのだ。救世主たる赤子を抱えてこそいたが、その佇まいは異質だった。背は高く、体つきもどことなく厳めしい。眼光炯けい々けいとこちらを見下ろす有り様は、慈母というよりも女将軍か何かを彷彿とさせた。

「あれは、どういうことかな。我が兄よ」

「……黒い聖母像は、稀にヨーロッパなどに点在している」

　ベルサックに気を遣ってか、小声で兄が口にした。

「モンセラートの聖母、ル・ピュイの聖母などが有名だが、これらは一般的なマリア像とは面立ちからしてかけ離れている。守護聖人などにも見られる現象だが、大地母神やキリスト教以前の信仰を吸収したものではないかと言われているな」

　似た話は、以前の講義でも聞いたことがあった。

いわく、聖母マリア信仰は、その子供である救世主や唯一神への信仰とはいささか違い、宗教の習合を伴うことがままあるのだと。元来その土地で信仰されていた神や精霊を、時には守護聖人として物語り、時には聖母の一面として祭り上げてきた。

こうした結果のひとつが、一般的な聖母像とは異なる──黒いマリア。

オリエント地方の一部では、いまでもこうした聖母像が崇敬されているというが、この小さな村の教会も似た経路を辿っていたものか。

もっとも、私の興味はあまり学術的な方向には発揮されず、

（じゃあ、もしもアレだとしても、少しは融通がきくか）

などと、密やかに計算を働かせていた。

この教会が、どこまで表向き通りの代物か、ということだ。

つまるところ、聖堂教会である。

（……もしそっち方面だとしても、この黒い聖母からして、ガチガチの過激派とかじゃなさそうだけど）

一口に聖堂教会と言っても、その内実は一枚岩ではない。

かの教会は、一大宗教組織の機密部門だが、その由来のひとつは各宗派が一堂に会した『普遍的公会議』にある。このため、聖堂教会の権威の範囲は旧教・新教・その他を問わず、世界でも最大の魔術基盤を獲得するに至っているのだ。

もっとも、このあたりのいわれは聖堂教会内ですら行き渡ってるわけではない。実態としてかなり旧教よりなのも確かで、一時は旧教の枢機卿が聖堂教会の幹部そのものだったと囁かれているほどなのだ。結果として、一部の過激派は旧教以外の完全排除も虎視眈々と狙っており、なんともきなくさい組織になっているわけだが……

（まあ、時計塔が言えた柄じゃないけどね）

なんせ内紛ならお家芸だ、ぐらいの我が古巣である。

日常茶飯事どころか、政治的バランスを含めて、もはや八割方は内部抗争で運営されていると言ってもよい。高尚な魔術の探求などどこへやら。うん、実にウキウキしてくる腐敗ぶりだね。人間たるもの、こうでなければ。

「──その聖母像が気になるか、魔術師」

後ろから、ベルサックの声がかかった。

兄が、小さくうなずいた。

「滅多に見かけないものですので」

「村に伝わる、古いものだとは聞いている。フェルナンド司祭なら、もう少し知ってるだろうが」

「……なるほど、このあたりなら島のケルトか？　いや根が別で、文化が交流していた可能性も……」

低い声で兄が呟く。本来の用事がなければ、一週間ぐらい泊まり込んでフィールドワークを始めていたかもしれない。

そんなところで、墓守が続けた。

「俺の家に案内する前に、聖母へ祈りを捧げてもらえるか。一応、この村の掟になっている」

言って、まずベルサック本人がひざまずく。

大柄なのもあいまって、祈りというよりも騎士の誓いのごとく見えた。

「魔術師でも許していただけるのでしたら」

すっ、と兄も同じく十字を切る。

まあ忌避感があるわけでもないので、こちらも倣った。なにしろ普段はほぼ無神論の徒のため、新鮮な気分もあった。いや、別に神様がいてもいいと思うんだけどね。多分、そいつは私とかなり似た性格の持ち主だと思うよ？

それから、ベルサックは教会の勝手口を出た。

　教会の裏側から視線をあげると、山頂近くのあたりに沼があった。厳重に金属の柵が張り巡らされていて、いくつもの石塚が建てられているのも見える。どうやらそこが墓地らしい。

　今回はそれを無視して、

「こちらだ」

　と、ベルサックが先導した。

　教会のほど近くに設けられたあばら屋が、すぐに現れた。

　人の家というよりは、大きめの物置小屋といった案配だが、一応家具が揃っているところを見ると、本当に住んでいるらしい。

　汚れた楢オークのテーブルに、珈琲をいれた真鍮のコップが並べられる。

　もっとも、こちらも珈琲というよりは泥水のような外見で、実際もわりと泥水のような味がした。さすがの私も初対面の相手の出した飲み物で顔をしかめるような度胸はないのだが、これに表情をゆがめないのはいささかならず努力を要した。

　こちらが一口飲んだのを確認してから、墓守──ベルサックが切り出す。

「どのようなご用かな」

「お願いがあって参りました」

　と、椅子から立ち上がり、我が兄は丁寧に頭を下げた。

「ブラックモア墓地の御高名は以前より伺っております。ついては、大変身勝手なお願いとは存じておりますが、どなたか墓守をお貸し願いたいのです。もちろん、相応の謝礼はするつもりです」

「……は！」

　と、顎髭をいじり、ベルサックが一笑に付したのだ。

「時計塔が、私たちに助力を求めるだって？　しかも、君主ロードのひとりが？」

黄色い歯を剝いて、大いに笑った。

しかし、兄はなんら表情を変えることなく、頭を下げたまま続けた。

「伏してお願いしたく存じます。付け加えれば、時計塔がではありません。私個人がです」

「……ふむ」

顎髭をなでて、墓守は青い目を細めた。

ふざけているのではない、と受け取ったらしい。汚れた顔の中で、その瞳だけがいっそ子供みたいに綺麗だと、こんな状況で私は自分でも意外な感想を抱いていた。

「個人がと来たか。てっきり時計塔の多くは、それぞれの派閥の権力抗争でいっぱいいっぱいだと思っていたが」

わお、こんな辺鄙な土地まで、古巣の悪口が伝わっていて微笑ましくなる。

「その認識を間違いとは思いません。ですが、それだけがすべてでもありません」

「根源の渦とやらを求めてのことかね」

ベルサックの声が、かすかに緊張を混じらせた。

ああ、なるほど。彼は正しく魔術を理解している。

根源の渦。

そうだ。魔術師たるもの、本来は誰もがそれを目指している。もっとも、根源の渦なんて名前は便宜上のものだ。本質的には言葉にする方が間違いで、まだしも「　」とでも言う方が近いのだとか。

時計塔の内部抗争ですら、基礎となっているのはそこだ。権力抗争にうつつを抜かしていても忘れられないほどに、あるいはうつつを抜かしてでも現実逃避したいほどに、誰もが希求してやまない絶対の一。

ほかと隔絶した──魔術師にとって究極の夢。

しかし、兄はかぶりを振ったのだ。

「今回についていえば、直結はしていません。根源の渦が万物の源にある以上、間接的につながる可能性は否定できませんが」

無駄に丁寧というか、生真面目な発言ではあった。

ベルサックの指が、テーブルの端を叩く。思案の時の癖らしかった。機械のように正確に時間を刻んでいくそれは、メトロノームのようだった。

「墓守を貸せ、か」

しばらく、沈黙が落ちた。

それを破ったのは、どちらでもなかった。

あばら屋の扉が、こんこん、とノックされたのだ。

振り返ると、至極ゆっくり木製の扉が開いた。

「……ベルサックさん」

目深にフードを下ろした、小柄な少女だった。

少女というのは、声音が可憐なそれだったからだが、声変わりしてない少年という線もあり得る。個人的な話をすれば、どちらも好物ではある。ほどほどに苦痛を与えて、泣き声をあげるところとか聞いてみたくなる。

「ああ、来たのか」

と、ベルサックはどこか面倒くさそうに口にした。

「あの……今日は訓練と聞いてましたが」

「それだが、珍しく客人でな。悪いが、今日は抜きだ。代わりに毛布を用意してやってくれるか」

「……分かりました」

　それだけ言って、フードの少女は退出していった。

　もうちょっと話を聞いてみたかったのだけど残念。というか、細い背中は強烈に他人を拒絶していた気もする。

　それから視線を戻し、改めてベルサックは口を開いた。

「とりあえず、君がまじめに言ってることは分かった。だが、こちらもその言葉をすぐさま受け止められる状態ではない。だったら、互いに時間が必要だろう」

　汚らしい服装とは裏腹に、至極丁寧にベルサックは受け答えしていた。

　窓の外を顎でしゃくって、とある方向を指し示す。

「村はずれに、狩りのときに使う小屋がある。今日はそちらで過ごしたまえ」

「感謝します」

　と、兄がもう一度頭を下げた。

「それと──この村に滞在されるなら、いくつかルールを守っていただきたい」

　と、ベルサックが言った。

　四本の指を立てて、

「ひとつ、最初に聖母像に礼拝すること。こちらは終わったな」

　まず、人差し指を折る。

「ひとつ、深夜には外に出ないこと。

　ひとつ、墓地にひとりでは近づかないこと。

　ひとつ、複数で墓地に行ったとしても、沼にはけして近づかないこと。

以上を、厳守していただきたい」

（……おや）

ずいぶんと、奇妙なルールだった。

聖母像に礼拝ぐらいは分かるが、残りは分かるようで分かりづらい。子供向けの説教というか、まるで古くさいホラー映画のような……

しかし、こちらが何かしら質問するより先に、墓守は厳かに告げた。

「守っていただけるよう、重々お願いする」

3

「―わあ！　これは明らかにダニとかいるだろう！　シラミもいるんじゃないか！」

　寝台の古くささと、毛布の黴臭さはいっそ感動的なほどだった。

　ベルサックに案内された、狩り用の小屋である。

　狩り用と言われたときから不安はあったが、さきほどのあばら屋以上の荒れっぷりだったのだ。一応、消毒用にいくらかの魔術を使ってはおいたが、これは薬草も持ってきておくべきだったと、わりと後悔した。植ユ物ミ科ナの講義はあまり受けてないのだが、こういうせせこましい分野には絶大な効力を発揮する。

　対して、兄は妙に手慣れた感じで毛布から埃を叩き落とし、さっさとくるまっていた。

　そういや、世界中旅行していたんだったな、といまさら思い出す。私にしても、昔はこういう生活ばかりだったので、少しためらってからえいやっと毛布を身体に巻いた。

　ひびの入ったランタンの火が、弱々しく揺れる。

　しばらくして、兄が呼びかけた。

「レディ。君がついてくる必要はなかったんだが」

「いやいや。兄妹としての共同作業というのは、実に愉しいじゃないか」

　薄暗がりに浮かぶ嫌そうな兄の表情に、つい快感を覚えてしまう。

　こちらが愉しんでいるのに気づいてか、ぐるんと兄は背を向けた。まあ背中にもいろんな表情があるのだけど、そこをからかうのは堪こらえて、肝心の質問を切り出してみる。

「で、我が兄に聞いておきたいのだが……勝つための手段ってのはなんなのかな？」

「話す必要はあるまい」

　にべもなく言い放つ、冷たい兄である。

「いやいや、君が第五次聖杯戦争に参加した結果、本来の兄──というか本来は叔父なんだが──ケイネス師みたいになってもおかしくないだろう。というか、普通に考えればばっちりそうなるぞ。だとすれば、鼠並みには臆病な君がどういう対策を練っているか、興味が湧いて当然だろう？」

「……」

「お、黙ってやり過ごす気か？　言っておくが、このへんは約束の範囲内だぞ。君の生命の有無は、エルメロイ派の進退を大きく左右するからな？」

　そこまで突っ込むと、あきらめたように兄が口を開いた。

「まともなサーヴァントに、魔術師が勝てる道理はない」

「……それはまあ、そうだろうね」

　納得出来すぎて、何ら感想が湧いてこない。

　サーヴァント。

　本来、魔私術た師ちの間では境界記録帯ゴーストライナーと呼ぶべき存在だ。

　遥けき『座』に記録された彼らへ、私たちはさまざまな方法で働きかける。たとえば召喚術を使って、彼らの能力の一部を短時間拝借したり、宝具のほんの一端だけを利用するなんかが代表例だろう。

　しかし、英霊の人格ごと、現実に召喚するなんて離れ業は、冬木の聖杯戦争をおいてほかにない。……少なくとも、私の知る限りでは。

　もっとも、冬木については、協会ではごく一部を除いてほとんど

知れ渡ってない。知ったところで、所詮極東の儀式に誇大妄想もいいところだと肩をすくめられるのが精々だ。先代のロード・エルメロイが死んだことによって、注目する向きもあったけれど、これとてごく一部の偏屈な魔術師の間で話題になった程度で、あっさりと風化していったものである。

（……あのへんも、どうもきなくさいんだけどな）

　情報操作とまではいかないが、誰かしらが手を加えた感じがなくもない。まあ、もともと極東は時計塔にとっては蛮地というべき辺境で、無視する方が自然なんだから、さすがに考えすぎかもしれないが。

「だが、サーヴァントにも共通点はある」

　と、兄は続けたのだ。

「彼らが、まず例外なく英霊であるということだ。サーヴァントは必ず霊体として召喚され、魔力を得ることで一時的な実体を得る。だが、いかに実体化しても本来は霊体であり、霊核も持っているんだ。そして、霊体であるからには専門家が存在する」

　そこまで聞いて、私はつい、あっと声をあげてしまった。

「君、まさか……墓守を借りたいっていうのは」

「ブラックモアの墓守──可能ならば、さきほどのベルサック・ブラックモアに、私の協力者として聖杯戦争へ付き添ってもらう」

　ひさしぶりに、まじまじと兄を見つめてしまった。

　といっても、こちらに背中を向けているわけだが、よくも平然と言ってのけたものだ。

「一応指摘しとくが、それは魔術使いの思考だぞ」

　いかに極東の例外的なイベントとはいえ、あれが魔術師たちの手になる儀式であることは変わりない。だとすれば、魔術師たちこそが主役だというのは暗黙の了解だ。華やかなる英霊もあくまで儀式の手段であり使い魔。親しい助手や部下をつけることはありえるだろうが、まったくの部外者を連れてくるなんていう非常識は、なかなか想像の及ぶところではない。

しかも、魔術師ですらない相手を？

発想として、魔術師からはありえない。魔術師たろうとするほどにありえない。

「まっとうな方法で、私がケイネス師より上を行けるはずがないだろう」

「いやごもっとも」

秒で納得させられる。

まあ、我が兄は先代に比べれば遥かに小心者で、用心深く、だからこそ生き残ったわけだが、勝ち抜けるかどうかとなるとまったくの別物だ。

「しかし……なるほど、あくまで悪霊とかエクソシズムとかの一種として、サーヴァントに対処しようというわけか」

「人間が生物というのと一緒だよ。あくまでより広い枠組みから見ただけだ」

兄の声が、かすかにくぐもった。おや、悪霊扱いしたのがお気に召さなかったか。

気づかなかったふりをしつつ、話を続ける。

「墓守の助力を得られそうかな？」

「さて。そもそも、ブラックモアの墓守の能力がサーヴァントに通じるかどうかも未知数だ。あくまで、私の予想では可能性がある、というだけだからな」

かぶりを振って、兄が言う。

「ただ、この村は思った以上に興味深い。ブラックモアの墓地という名ばかりが先走って、実態を知られることがほとんどなかった場所だが、あの黒い聖母像にせよ、さっきのルールにせよ、こちらの想像力を気持ちよく刺激してくれる」

「想像力を刺激、ね」

　時々思うけど、わりと我が兄はマッドよりというか、逆に真っ当な学者っぽい面が、魔術師としては強すぎる気がしなくもない。

「うん。だったら、やっぱり私が来てよかったんじゃないかな？」

「何の話だ？」

　そう言った兄が、振り返ったタイミングだった。

　小屋の扉の下から、銀色の液体がぬるりと染み出したのだ。

「――っ！」

　一瞬、息を止めた兄の前で、さらなる異変が生じた。

　水銀の表面がぼこぼこと泡立ち、見る間に金属色のメイドが現れたのである。

「タコ野郎Hello Boys！　帰ってきたぜI'm Back！」

　仇敵の宇宙人を見つけた酔いどれ親父みたいなアクセントで、楚々とした水銀メイドが挨拶したことも想像の内ではあったが、後でフラットをとっちめる気にはなった。あいつ、一体うちの月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムに何を教え込みやがった。

　一息ついて、我が水銀メイドへと話しかける。

「ご苦労様、トリムマウ」

「やっぱり連れてきてたのか」

　頭痛をこらえるみたいに、兄がこめかみを指先でつついた。

「せっかく自動制御機能があるんだ。使わない手はないだろう」

「列車の間はどうしてた？」

「うん。車両の底にへばりつかせていたよ。ほかの荷物も持ってこさせてる」

「まったくそういうのは得意だな」

「ふふふ、自慢の妹と言ってくれてかまわないよ？　時計塔に名高

きエルメロイ教室のダークホースなんて呼ばれ方も悪くないね」

　呆れたように、頬をひくつかせる兄へ、これ見よがしに胸を張ってみせる。

「で、トリムマウ。村の様子はどうだったかな？」

「はい。ベルサック様はさきほどの小屋で、フェルナンド司祭とシスターは教会で、それぞれ眠りに就いたようです。ほかの村人も外には一切出ていません」

「ふーん。とりあえず妙な動きはないわけだ。というか、ルールはみんな守ってると」

　顎に指をおいて、私も述懐する。

　単に娯楽がなくて、夜に出歩く必要がないだけかもしれないが、とりあえず旅人に適当なことを言っただけ……ではなさそうだ。

　ぱたん、と兄の上半身が倒れた。

「そのあたりは、明日にでも散策がてら調べさせてもらおう。……さすがに疲れた」

　最後の言葉は本音だったらしく、遅からず寝息が聞こえてきた。

　いつもなら、私の悪戯を警戒してるところだろうから、よほどだったのだろう。もともと持久力に欠ける兄が、急ピッチで山を登った末に、墓守との交渉までやったのだから無理もない。

　魔術で『強化』された瞳には、眉間に深く刻まれた皺もはっきり見えた。

　それが私の所有物になった証拠なら、もっと深くなればいいのに、とちらりとだけ思った。思ってから、いささか甘い考えだったかと反省した。刻みつけるなら、もっと深くて取り返しがつかない方がいい。一生憎まれるなんて最高だ。だって、一生忘れられないってことだろう。

「おやすみ、我が兄」

　言って、ランタンの火を吹き消した。

　数分して、一度だけ使い魔へ声をかけた。

「トリムマウ、いるか？」

「おそばに」

「手をつないでてほしい」

「了解いたしました、お嬢様」

　冷たい手触りが、指先に触れた。

　その温度を命綱みたいにして、私の意識は慣れ親しんだ暗闇に没していった。

✦ 第二章 ✦



1

翌日は、快晴だった。

私は、小屋の窓を開けはなって、早朝の光を浴びながら伸びをした。

山の上だけあって、初夏でもかなり涼しい。昨日はひたすら散らかり、雑然としていた小屋の内側だが、今は一通り掃除されている。無論、トリムマウが一晩でやってくれたものだ。

ついでに、私の目覚めに合わせて紅茶も用意されていた。

なお暖炉を借りた以外は、ティーポットや水も含めて、トリムマウにこっそり持参させてきたものである。昨日から自動制御をずっと続けてるせいで、いささか魔力を消費してしまっているが、背に腹はかえられない。

香気高い琥珀色を一啜りすると、ようやく意識が立ち上がってきた。

「そうそう。目覚めはこうでないと。やっと一息ついた気分だ」

「本日は豚肉のリエットも用意してございます」

「たっぷり塗ってくれ」

「承りました」

トリムマウが、バゲットに白いリエットを塗り込み、こちらの皿に載せてくる。頬張ると、食欲をそそる匂いが口いっぱいに広がった。滑らかな口当たりと肉の旨みに、ほどよい塩味がたまらない。

幸せな気分で紅茶をもう一口含み、鼻から抜ける香りを愉しんだ。

甘味はやや足りないが、ひとまずブラウニーチョコレートで妥協。脳に糖分が回ってくるのを感じていると、隣室の扉が開いた。

「優雅なものだな」

寝起きの兄が、頭を掻きむしりながら現れたのだ。

一応自分で髪をセットしたようだが、さすがにあちこち乱れているのは否めない。そういう好みの人間もいるだろうし……実のところ、聴講生を含めて何人かは思い浮かぶのだが、だからといって推奨する気にはなれなかった。

「うむ。昨日の墓守どのの珈琲は拷問一歩手前だったからな。兄も飲みたまえ」

「御相伴にあずかろう」

と、兄がテーブルの正面に腰を下ろした。

トリムマウが兄の分の紅茶も淹れた後、ついでに指先の一部を櫛状態に変形させて、髪も梳き始める。まだ半ば寝ぼけているようで、しばらくはううんと唸ったり、いつもの携帯ゲーム機ででも遊んでるみたいに両手の指を動かしたりと実に胡う乱ろんであったが、それでも紅茶を飲み、いくつかバゲットをつまむころには瞳に力が戻ってきて、やがては余計な言葉まで口走り始めた。

「なるほど。トリムマウへの仕込みは大したものだ。しかし、君もこういうお茶は、誰か友達とともに飲むといい」

「それは実に肉親らしい進言だね。覚えておくよ」

なにしろ、肝心の友達がいないのだ。

お茶にせよお菓子にせよ、毒やらなにやらを盛ったりしないと安心できる相手としか、一緒にできるはずがない。残念ながら、私が歩んできた時間はそういう人間とは無縁だった。それが悲しいかといえば、むしろ愉しんできたと告白するしかないのだが。

困ったことに、客観的に見て私の人生は幸せではないのだが、主観的に見ると極めて濃密な喜びに溢れていたと告白するしかないのだった。毒が盛られるなら保存食を、社交会で追い詰められそうならば根回しを、と嫌がらせの対策を講じておくのは、私にとって大いなる楽しみだった。

もちろん、それらの手はずを教えてくれた執事がいなければ、

ずっと昔に死んでいたのは間違いない。あれが離れてからもう数年ほどになるが、あれこれと叩き込んでくれたノウハウと性癖は、いまだ私のなかで息づいている。

　適当に受け流しつつ、肝心のところを切り出してみた。

「で、どうするのかな？」

「ベルサックさんは、ひとりで墓地に行くなと言っていたな」

　ぽつりと言った兄に、ふふんと私は鼻を鳴らした。

「ふたりなら、かね」

「ルールは守ってるだろう」

　つまらなそうに言った兄が、またバゲットを口にする。

　胃の痛みを訴えるわりに、別段胃弱というわけではないのだった。どちらかというと、食べるのは好きだが、そんな暇がないのでコストカット……というあたりだろう。それこそ人生の無駄遣いだ。娯楽愉楽悦楽以外の要素なんて、人生にいれておく隙間はないだろうに。

「まあ、墓地を見ておくのは賛成だよ。墓守を訪ねてきた以上、避けて通れないだろうからな」

　そこまで言って、残った紅茶を飲み干したときだった。

　入り口に、ノックがあったのだ。

「あの……おはようございます」

　と、極めて遠慮がちに、扉がほんの少しだけ開いた。

　開き方があまりにゆっくり、かつ糸のような細さだったので、一瞬魔術か何かかといぶかしんでしまった。それとも招かれないと入れないような妖物の類だろうか。向こうから見えないようにトリムマウだけは隠れさせつつ、私が応えた。

「ええと、入ってくれてかまわないが」

「は、はい……」

きい、と扉がもう少し開く。

それでもまだ、拳が入るかどうかで、かろうじて相手の背丈や服装ぐらいは分かるというラインだった。

灰色のフードを深くかぶった少女だった。

「あの……拙は、ベルサックさんから案内を承っていて……ええと、昨日ベルサックさんの小屋でお会いしましたけど……」

「ああ、もちろん覚えてるとも」

私がうなずくと、ほっと少女が息をついた。

よほど小心者なのか、単に外部の人間に慣れていないのか。どちらもありえるように思えた。

ちら、と兄を見やって、かまわないなと確認する。

好き勝手に動かれないように先手を打たれたな、という思いはあるが、それでも案内があるというのはありがたい。説明がなければ分からないことも多いだろう。それに、こっそり調べるなら、別に後からやってもいいのだし。

「では、兄ともどもよろしく頼む」

「……はい」

「待っててくれ。すぐに出るから」

取り急ぎ、トリムマウを変形させて、持ってきてもらっていたスーツケースに吸い込ませる。こちらは重量軽減の魔術がかかっているので、いちいち『強化』せずとも運搬には問題ない。

外に出ると、フードの少女はひどく頼りなげに空を仰いでいた。

あいにくなのか、似合いというべきか、ついさきほどまでとは打って変わって雲が出てきていた。しかし、曇天の下の彼女はその暗さにしっくりなじんでいる。

どこか、遠い冬の国の妖精に似ていた。

「や、お待たせした」

「……いえ。大丈夫です」

　すぐうつむいて、少女が否定しかけたところで、横風が吹いた。

　その風でフードがずれて、内側が覗いたのだ。くすんだ銀髪をシニョンにまとめた、実に可憐な容貌だった。こちらの目をまっすぐ見返せない内気さはいじらしいというか、私好みだ。つまりはイジメがいがありそうという言葉に集約される。

　が、連続して別の事態が起こったのである。

「わあっ！」

　素っ頓狂な声があがったのだ。

　それがここ三年ぐらいは聞いたことのない、完全に素の叫びだったので、私もつい振り返ってしまった。

「どうした、我が兄よ」

「……い、いやなんでも」

　片手で顔を押さえて、兄は乾いた声で否定した。

　だが指から覗く表情を、私ははっきりと目撃していた。

　あの顔色は知っている。我が兄にいくつかある強烈なトラウマが刺激されたときのそれだ。だが、私が秘密兵器として押さえている中でも、これだけの効果を生む大物があるかどうか。

　仰天した様子で振り返った少女もまた、何度か瞬きして、おずおずと尋ねた。

「あ、あの……何か？」

「その、大変失礼な願いだとは分かっているが、そのフードはもう少し深くかぶっていてくれないだろうか」

「……え」

　と、少女も硬直した。

　私も、正直びっくりしていた。基本的に女性に対しては物腰丁寧

な兄である。親しくもない相手にこんな不躾なお願いをするのは、君主ロードに封じてから初めて見た。

　だけど、異変はそれだけにとどまらなかった。

「い、いえ、かぶっていた方がいいんですね。分かりました。そうします」

（ん？）

　なぜだか、少女の声がいきいきと弾んでいるように聞こえたのだ。何これ？　私が知らない内に変則的なプレイでも始まってたのか？

「……本当に申し訳ない。個人的な事情でちょっと精神的な不調を起こしただけなので、気を悪くしないでもらえれば」

「いえ、とんでもないです！　お気になさらないでください」

　フードを押さえたまま、少女が首を横に振る。

　さらに、

「―イッヒヒヒヒ！　まさかのだな愚図グレ……」

　やたらと甲高い声音が湧きあがり、ぴたりと途絶えたのだ。

　思わず兄と顔を見合わせた私を前に、ぶんぶんと右手を強く振ってから、少女は何事もなかったかのようにこほんと咳払いした。

　きょとんとして、兄が尋ねる。

「……今のは？」

「……幻聴じゃないでしょうか。いえ、気にしないでください」

　真面目な声音で言い出すものだから分からない。

　他人のプライバシーはご馳走なので、是非根掘り葉掘りほじくり

返したいのだが、今切り込むと何かよくないものが噴火しそうなので、もう少し機会を見計らうとしよう。

「さあ、行きましょう。お好きなところに案内します」

　呆気にとられたままの兄から目をそむけて、フードの少女は促したのであった。

2

　少女の案内で村を歩き、住人たちと話した結果、いくつかのことが分かった。

　たとえば、ウェールズ地方とはいえ、基本的には英語が使われてること。

　もともとウェールズ語は、歴史的な経緯から話者が少なくなっており、一時期は人口の二割を割り込んでいたほどなのだ。最近になって見直しが始まり、文化振興の面から教育が施された結果、老人よりむしろ若者がウェールズ語を使うようになってきているのだが、この村にはそうした傾向も見られなかった。おそらく、あまり平地との交流がないからだろう。

　そして、意外とフードの少女が村人に尊ばれていること。

　全員というわけではないのだが、ちょっと話してみたいと水を向けると、半分ぐらいの村人はまずフードの少女に対して、極めて丁寧な礼をよこすのだった。

　まるで、貴人と出会ったかのように。

（……というか、腫れ物扱い？）

　けして、疎まれてるというのではない。

　むしろその逆で、聖像にでも向かい合うような敬虔さを感じていた。

　聖像、だ。

　ヒトに対するものではなくて、もっと根源的に──聖なるものへと向かい合っているかのような態度。もちろん司祭やシスターに対する場合も似た態度になるのだが、もっとずっと切実で、喜びに満ちた──奇妙な感覚を受ける。

（……じゃあ、なんで、彼女はこんなに物怖じしてるんだ？）

　こんな閉鎖された村で、それだけ崇敬されているなら、むしろ傲慢になるのが普通だろう。いやそれは私だけかもしれないが、臆病に育つとも思えない。

　いまいち符合しない状況に、胸の内でもやもやと疑問が湧き立つ。

　とはいえ、とりあえず地形は分かった。

　おおよそ村は、南北が凹んだ楕円──昔兄が極東のお土産でもらってきた瓢ひょう箪たんみたいな形で、中央には教会が、北側には墓地と沼が存在している。私たちが昨夜過ごした狩り用の小屋は、西側の村はずれに位置していた。

　その途中で、村の中央の教会にも立ち寄った。

「こちらは教会です。昨日案内されましたよね」

「ああ……聖堂に黒いマリアが安置されていたが、あのいわれは知ってるかな」

「いわれは……拙もよく知らないのですけど」

　一人称の発音に、ウェールズっぽいなまりがあって、そこも愛くるしい。いけない、どうもいつもの趣味が出て来そうになる。もうちょっと引っ込んでいたまえ私。

「……ただ、この村ではとても熱心に信仰されています。結婚や子供が生まれたとき、必ずあの聖母に報告に行くんです」

「ほう。子供の報告か」

　興味深そうに、兄が指先で顎元を撫でた。いつもなら葉巻を吸っているところだが、一応フードの少女に遠慮しているらしい。

（聖母については、やっぱり司祭を捕まえるしかないか）

　あいにく司祭は留守で、シスター・イルミアに白い目で見られたきりだった。これがご馳走だという向きもあるだろうが、あいにく私の趣味とは少し異なる。

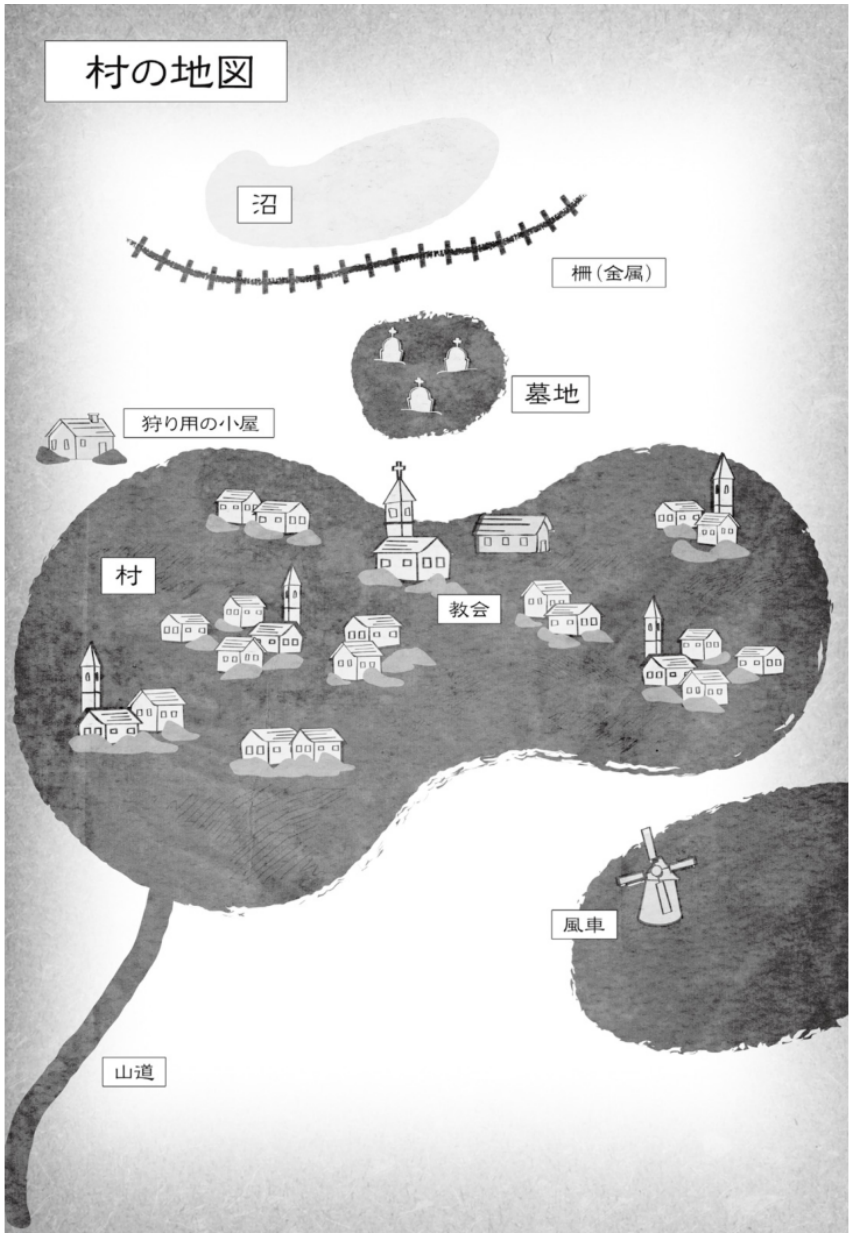
「まだ帰ってなかったわけ？」

　と、今度は耳打ちではなく、豚相手のように面罵されたのも、ひとまず胸にしまっておこう。あ、嫌な顔をされたのが、ちょっとぞくっときたからではないと主張しておきたい。

　それから、肝心の墓地へと辿り着いた。

　けして荘厳なものではない。それぞれの名前や簡単な経歴を書いた墓碑を突き立てているだけの代物だ。

　錆の浮いた鉄門には、鴉の紋様が彫られていて、我が兄は興味深そうに眺めてから尋ねたのである。


村の地図
沼
柵（金属）
墓地
狩り用の小屋
村
教会
風車
山道

「この墓地は、鴉を神聖視してるんですね」

「……はい。ベルサックさんが管理してらっしゃいます。オーナーは別にいるそうですが」

（オーナーか）

なんとなく、あのベルサックがオーナーのように思っていたが、そこは別らしい。

兄は、しげしげと墓地を観察していた。

曇り空にそそりたった石碑の群は、不吉というよりも虚ろという方が近かった。蒐集してきた死すらも灰になりはてるほどの時間が経過した……そんな印象を私は覚えていた。とはいえ、意外なほど汚れは少ない。ベルサックかこの少女かがこまめに掃除しているのだろう。

石碑にはそれぞれ名前や来歴が刻まれているが、奥の方ほど古くて磨耗しており、三分の一ほどはもはや読むこともできなかった。

その表面を指先でなぞると、石の冷たさが骨までしみるようだった。

この場所は、ひどく静かだ。

耳をすませば、彼方の時代の音が聞こえそうなほどに。

兄の言葉を借りるなら、墓地が死後の世界そのものであった時代。

フードの少女が、ふと口を開いた。

「……エルメロイII世さんは、どうしてここに？」

「ベルサックさんから聞いてないですか」

「あの人は……あまり余計なことを話さないですから」

まあ、なんとなくそんな気はする。有言実行というより不言実行タイプだろう。

　その隣を歩き、墓地のあちこちに目を配りながら、

「まあ、ちょっと手伝ってほしいことがありまして。墓守を貸していただけないかとお願いに来たんです」

　と、兄が説明する。

　少女は、何度か瞬きしてから、振り向いた。

「じゃあ、ベルサックさんが街に行くんですか？」

「もしも、お願いを聞いていただけたらですが。何かあるんですか？」

「……いえ、その」

　言葉を濁してから、少女は続きを口にした。

「拙は、この村を出たことがありませんから」

「一度も？」

「はい。一度も」

　灰色のフードが、上下する。

「あ、でも、たまに、定期図書館やいっぱい荷物を積み込んだ行商が来てくれるんです。子供の頃から、それをいつも楽しみにしてて！」

「図書館。本が好きなのかな？」

「はい、探偵小説とかが好きで、とりわけ古典が……」

　フードの少女の声は、つかのま弾んで、すぐにしゅるしゅると火が消えたみたいに沈んでしまった。

「……すみません。自分の話なんかしてしまって」

「あなたの話を聞いたんだから、謝る必要はないでしょう」

　微苦笑した兄が、首を横に振った。

「少し話しただけでも、あなたが何かに思い煩っていることは分かります。だけど、必要以上に、卑屈になる必要はないでしょう。もっと自信を持って話してもいいのでは」

「自信、ですか」

「ベルサックさんもあなたのことを信頼してるから、こうして案内を任せてるんでしょう。仮に、あなたがあなたを信じられなくても、親しい人のことなら信じられるんじゃないですか？」

「……」

　少女の右肩が、一瞬震えた。さっき甲高い声が聞こえたときと同じ感じだったが、今度は二度ほど右手を振ったきりだった。

　視線を合わさず、横を向いたままで尋ねた。

「あなたは、そうだったんですか？」

「なにしろ未熟者でしたので。まともに自信を持てたことなんか、それこそ一度もありません。それでも、そこそこの時間を生きれば、うっかり信じられてしまうような相手ができたりもします」

「……」

　右肩を押さえたまま、また少女は黙り込んだ。

　それから、兄が訊いた。

「ベルサックさんとはどういうご関係なんですか？」

　お、気になってたところに切り込んだ。

　ちょうど親子ぐらいの年齢差だが、親子とは思えない。かといって、ご近所づきあいというには微妙な距離感だった。

「先生、みたいなものです」

「先生？」

「拙も、ここの墓守になりますから」

「おや。家系か何かで？」

「ブラックモアの墓守は、村からひとり、次代の墓守を選ぶんです。とても昔から伝わるならわしだって言われていて……九年と少し前、ベルサックさんは私を選びました」

　なるほど、そういう仕組みだったのか。

　この村自体が、ブラックモアの墓地と契約してる感じだ。もともと墓地があってその周囲に村ができあがったのか、先に村があって後から墓地ができたのかは分からないが、墓守が途絶えないようにつくりあげたシステムなのだろう。むむ、こんなことを考えていると、なんだか兄のフィールドワーク癖が感染してきた気になるぞ。

「だけど……ダメなんです」

「何がです？」

　兄が問いかけると、びくん、と少女の背筋が震えた。

「どうした？」

「……拙、は」

　しばらく少女は外套の胸元を押さえていた。どうしてもおさまらない何かを、必死でせき止めているような姿だった。

　やがて、肺に詰まった石を吐き出すように言った。

「……拙は、霊が、怖いんです」

　霊。

　この場合、迷信ではない。

　現実に、亡霊や悪霊が存在することを、魔私術た師ちは知っている。だからこそ死霊術だって研鑽を重ねられているし、聖堂教会の洗礼詠唱だって大きな意味を持っている。似て非なる存在だが、英霊だってこの類型には違いない。

「変ですよね。ここは、とても古くて、とても由緒正しい墓地だって聞いてるのに。その墓地の墓守になろうっていう拙が、霊を怖がるなんて」

うつむいたまま、少女が告白する。

「でも、物心ついた頃からずっとなんです。だから、この村の墓地は有名なのに、拙だけはずっと近づかずにいたぐらいで……なのに、どうしてベルサックさんが自分を選んだのか……選んでしまったのか、分かりません」

それが、彼女に対する村人の態度と、少女自身との、乖離の理由だったのだろうか。

分からない。

ただ、少女はぎゅっと胸元で拳を握りしめていた。

「今だって、この墓地にいるだけで、頭がおかしくなりそうなぐらいなんです」

掠れた声音が、墓碑の間に流れていく。

ただでさえ小柄な少女は、もっともっと縮こまり、いまにも消えてしまいそうだ。

なのに、兄の言葉は、けして慰めるでも宥なだめるでもなく、生徒のレポートの講評みたいに淡々とかけられた。

「ベルサックさんがあなたを選んだのは、ただ単に、あなたが優秀だからでは？」

と、言ったのである。

「拙が……ですか？　まさか」

「もちろん、今の恐怖に対して、何らかの形での克服や昇華は必要でしょうね。ですが、魔術でも軽々に触れてしまう者より、その恐ろしさを知る者の方が大成することは多いものです。最初のつまずきは恩恵かもしれない」

よほど意外な言葉だったのか、少女が茫然と振り返っていた。

彼女がまっすぐ誰かと向き合っているのを見るのは、この村に来てから初めてかもしれなかった。

「つまずきが、恩恵？」

「時に、そういう場合もあるでしょう。もちろん、恩恵とするか呪いとするかは、本人次第ですが。……ふん、うっかりつまずきなんて理解もできない天才のような馬鹿より、よほど素晴らしい」

　最後のあたりは、わりとまるだしの私怨と嫉妬のこもった台詞だったが、聞き流しておこう。実際のところ、そこが理解できないせいで、かの問題児が他人と魔術を共有できないことも事実ではあるし。

　しばらく、少女は立ち尽くしていた。

　その顔がぐるりと振り返ると、墓地の入り口に、細い人影が佇んでいた。

「ああ、いた」

「母さん」

　涼しげなケープを纏う、優しそうな女性だった。

　年頃は三十半ばぐらいだろうか。際だった顔立ちではないが、ほっと息をつきたくなる柔らかさが、穏やかな表情に滲んでいた。

「よかった。もう礼拝の時間よ。さあ帰ってお祈りしましょう？」

「……でも、ベルサックさんから案内を頼まれて」

「ダメよ。墓守は大事な仕事でしょうけど、礼拝を欠かしてはいけないでしょう？　それに、この墓地が怖いってずっと言ってたじゃない。無理しちゃダメよ」

　にっこりと笑って、母親は少女へと一歩詰め寄る。

「だって、あなたは大切な身体なんですもの」

　奇妙な感じがあった。

　それは、母が子にかける言葉だろうか？　とてもよく似ているのに、ほんの些細な棘が肌に残ったような、痛みとむずがゆさの混じった感覚。ボタンを掛け違えたような違和感が拭えなかった。

こちらに視線を寄せて、母親が言う。

「お客人も、申し訳ありませんが、かまいませんこと？」

「分かりました。おおよそは案内していただいたので。どうもありがとうございました」

礼を言った兄に、灰色のフードの少女が未練ありげに振り向き、すぐにうつむいてから、一言だけ残した。

「あの、くれぐれも、沼には行かないようにお願いします」

「分かったとも」

と、兄が肯定し、確認した母親が少女とともに踵を返す。

「では、これで」

「待って」

と、兄がその背に呼びかけた。

「この子に、まだ何か？」

「ひとつだけ。……つい機を逸してしまっていたが、名前を聞いてもいいかな？」

少し間をおいて、

「……グレイどっちつかず」

と、少女は囁いた。

不意に、雲間から陽光がこぼれた。

「どうにもなれない、グレイです」

声が夏の風に紛れる。

温かな光を含んだ風なのに、なぜだか暗さを帯びた響きだった。少女の名にふさわしいかもしれなかった。

彼女と母親が去ってから、墓地の中をしばらく兄は周回してい

た。

　今度は葉巻を取り出して、いつものようにゆっくりとマッチで炙って火をつける。唇にくわえてから、グレイがいたときと同じく、何度も墓地をぐるぐる巡っていたが、しばらくしてから唸りをあげて髪をかきむしった。

「どうしたのかな、兄上？」

「……ああ。どうにもすわりが悪い」

「さっきの母親かね？」

「それもなくはないんだが、どうにもこの場所がしっくりこない。私の調査能力がもう少しマシならよかったんだが」

　しみじみとため息をついてから、兄が切り出す。

「すまない。ライネス、視てもらえるか？」

「ふむん？」

　面倒くさいながらに、言われるとおり、私は眼球の魔力を駆動した。ああ後で目薬をしなきゃいけないのが億劫だ。あれ結構な痛みがあるのだが、さすがにこの村で赤く光る瞳とか、お披露目するわけにもいくまい。

　すぐ、周囲の大マ源ナが浮かび上がった。

　都会よりはずっと活発化した魔力の有り様。墓地のあちこちに染み着いた念がもやのように浮かんでは消えて、安物のホラー映画みたいな案配だ。

「特に、異常はなさそうだが？　墓地ならこんなもんだろう」

「一ヶ所だけじゃなくて、全体を視て欲しい。焦点は定めずにぼんやりと意識を頭の上に持ってきて。魔眼だけで視るのではなくて、魔眼も自分自身も制御するもうひとりの自分をつくりあげるイメージだ」

「おいおい。どんどん授業みたいになってくるな」

文句を言いながらも、その通りに実行する。

眼を細めて、もうひとりの自分をイメージ。一応魔術の基本ではあるし、手こずる理由もない。ただ魔眼と同時にと言われると、かなり繊細な集中を必要とした。

ビジョンが、ゆっくりと変化していく。

（……なんだ、これは）

と、私は眉をひそめた。

さきほどフードの少女──グレイが話していた霊だが、おおよそは死者の思念が空間にこびりついたものだ。世界に刻まれた死者の癖、と言ってもいいだろう。ほとんどは大した時間をおかずに消え失せるのだが、時に土地や物品からある種の魔力を帯びて、長期間残存してしまう場合がある。いわくのある幽霊屋敷やマンションはこうしてできあがるわけだ。まあ、我が国はちょっと幽霊が好きすぎて、そういう物件がかえって値上がりしたりするのだけど。

「どうした？」

「いや、なんというか……こうして視ると、濃密なのに希薄だな、ここの霊」

兄の言葉に受け答えしつつ、私は魔眼からの情報に戸惑っていた。

魔力は極めて濃密で、残留思念も確かにとどまっているのに、とにかく個々の輪郭が曖昧だ。個々の霊と魔力との区別がほとんどできず、渾然一体となったもやとしか認識できない。

それでいて、単なる魔力とは異なる、奇妙な指向性も感じられるのだ。

私も死霊術は専門でないので、死霊にいくら嘆かれたところでそれを言語化できるセンスなどないのだが、その指向性に魔術師らしい好奇心が湧きあがるのを覚えていた。

まるで墓地全体が、ひとつの巨大な亡霊であるかのような──これがブラックモアの墓地か。

　その中で、淡く明滅する幾筋かの線が、私の瞳に映りこんだのだ。

「……これは、糸か？　これだけ何だか馴染んでないぞ」

　葉巻の煙で浮かび上がるような、触ろうとすれば逃げていくそのカタチ。

　墓地そのものとは明らかに異種の存在で、それを話すと、兄がしたりとばかりに指を鳴らした。

「ビンゴ！」

「む、目星がついてたのか」

「ああ、ここの墓地に、外から何かが干渉してる気配があった。君の眼ですぐ見つかるということは、偽装はしてないな。一応透明化はしているが、見つかったら見つかったでかまわないという腹積もりか」

「大した眼でなくて悪かったね」

　なにせ、魔眼としては半端ものだ。

　それでも兄が羨ましそうにするあたりは儲けたと思ってるが、正直現時点ではありがたく思うことよりも不自由なことの方が多い。目薬もそうだが、何度眼の痛みで、魔術の際に倒れたことか。もっとも、兄が指導するようになってからは、こちらの痛覚のギリギリを見極めているらしく、倒れかかったことはあっても倒れたことは最初の数度しかない。……くそ、スパルタ教師め。

「糸とやらが、どこにつながっているかは分かるか？」

「ちょっと待ちたまえ……あちらだな」

　と、私が視線をやった。

　沼とは反対の方角だった。

　そちらは小高い丘になっていて、見上げると、どうやら古い風車小屋が建っているようだった。

「……そういえば、たてつづけの客人だとか言ってたか」

　兄が囁く。

　初めてベルサックに会ったときの言葉だ。私たちのことを指して、彼はそんなことを口にしていた。

「ひとつ、会ってみるか」

3

丘からは、さきほどいた墓地と沼が見下ろせた。

「ははあ、あれが噂の沼か」

近づくなと言われているが、遠目に窺うぐらいはかまうまい。

意外と大きな沼で、さっきの墓地ぐらいはすっぽりとおさまってしまいそうだ。泥混じりで透明度の低い様子からすると、かつては足を滑らせた人間がそのまま浮かび上がらなかった……なんてことがあったのやもしれない。

（あるいは、有毒性のガスが発生してる可能性もあるな）

ぼんやりと、考える。

確か、鬼火現象ウィルオウィスプが発生する理由のひとつは、泥沼などから出る発火性のガスのせいとか言われてたはずだ。夢のない話ではあるが、世の中にそうそう本物の神秘が残っているはずもなく、おおよそはこんな事情に落ち着く寸法だ。

風車もすでに壊れてしまっているのか、それなりに風があるのに動く様子はなかった。

かつてドン・キホーテが怪物と思いこんで突撃した建造物は、いまや死骸のようだった。

併設された小屋の扉を、兄が叩いた。

返事はない。

「鍵は開いてるな。入らせてもらおう」

「おいおい」

引き留める間もなく、兄が扉を開いた。

　こんなとき、我が兄はむやみに思い切りがいい。遠慮なく踏み込んで、部屋の内側に眉をひそめた。

「これは……？」

　整った小屋の内側には、驚くほど現代的な機器が揃っていた。

　いや、それは本当に現代機器か？

　現代科学を嫌いがちな魔術師の中にあって、私は有利だからという理由一択でコンピュータにも手を出しているが、おおよそ見たこともない機種ばかりだった。水晶を削りだしたかのような直方体は、最近のスケルトン型コンピュータとも紛うが、キーボードやマウスといった当然あるべきインターフェイスも見あたらない。

（だとしたら……）

　ひとつの予想が、脳裏に閃いた。

　そうした機器を扱う一派が、存在するからだ。

　だが、普段その一派は地中に引きこもっていることで知られている。もぐらなどと揶揄されることもありつつ、けして無視できぬ程度には強大なる組織。

　兄の視線があがる。

　風車小屋の、狭い廊下に向けてだった。

　じっとりとした薄暗がりは、何十年も保管されてきたワインに似ていた。誰にもそのヴェールの内側を覗かれることなく、ひどくゆっくりと醸造されてきた薄闇。そんな妄想をかきたてられる時間の果てに、

「―カット」

　落ち着いた声が、こぼれた。ついで、足音。

　私の体重でも大きな軋みをあげるほど朽ちた場所なのだが、その相手の足音は猫みたいに小さかった。

　闇を割って金髪が現れ、長いケープの裾が揺れる。

瞼を閉じた外見は、二十代の半ばほどに見えた。だが、けしてその外見通りの年齢ではあるまい。

「カットと言うしかあるまいよ」

と、彼は端整な唇で囁いたのだ。

「仮にも現ノ代ー魔リ術ッ科ジの新しい君主ロードと院長が出会うところとしては、舞台のセッティングを間違えている。演出であれ脚本であれ監督であれ、大いに責任を問わねばならぬところだろう。素朴なつくりは悪くないが、劇的なシーンにはそれなりの体裁も必要だ」

「……ま、さか」

細胞のすべてが沸騰するかと思った。

その相手の正体は、あまりにも隔絶していた。いかに高名な墓地があろうと、こんな辺鄙な村に現れることが異常事態を通り越していた。

院長。

かの役職は、時計塔にも存在している。

ただし、ほぼ伝説上の存在と言っていい。十二の君主ロードを超える頂点。時計塔設立からずっと代替わりしてないとか言われてる魔術師は、私ですら直接拝見したことのない相手だ。

「ああ、本当なら玄関まで迎えに行くべきだったんだろうが、今日も日差しがきつい。いささか難儀な体質でね。一応対策は取っているが直射日光は煩わしい」

「……」

正直に言おう。

ブラックモアの墓地も墓守も、このとき私の頭からは吹き飛んでいた。この土地で起きたあらゆる出来事は、もはや遠い記憶となりはてた。軽い気持ちでついてきた兄の旅に、こんな相手が待ちかまえていると、誰が思うだろうか。

（……じゃあ、これが……）

　魔術協会はいまやほぼ時計塔をあらわす言葉となっているが、元来、三つの組織から成り立っている。

　ひとつは、もちろん時計塔。

　ひとつは、古き神代の魔術を奉ずる彷徨海。

　そして、最後のひとつは、西洋のそれとは異なる古き錬金術を旨とする異端──

「……ズェピア・エルトナム・アトラシア」

　兄が、低く呟いた。

　第三の魔術協会──アトラス院の院長が、そこに立っていた。



4

瞼を閉じたまま、ズェピアはゆっくりと口を開いた。

「あまり意外な顔をしてないな」

「もちろん、驚いていますよ。驚きすぎると表情に出ないだけで」

ズェピアの前で、兄が大きく息を吐き出す。

実際、緊張していることはこめかみを伝った冷や汗で分かる。驚きすぎてと言ったのは謙遜でも比喩でもなく、単なる真実なのだろう。もう少し衝撃度が低ければ、かえって卒倒していたかもしれない。

「アトラス院の院長が、こんなところで何を？」

「何、ちょっとしたデータ取りでね。しばらく滞在する予定だ」

気取った声音が、薄闇に響く。

今回ばかりは、私も兄に劣らず戦慄していた。

ばくばくと鳴る心臓は、もうほんの一押しで破裂してしまいそうだ。万が一にも、ここで兄とズェピアが臨戦態勢に入れば、魔術協会の歴史が変わりかねない。そんなことはありえないと理性が叫んでいても、予測不能の事態に恐怖が顔を覗かせてしまう。

兄が、視線をわずかに落とす。

「アトラス院のトップがこんなところにいて、不都合はないのですか」

「ははは。電話線を引くのもいやがる時計塔とは違う。もはや院長が星のどこにいても情報の共有には支障ないとも。だとすれば、少なくとも私個人についていえば、好んでもぐら生活をする必要もあるまい」

唇を歪めて、男は肩をすくめた。

「まあ、院長によってはまるで方針が変わるだろうがね」

いっそ芝居がかった仕草が、この相手には似つかわしい。彼の周囲だけ、銀幕をそのまま切り取ったかのようだ。

そうしたところは、やはり二十代の青年にしか見えない。青春というにはとうがたっているだろうが、まだまだ若さを謳歌している年代だ。……長寿に至った魔術師は多いが、これは異常だ。アトラス院の院長はもう数百年も代替わりしていないと聞いているのに。

いや、正直に言えば、すでに結論は出ている。

あまり考えたくない類の答えではあったが、すぐにズェピアの方から肯定したのだ。

「ああ。陽の光が苦手なんだから、とっくに気づいてるだろうね」

と、唇から剝き出した歯が、かすかに尖っているのを示した。

「以前から、私は死徒になっていてね」

これが、不老の理由か。

おおよそ現代では吸血鬼として知られる特性を、死徒は保持している。

つまり、不老長寿。

つまり、血液欲求。

つまり、陽光の忌避。

直射日光でないとはいえ、間接光は届いている。それでも動じてないあたり、なるほど対策は相当に講じているのだろう。

その頭が、ゆるりと巡った。

「こちらは、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテで間違ってないかな」

「……っ、ええ」

兄のみならず、私のプロフィールも把握済みということらしい。

「なるほど、今回の脚本は君たちふたりがここに来るパターンか」

「どういう意味かな」

こちらは兄が尋ねると、くるりとズェピアが踵を返したのだ。

「ズェピア殿」

「ワインでもいかがかね。エルメロイの姫君と、ロード・エルメロイ。いや、II世をつけた方がいいのだったか」

いつもの言葉まで先回りされ、兄が小さく息を呑むのが聞こえた。

こうもペースを握られっぱなしなのは、いままでにない事態だった。

「あなたは、ワインを飲むんですか」

「世間話と、こちらの性能分析を兼ねたいい質問だ、ロード・エルメロイII世。どこぞの小説ではないからね。嗜好品としては愉しむとも。それに、思考五番の演算結果によると、君はおおよその場合で情報提供を求める。お互い時間が貴重な身だろう。無駄にしないためにも、ここで交流を持った方がよいかと思う」

「……親切にどうも」

しばしの逡巡の後、兄がうなずく。

そのまま、小屋の奥へ通された。多分、もともとはベルサックが使っていたあばら屋と似たような構造なのだが、もはや別物だった。

さきほどの入り口もそうだったが、雑に木材が積まれただけの壁は隙間風ひとつ通さず、品のいいテーブルや椅子も置かれており、どういう絡繰りになっているのか、すうと浮き上がったワインのボトルが自動的に中身を注いでくれさえした。

魔術とは、多分違う。

古きアトラスの錬金術。

対峙しているだけで、暑くもないのに汗が滲み出る。自律神経が変調する。

おかげで、ワインの味さえろくに分からない。タンニンの苦みだけが喉を滑り落ちていく。それでもこちらが飲み込んだのを確認してから、ズェピアもゆっくりと自分のグラスを傾け、話を切り出した。

「さて、君たちが疑問に思いそうなところからいこうか。とりあえず、私とブラックモアの墓地との関わりから気になってるんじゃないかな？　たいていの脚本で、君は──こんなところで、あなたと出会っただけで、私たちは混乱しているという風に言うからね」

ひどく、奇妙な気分だった。

事件が起きてもいないのに、最初からネタバレをされてるような感覚。推理小説でラストから読んだりするのは好きなのだけど、他人にされるのはむず痒い。むしろ、痒くなる前から肌を優しく掻かれているみたい、とでも言えばいいのか。

「ブラックモアとは、もともとここの一族と縁がある、古い死徒の名でね」

と、ズェピアは言った。

「鳥を使役する魔術師あがりの死徒として、二千年以上前に名を馳せたんだが、残念ながらすでにこの脚本では滅んでしまっている。この一族は、死徒に敬意を表し、その名を使うようになったとのことだ。私もまた、彼といささかのつながりがあるんだよ」

「つながり、というと？」

兄が訊いて、ズェピアがうなずく。

「そうだね。かつての演算結果のひとつを紐解くなら……場合によっては、彼は私の同胞になっていたかもしれない」

「同胞？　千年だか二千年だか前の死徒が？」

「ああ、その場合、数としては二十を超えたろうかね。あくまで可

能性としてそうなりえたというだけなんだが、私にとってはそれなりに縁のある場所だ。もっとも、ブラックモアと同胞になる可能性は、私が生まれるより以前──いくつかありえた枝の最後でも、いまから千七百年近くも前に摘まれているがね」

（……）

　わけがわからない。

　何か重大なことを言われてるとは思うのだが、それがまったくつながってこなかった。

　死徒と出会ったのが、初めてというわけではない。時計塔の魔術師にも、そこに至る研究に血道をあげている者たちがいる。なにしろ、老いを気にしなくていいというのは大きいアドバンテージだ。根源の渦に辿り着くまで、どうやっても時間は必要になる。結果としてほとんどの魔術師は子孫に望みを託していくわけだが、教育や伝達上のロスを低減できるなら、少々邪法に手を染める者がいても自然だろう。

　だが、これは違う。

　大きなくくりで、ニンゲンと話している気さえしない。

　まるでネットに接続したコンピュータが、手順も前後の時系列も無視して、検索した情報だけをひたすら垂れ流しているみたいだ。

「もう少し付け加えていくと、この墓地をつくった一族は、死徒のブラックモアと同じく鳥を使役していた魔術師でね。人間を司る三要素、つまり肉体・精神・魂のうち、魂を運ぶものとして、とりわけ鴉を重用していた。このあたりは墓守も詳しいはずだよ。通常とは異なってしまっているが、今でも彼らは口伝による限定継承の魔術師だからね」

「待ってくれ」

　さすがにたまりかねて、兄が制止した。

「そんなことを続けざまに言われても困る。こんなところで、あなたと出会っただけで、私たちは混乱して──」

　そこまで言いかけて、言葉を切る。

　当然だろう。

　つい先ほど、ズェピアが予言した台詞そのものだったからだ。

「申し訳ない。気分を害するだろうとは思っていたが、話のコストは節約できるだろうと考えた。どうせ、後で似たことを訊きたくなるから、二度手間を避けられるのでね」

　しれっと、ズェピアは返した。

　ワイングラスを手にしたまま、兄は停止している。必死に抑えてはいても、朱色の表面がかすかに波立っていた。

「……未来視の魔眼か、何かか？」

「未来視とは違うな。予測の未来視とは確かに近しい部分もあるが、似て非なるものだ。たとえ物語としての制作過程が共通していても、小説とオペラはまったく違うものだろう？　ああ、せっかくだからチーズもどうかね。滅多に人など来ないので、遠慮しないでほしい。話を理解するためには脳へのエネルギーが不可欠だ」

　今更になってチーズと干しぶどうが追加される。

　どちらも、良質の品であることだけは、香りから察せられた。こちらもふわふわと皿ごと浮いてきてテーブルに載ったのは、さきほど墓地に漂っていたような糸を使っているのだろうか。

「じゃあ、一体あなたは何を言ってるんだ」

「可能性の偏在だよ。君がここを訪ねてくることはおおよそ確信を持っていたが、訪ねてくる中で、どの脚本になるかは限定しづらかった。たとえば、エルメロイの姫君を連れてくるかどうかは、あまり自信もなかったのでね」

「──私を、連れてくることが？」

　水を向けられて瞬きした私に、ズェピアは低い囁きを返す。

「私たちは可能性に生きている。千差万別に分岐する事象の、たまたまひとつの波にたゆたってるだけと言ってもいい。波を乗り換えることはほぼ不可能だが、ほかの波の形を演算・概算するぐらいはできる。多くの波を演算すれば、よくある脚本がどういうものかと

いうのも想像がつく」

　椅子に背をもたれかけさせて、アトラス院の院長は小さく息をついた。

　少なくとも、呼吸はするのだと思った。この相手と自分たちとの共通点を数えて何になるのだろうかと思いつつ、そうせずにはいられなかった。

「私は探偵じゃない。推理などしない。可能性は無限ではなくても無数に広がっているのだから、そのひとつずつを検証しきることなどできはしない。これは検証してる間に、ほかの可能性が生まれてしまうからという単純な問題だ。アキレスが亀に追いつけないのと同じだよ」

　ワインをくるりと回しながら言うズェピアは、延々とデータをテープで吐き出し続ける、古くさいＳＦ映画の計算機みたいだ。

　魔術師である私にさえ、ほとんど妄言としか思えない。

「可能性の分岐は、けして無限ではない」

　歌うように、もう一度ズェピアが言う。

「無限という広がりには、この宇宙さえも耐えきれないからだ。しかし、人類がすべてを把握できない程度に無数ではある。だから舞台や人物にも限定をかけて、計算できるところまで絞り込みをかけるのが、ズェピアという存在の歴史だったかもしれない」

「……」

　少しずつ、分かってきた。

　なるほど……ここにいるのは、計算の権化だ。

　魔術師とは似て非なるもの。科学とも遙か昔に袂を分かったもの。ひたすらに積み上げた数字と解析の結果は、この現実すらひとつのシミュレーションのようにしか見ていない。無数に計算してきた架空世界きゃくほんのひとつとして、あまりに俯瞰した位置から私たちと話しているのだ。

　同じ魔術協会でありながら、もはやその視点は別次元というほど

に離れている。格上とか格下ではなく、所有している前提や立っている土台が違い過ぎる。おそらく兄のような未熟な魔術師ではなく、ほかの君主ロードが立ち会っていたところで、この結果はほとんど変わるまい。

……そもそも、生きているのだろうか。

俯瞰しすぎた視界は、もはや単なる才能や技術の枠にはおさまるまい。

人は鳥になれない。ビルから落ちれば墜落するだけだ。あまりにも隔絶した高所から俯瞰しながら、ここから落ちれば楽になるという自殺欲求に何百年も耐え続けるのは、いかなアトラス院にとっても困難極まるミッションではあるまいか。

死徒となり、通常の生命活動すらとうにやめた思考機械は、一体どのように世界を見ているのか。

時計塔のいかなる魔術師にも覚えない悪寒を、私は感じていた。魔術の強大さや神秘の古さだけではない、まったく異質な能力と歴史に裏打ちされたもうひとつの魔術協会。

アトラス院。

かつては同じ魔術協会でありながら、道を分かった相手。

魔術の世界では、こんな言葉がまことしやかに伝えられている。

曰く、アトラスの封を解くな。世界を七度滅ぼすぞ、と。

兄は、小さくうなずいた。

「確かに、有意義な話だったのだと思う。いや、おそらく有意義な話だったと、後で気づかされるのだろうな」

「さすがだ、エルメロイII世。時計塔の魔術師の中でも、君はたいていの場合、そこに最速で辿りつくひとりだ」

「お褒めに与り光栄だが、多分自信が足りないだけだろう。簡単に他人の言葉を受け入れてしまうのは、実力が足りないと知っているからだ」

「それこそが世界をよりよくする要因だとも。君の影響は君が思っているよりもずっと遠くまで届く。君が世界に投げかける影は、君の人生の飛距離をも追い越していく。だからこそ、君の師が無為に失われたことにも意味があったと言えるだろう」

「ケイネス師のことを口にするな」

　初めて、兄が声を荒らげた。

　立ち上がった勢いで、椅子が後ろに倒れ、大きな音をあげた。

「……失礼」

　と、兄が頭を下げた。

「いや、私の方が踏み込みすぎた。ここは謝罪の代わりに、ひとつ警告しておこう」

　片手を挙げて、ズェピアが言葉を付け足す。

「君は、これからいくつかの決断を迫られる。どちらが良いなんて判断はできないが、舞台に立つ役者はそれなりの覚悟をすませておくのがよかろう。おそらく、この旅で君が選ぶ脚本は、聖杯戦争への関わり方を決定してしまうことになろうから」

「聖杯戦争……っ」

　呻きがこぼれた。

　ああ、そのためにこの墓地へやってきたのだ。聖杯戦争で勝利する手段を手に入れるため、兄はこの村を訪れたのだと話していた。ここまで万象を計測してやまないズェピアならば、その願望を知っていてもおかしくはあるまい。

　だが、聖杯戦争への関わり方が決定してしまうとは？

　疑問を晴らすより早く、異変が生じた。

　私たちが入ってきた通路から、もうひとりの人影が現れたのだ。

「……お前ら、どうしてこんなところに？」

　低い声音に、聞き覚えがあった。

「やあ、ベルサックくん。君はいつも時間通りだな」

　と、ズェピアはケープの内側から古めかしい懐中時計を取り出して、唇の端を薄くつりあげたのだった。

5

「まさか、あれと会っていたとはな」

　苦々しい声で、ベルサックは口にした。

　すぐ近くの、森の陰だった。

　風車小屋から離れて、移動してきたところである。

　ベルサックは、ズェピアとほんの数分ほど会話を交わしたきりで、すぐに兄と私を連れて、風車小屋を出てきたのだ。

　昼下がりの風に、梢が揺れている。

　私は、とりあえず密やかに呼吸法を行っていた。

　疲弊した脳が、まだ回復していない。あの相手と少し話していただけで──それも大半は兄に任せていたというのに、芯まで粘っこい疲労が張りついている。これでも海千山千の時計塔の俗物どもとそれなりに争っていた自信はあったのだが、かのアトラス院の院長はまったくの別物だった。

　こちらの認識も時系列も現実も、のきなみ攪拌されるような体験であった。アトラス院の構成員がみんなああだとは思わないが、仮にそうだとしたら、営まれる社会はどれほどの異形だろうか。むしろ、それは社会とさえ言えるのだろうか。

　少し間をおいてから、ベルサックが尋ねた。

「グレイはどうした？」

「母親が迎えに来まして」

「そうか」

　短く、ベルサックが呟いた。

　それから用心深く、こちらの様子を窺って、

「先に、確認しておきたい」

　と、持ちかけた。

「昨夜、お前たちはあの小屋から出歩いたか」

「ん？」

　それは、最初にベルサックが説明したルールだった。

　眉をひそめた兄が、訊き返す。

「いいや。それこそあなたに禁じられていただろう。どういうことかな？」

「……」

　少しの間、ベルサックは黙ってこちらを交互に見つめた。

　瞳の鋭さは鴉というより猛禽類に似ていた。細かく言えば、鷹よりも梟ふくろうか。重みさえ感じられる視線には、暗い森の智恵が秘められている。

　そんな感想を覚えていた私たちに、ゆっくりと彼は告げたのだ。

「昨夜、ひとつ事故があった」

「昨夜？」

「村で、タブーを破ったものがいた。破られれば、それと分かるようになっている」

　どんな仕組みだ、それは。

　というかその話を言っていないのは、ずいぶん意地悪いな。こちらが破っていれば、そら見たぞとばかりに駆け込んでくるつもりだったんだろうか。

　つい、私もぞんざいに手を振ってしまった。

「だったら、さっさと犯人を捕まえればいいだろう。それとも私た

ちだって言いたいのか？」

「あいにく、細かな状況が分かるほど便利なものじゃない。あくまで、いずれかのタブーが破られたというのが分かっただけだ。墓守の権限と考えていただきたい」

「墓守の権限？」

　監視カメラなんて現代的なものではなさそうだが、どこが変哲もない村なのやら。

（……魔術か何かか？）

　それなら、細かな状況が分からず、結果だけ出てくるのも普通だ。

　神秘というのはそういうものである。権能ならざる以上、神秘なりの理由や理屈は存在するのだが、外部の人間にとってはほぼブラックボックスに違いない。

（むしろ、なんでそんなルールがあるのかが気になってきたな）

　ここまで言って、ただの妄想である可能性さえ皆無ではない。

　とはいえ、そこまで考えていては堂々巡りになるので、ひとまずベルサックが正直に話しているという路線で、思考を組み立てる。

　タブーということは、ベルサックの話した四つの行為になる。

　つまり、

・誰かが黒いマリア像に祈らず、無断で村に入ったか。

・ひとりで墓地に立ち入ったか。

・沼に近づいた者がいたか。

・深夜に出歩いたか。

　このどれかだ。

　まあ破ろうと思えば、実にあっさり破れる気はする。

　同じことを考えたのか、兄も質問したのである。

「本当にこの村の人間は、誰も深夜に出歩かないんですか」

「ほぼいない。だが、皆無というわけでもない。子供が出歩いたりとかで、ままルールがひとつ破られることはある。……だが、今回はふたつ、ルールが破られていた」

　彼の言葉を信用するならば、片方は深夜に出かけていたになるだろう。

　いかなる方法で監視してるか分からない以上、あくまで推論にしかならないが、誰かが深夜に出てひとりで墓地に入ったか、沼に近づいたかということだ。

「……外部の人間が、深夜に村に侵入したという線もあるな」

　と、これは兄がひとりごちる。

　ああ、なるほど。その場合でもタブーふたつになる。田舎の奇妙なルールに翻弄されるのは、ミステリーとホラーの双方で見られる舞台仕立てだが、いざ自分の身に振りかかると、いささかならず面倒だ。理屈が見えてこないからこそ、その不気味さがじんわりと背中にのしかかってくる。

　ベルサックは肯定も否定もせず、じっとこちらを観察していた。

「もう一度、確認しよう」

　と、尋ねた。

「ロード・エルメロイII世。君は、墓守を借り受けたいと言ったな」

「ええ、言いました。ズェピア殿と話して、よりその思いを強くしました」

「ズェピアと話したことで？」

「この村の墓地は、とある死徒の名に敬意を表して、名付けられたものだと聞きました。その死徒は場合によってはズェピアの同胞になるかもしれなかった相手だと。そして、この墓地にはちょっとしたデータ取りに来てる……とも」

　我が兄もまた、瞳を墓守からそらすことはしなかった。

　互いの視線が、中空で絡み合うようだった。我が兄の胆力は強い方ではないだろうに、こんなときだけ意地を通すのを褒めた方がいいのか、さっさと逃げたまえ馬鹿とけなした方がいいのか。意外なことに、私の中でも答えが出ていない。

「だったら、さきほどのタブーも、アトラス院と関係してるのですか」

「ノーコメントだ」

　苦々しい表情で、ベルサックがかぶりを振った。

　それでも、兄はさらに粘った。

「アトラス院についてノーコメントとしても、この墓地が特別なことは確かでしょう。私が求めているのは、霊に対する専門家スペシャリストです。とりわけ強大な霊への対抗策を、この十年ずっと探し続けてきました。そのために仕事の合間を縫っては世界中を彷徨ってきました。何度も何度も期待しては振られてきましたが、だからこそ勘が磨かれたように思います。その勘が、ここには手がかりがあると訴えているのです」

「十年、か」

「はい」

　うなずいた兄に、なおさら墓守は強い声で問うた。

「……君はどうして、そんなものを求めている？」

「私の、個人的な欲のためです」

　聖杯戦争。

　兄の中心に食い入って、この十年近く彼を突き動かしてきた魔術

儀式。

　しかし、胸騒ぎもしていた。

　ついさきほど、ズェピアに釘をさされたばかりだからだ。初めて会ったばかりの相手に、この村での選択こそが、兄と聖杯戦争との関わり方を決定してしまうことになると。

「ふむ」

　と、ベルサックは白いものの交じった無精髭を撫でた。

　そのまま、指を村の出口へと向ける。

「お引き取り願いたい」

「どうか、ご再考願えませんか」

　と、兄は間髪容れずに申し込んだ。

「都合の良いことを言っているとは、重々承知しております。突然やってきた魔術師がこんなことを言えば、殺されても文句は言えないでしょう。それでも、私には成さなければならないことがあります。あなたは、きっとそのための道筋を手にしていらっしゃる」

「……」

　また、ベルサックは黙り込んだ。

　今度は、さきほどより、もう少し長かった。

　我が兄から外された墓守の視線が、直接は見えないが、墓地の方角へ注がれていることに私は気づいた。一体、どれだけの時間を、彼はそこで過ごしてきたのだろう。グレイはこの村から出たことがないと話していたが、彼はどうなのだろうか。

「……霊に対する専門家、か。君の勘は間違えてない」

　と、口にしたのだ。

　なぜだか、その声には疲れに似た何かが張りついて聞こえた。長く放置しすぎたワインに溜まった澱に似ていた。

十年間、時計塔でエルメロイ教室を開き、君主ロードに封じられ、それでもわずかな時間の隙間を縫っては世界を渡り歩いた兄にも、同じ澱を感じたのかもしれない。

ずっと同じ場所で過ごしていた墓守と、ずっと同じ目的に縛られていた魔術師。

まるで似ていないのに、どこかが相通じている。

墓守の口を開かせたのは、そんな共感かもしれなかった。

「あるいは、私たちにとっても最高傑作かもしれない。……だが、だからこそこの村から出すわけにはいかない」

「それは……」

しばし言いよどんでから、兄が切り出したのだ。

「それは、あの娘の顔が、かつてこのブリテンに存在したとある英雄と、酷似していることと関係してるのですか？」

突然の、大暴投だった。

英雄と顔が似てる？　なんだそれは？

だいたい、少々似ていたところで、一体今の話とどうつながる？

しかし、その大暴投の結果、大いにベルサックは動じたのだ。これまで一度として変わらなかった苦虫を噛み潰したような顔が崩れ、まじまじと兄を見つめ直した。

「……なぜ、そんなことを」

「彼女のあの容貌は、私がここを訪ねた理由と関係しているからです」

「……」

ベルサックは、しばらく押し黙っていた。

その瞳に、兄の姿が映っていた。貫いた視線の強さは、殺意と紛う。もうほんの少し踏み越えれば、ナイフを構えて兄の身体を抉ってもおかしくないと思わされるほどに。

数秒ほどで、それがゆるんだ。

自らを抑制するように、ベルサックは数歩離れてから、続けた。

「詳しく聞いておきたい。ただし、悪いが、妹君には遠慮していただいてかまわないか」

「む、私か――」

大いに抗議したいところだったが、ベルサックの瞳には否と言わせぬだけの力が込められていた。

今の兄の言葉が、それだけの効力を発揮したということでもあるだろう。

不満はあるからねと、片目をつむってつんけんしたアピールは忘れずに、肩をすくめる。

「はいはい。じゃあ、私だけ、借りてる小屋に戻っておけばいいかな？」

「そうしてもらえれば、ありがたい」

ベルサックの言葉にうなずき、私はさっさと踵を返した。

兄に手を振って丘を下りつつ、思考は今の話を反芻していた。

（……似てるって何のことだ？）

一体、この小さな村に何が隠されてる？

アトラス院の院長までがやってくるような秘密とは何だ？　ベルサックの話していたタブーとはどう関係している？　ブラックモアの墓地や、かつて滅びた同じ名前の死徒は何かの関連があるのか？

謎だらけだ。

これでもかと押しこめた、パンドラの匣でも前にした気分。

迂闊に触れれば、自分こそが災厄をぶちまけた愚かな女パンドラとなりはてるだろう。それはそれで愉しそうだが、安全圏は確保しておきたいのが人情だ。兄がそんな安全圏に無頓着なら、私がやっておくべきだろう。

しかし。

結果としていえば、そんな安全策には、何の意味もなかったのだ——

第三章



1

　──そして、時間は現い在まに戻る。

「うん、安全策には何の意味もなかった。なにせ、私が語れるのはここまでだから」

　と、ライネスが突然話を終わらせたのだ。

　もちろん、エルメロイの屋敷である。

　斜めに差し込んだ冬の陽光に、一瞬目眩を起こす。まるでタイムトラベルでもしてきたような気分だった。それだけの凄みが、ライネスの語りにはこもっていた。確か、伝承科ブリシサンでは過去の吟遊詩人に倣って、語り部としての技術も重視されるのだったか。

　同時に、自分の頬も熱く火照ってしまっていた。他人の口から自分のことを話されるのが、こんなに気疲れするものだとは。失礼かもしれないが、まともに顔が見られなくて、しばらくうつむいてしまった。

　深呼吸をしてから、自分はおずおずとライネスに尋ねた。

「え、と……そこで、終わりですか？」

「あの直後、兄は私を時計塔に帰したからね。あの兄が私に有無を言わせずにだよ。結界やら遅延魔術やらいろいろ用意していたのに、全部台無し。しかも、後から本人があの村から戻ってくるや否や、君を内弟子にするやらなんやら言い出して、エルメロイ教室も大騒ぎだ。生徒はともかく、内弟子を取ることなんかまずなかったし」

　肩をすくめて、彼女は憤然と鼻を鳴らした。

　実際、師匠がライネスに強権を発動するところなど、自分はほぼ

見たことがない。いまだって、何かの間違いじゃないかと耳を疑ったぐらいだ。

「……」

ともあれ、あまりにもぶったぎりではあったが、長い話だった。

うつむきつつ、沈思する。

長いだけでなく、自分にとっても謎の多い話であった。

たとえば、アトラス院のズェピアなどは、自分もほとんど接触がなかった相手だ。時計塔についての知識もなかったので、そんな大物という認識はまるでなかった。お隣でホームステイしてた相手が小国の大統領だったのだとか、いきなり知らされた気分だが、なんとか可能な限りに飲み込んでみる。

「──だから、ずっと君に興味があったんだよ」

と、頬杖をついたライネスがにやにや笑った。

「てっきり最初は、あの兄が妙なお人好しぶりを発揮したのかとか、はたまたいよいよ気になる相手でもできたのかとか、思っていたんだけどね。それにしても、いささか様子が違いすぎる。あれで、魔術師としての常識は意外と外さない男でもあるからな」

その評価は分かる。

師匠の鑑識眼はいろいろ破格だが、対して魔術師としての価値観は意外なほど基本的オーソドックスだ。むしろその価値観こそが、あの人をあの形にとどめている気もする。どうしようもない解体者でありながら、師匠はどこまでも魔術師であろうとしているのだから。

それから、ライネスはついと視線をあげた。

「思えば、あのとき、君の顔について兄は聞いたんだろうな」

「っ……」

一瞬息を止めて、自分はフードの内側に触れた。

「……前に、その話をしましたね」

　双貌塔イゼルマのときだった。

　黄金姫と白銀姫の事件の際、自分の顔が他人の借り物であることを、私はライネスにも打ち明けたのだ。

　ライネスはただ黙って、告白を聞いてくれた。慰めもせず、追及もしなかった。それだけで、どれだけ自分は救われただろう。

「じゃあ、改めて訊こうか。あの後、結局どんな事件があったんだい？　どうしてあの兄が君を内弟子なんぞに迎え入れた？」

「……」

　その質問に、胸が冷える心地がした。

　ずっと逃げていたこと。逃げていたかったこと。

　このロンドンに着いて以来、自分がけっして触れようとはしなかったこと。

　息を吸う。勇気が欲しい。せめて、この人にくらいきちんと話したい。だけど、一体どう話したらいいんだろう。頭の中はずっとぐちゃぐちゃなままで、かろうじてたった一言が喉から押し出された。

「死者が、出たんです」

　その言葉に、ライネスの眉がひそめられた。

「死者？　一体誰が？」

「……」

　数秒の沈黙の後、もう一言を絞り出す。

「……拙、です」

さすがに数秒、ライネスの表情が硬直した。

トリムマウは変わらずに、紅茶をサーブしてくれた。爽やかな香りは、今だけは心を慰めてはくれなかった。

「拙が、あの故郷で、あの事件で、死んだんです」

「あそこで死んだようなもの、なんて比喩ではない。そうだね？」

と、ライネスが尋ねた。

うなずくと、小さくため息をついた。

「そいつは、ずいぶんとややこしい。私のところに当時の話を聞きに来たということは、君にとってもいまいち整理し切れてない事件ということだね？　それでも、もう少し詳しく事情を聞いてもかまわないかな」

「その話は──少し後でもいいでしょうか」

「後、かね」

「はい。あの故郷に戻ってから、です」

「む。ついていきたいんだが、さすがに今、私が時計塔を離れると問題が出てきそうなんだよな……」

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの後始末も、完全には終わってないからな、とライネスが呟いた。

それも無理はない。君主ロードという立場は伊達ではない。

権力抗争など不得意な師匠が、しばしば時計塔を離れても無事でいられるのは、あくまで彼女のバックアップあってのことだ。もちろん、ほかの派閥みたいに地盤を確立していれば話も違うだろうが、エルメロイ派なんてちょっと隙をつかれればあっさり消え去りかねないような、弱小の立場なのだから。

彼女曰く、あっちを押してはこっちを下げて、時にはパーツを取り外したり、逆に無理矢理組み込んだりして、ひたすらバランスを取り続けるジェンガのようなものとのことだった。ほぼ二十四時間絶え間なく権謀術数が繰り広げられているという、この俗物らしい

有様こそ、かえって魔術らしいと思うのは、自分だけだろうか。

　軽くこめかみをつついてから、ライネスが口を開く。

「だけど、自分が死んだ故郷に戻るというのも穏やかじゃないな」

「それは……なんとかします」

「君が、ひとりで？」

「そのつもりです」

　と、うなずいた。

　フェイカーとの戦いでは、自分に足りないものを実感させられた。けして、勝ちたいというわけではない。そんな不遜なことを考えるには、相手は強大で、偉大すぎた。たとえ名前はなくても、その功績を歴史に刻んだ英霊とはこれほどのものかと、感嘆した。

　だけど、それでももう一度英霊と対峙するならば、まず自分の過去を直視しなければならないと、そんな風にも思ったのだ。

　だから、師匠の回復をこれまで待っていた。

　身の回りの世話をしているとはいえ、大したことができている自分でもないが、それでも突然いなくなってしまったら、それなりには不便だろうと思えたから。

「すぐに戻るつもりです。師匠にはそう伝えてください」

「うんうん。ちゃんと戻るつもりがあるなら良かった。これっきりのつもりだなんて薄情なことを言われたら、残ったお菓子を泣きながら食べないといけないところだった。あ、いや、トリムマウに捕縛させてもいいんだけど、君相手ではちょっと力不足だものね」

「それ……わりと本気ですよね？」

「くくく、理解してもらえるというのは嬉しいもんだ」

　口元に拳を重ねて、ライネスは嬉しそうに唇を歪ませる。

　よほどおかしかったのか大きく肩を震わせていたが、しばらくして目尻を指先で拭って、すっきりした顔を持ち上げた。

「まあ、個人的には君の意志も汲みたいところだが、そうはいかないだろうさ」

「……どうして、ですか」

「いや、単純な数字の問題だよ。ひとりじゃ無理だろう」

「ひとりじゃ？」

　疑問符を浮かべて、自分は振り返った。

　扉がノックされたのだ。

　少し間をおいて、開いた隙間から、長身の人影が滑り込んだ。見慣れたその長い黒髪も、今朝に自分がセットしたものだったことを思い出す。

「失礼する」

「……どうしたんですか、師匠」

　最前まで勝手に時計塔を離れる話をしていたので、うつむいて気まずさを隠した。

　対して、

「……いや」

　と、一瞬言葉を濁し、師匠はすぐに奥の相手に向き直る。

「ライネス」

「ん？　何かな愛しい兄上」

　わざとらしい呼称にむすっとした顔を隠さず、師匠はこう申し出たのだ。

「一週間ほど、スラーを離れさせていただきたい」

「おや、またか。君、君主ロードとしての自覚が足りないんじゃないか。いやあ困ったなあ。いまだに仕事が山積みなんだがなあ」

　いかにも弱った風に、ライネスが手元のフォークをくるりと回

す。

　もちろん、嫌がらせである。

　師匠も重々承知しているはずだが、だからといって無視できるような性た質ちならば、そもそも君主ロードになることなどなかったろう。

「可能な限り連絡は取れるようにしておくつもりだ。もともと聖杯戦争に参加するべく、以前から手配もしていた。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの後始末が生じたのは想定外だったが、君なら十分こなせるだろう」

「ふむ。高評価なのはありがたいが、可愛い義妹の過労にもう少し気を遣ってくれたりしないかな？　ばたんと倒れて意識不明になった義妹を前に、あのときもうちょっと優しい言葉をかけておけばなんて泣くのは嫌だろう？」

「だったら、私にも気遣いをお願いしたい。植ユ物ミ科ナの胃腸薬にも限度はある」

「ははは。手術の際には魔獣の胃でも移植すべきかもね。──で、一応、目的地は訊いておこうか？」

「……ああ」

　ちらとこちらを窺ってから、諦めたように師匠は答えを告げたのだ。

「もう一度、グレイと一緒に、ブラックモアの墓地へ向かいたい」

＊

　その言葉に、自分は思わず振り向いていた。

「どうして……師匠まで……」

「私も、君がライネスに同じ話をしていたとは思わなかったが」

　頭痛をこらえるみたいに、師匠が眉間へ指をやる。さきほどの話が聞こえていたのだろう。刻まれた皺がますます深さを増すことに、かすかな胸の痛みを覚えた。

　そんなこちらの様子を見て、ライネスはふふんと鼻を鳴らした。

「まあ、そんなことだろうと思っていたから、こちらはかまわない……と言うしかないがね。兄よ、せめて内弟子にくらいはきちんと話しておきたまえ。一緒に行くというのに、事情を話してないなんて、生徒なら単位未修で叱責されても仕方ないだろう？」

「……もともと話すつもりだった。少し順番が変わっただけだ」

　こほん、と師匠が咳払いする。

「いくつか理由はあるが、先に確認しておきたいことがある」

「……っ、はい」

　まっすぐ、師匠と向かい合った。

　ひとりでも故郷の墓地に戻ると言ったところだけに、こちらも同じように見返すのはひけめを感じたが、なんとかちっぽけな勇気を振り絞った。

「以前、君を連れてくるときにも話した。君を誘ったのは、けして利他的な理由ではない。何も知らない無む辜この者を、私個人の戦いに引きずり込もうという、極めて独善的な観点からだ」

「……はい。聞かされました」

「安全どころか、命の保証もない。報酬は出すとベルサックに約束したが、そんなものが君にとって意味があるかどうかというと、ないよりマシ程度のものだろう」

「はい」

　と、自分はうなずいた。

　なるほど、都会で生きるのに金銭は必要だろう。だけど──少なくとも、山を下りたばかりの自分にとっては、生き抜くことが目的になっていない。どこで倒れようとかまわず、心が動くこともないな

ら、報酬など意味を持たない。

　かつての自分は、そんな存在だった。

　かつての自分は、そんな存在でいられた。

「だからこそ、君を内弟子にしようとした。あの山を下りて時計塔の近くで過ごす以上、君主ロードとの関係を世に示すことで、せめても君を護れるかと思った。姑息な手段と笑ってくれてもかまわない」

「……そんなの、今更ですよ師匠」

　言い返すと、師匠はびっくりした顔になったが、そんなの本当に今更だ。

　師匠のやってることなんて、だいたいその場しのぎの連続だろう。魔術師としての地力が足りないのだから、常にどこかから借りてくることになるし、そんな手段は正道や王道とは呼べないだろう。……だけど、一時しのぎだろうがなんだろうが、最後まで続けようとするならば、それはけして非難されるような事柄ではあるまい。

　そう思うようになったのは、いつからだろう。

「拙の知ってる師匠は、いつも貧弱で、必死で、生きあがいて、手段のひとつも選びません。だから、今更そんなことで笑えって言われても、困ってしまいます」

「ライネスに感化されたんじゃなかろうな、君」

「かもしれません」

　だったら、とても嬉しい。

　つい唇をほころばせてしまうと、師匠は小さくため息をついた。

「……まあ、紅茶を飲める相手ができたなら良かったが」

　囁きとともに、師匠がちらとライネスを見やると、向こうは素知らぬふりでトリムマウから焼きたてのスコーンを受け取っていた。香ばしい匂いに、ジャムをたっぷりと塗って幸せそうに頬張ってい

る。

　目の前で起きてる話はかなり深刻な類だと思うのだけれど、そんな場合でもいつものようにお茶とお菓子を楽しめるのは、彼女独特の強さだろう。多分。

「……」

　なんとなく、自分の気持ちも落ち着いた。

　彼女の意地っ張りと誇り高さから、何かしらの影響を自分が受けられているなら、こんなに嬉しいことはないと、そう思えた。

　だから、師匠に視線をあげた。

「拙は、師匠についていきます。師匠が我が儘でもなんでも関係ありません。そんなのはずっと前から承知してることです。だから、師匠がもう一度ブラックモアの墓地を訪ねたいという、その理由を聞かせてください」

「……分かった」

　と、師匠もうなずいた。

　少し間をおいて、こう続けたのである。

「あの村には、ドクター・ハートレスの手がかりがあるかもしれない」

　その意味を咀嚼するのに、一呼吸ではすまなかった。

　結びつくとは思われなかったふたつが、ともに提示されたとき、思考は見事に断絶した。

「……どう、して」

「ああ、誤解しないでほしい。別に事件の犯人とかそういうわけじゃない。イゼルマのときだっておそらく関わってはいたが、犯人ではなかっただろう。……あ、いやその説明もしなければならないか」

「ええと、橙子さんの報酬になった呪体の闇オークションで、イゼ

ルマ家に出資したのがハートレスではないかって仮説なら、ライネスさんから聞かされました」

「む、そうか」

　ばつが悪そうに、師匠が唇をへの字にする。

　それから、こんな風に質問した。

「あの風車小屋で、ズェピアと会ったときのことも、ライネスから聞いたかな？」

「……あ、はい」

「当時は聞き流してしまったが、今にして思い返せば、少々気になる言い方だった。──彼はね、新しい現ノ代ー魔リ術ッ科ジの君主ロードと、私のことを言ったんだ」

　確か、ライネスからの話だと、こんな風だったろうか。

　──『仮にも現ノ代ー魔リ術ッ科ジの新しい君主ロードと院長が出会うところとしては、舞台のセッティングを間違えている』

　人づてなので、どこまで正確かは分からないが、おおよそこんな言い回しだったはずだ。

　ひとつうなずいて、師匠が続ける。

「もちろん、あのアトラス院の院長なら、何を把握していてもおかしくあるまい。しかし、私が君主ロードになったのはもう七年前だ。わざわざ新しいなどという形容詞を使うには微妙な時期だろう。そしてグレイ、あの風車小屋に客人が住まうようになったのは、どれぐらい前のことだ」

「え、えっと……師匠が来る、一ヶ月前ぐらいだったと思います」

　直接会ったことはほとんどなかったが、風車小屋に客人が来たことはベルサックから聞かされていた。十年から二十年に一度ほど現

れるということで、都会にはそんな趣味の人間もいるのかと不思議に思っていたが、今思えば、その段階でどうしてもうちょっと尋ねておかなかったのか。

　あの頃の自分は、多くのことに興味がなかった。

　いや、違う。

　興味がないふりをしていただけだ。そんなことはどうでもいいと思いこんでいれば、こんな田舎に引きこもっていることも、理不尽なルールや古い掟に縛られていることも、何ひとつ考えずにすんだから。一番楽だったから。

　だけど、悔いても仕方ない。

　悔悟を胸の奥に押し込めて、尋ねる。

「だったら、その間……」

「ああ。おそらくは、その一ヶ月の間に、ドクター・ハートレスは、あの山でズェピアと会っていた可能性がある」

　と、師匠は口にしたのだ。

「無論、あの山で出会ったとは限らない。ズェピアはアトラス院に居住を限定していないようだったからな。比較的最近、あの村とは別のどこかで、邂かい逅こうしただけという可能性もある。だけど、単なる偶然とも言い難いだろう。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの発言からすると、ハートレスは以前から私に興味を抱いていたようだからな」

　確かに、偶然とは片付けられまい。

　あんなウェールズの山奥で、アトラス院の院長と時計塔の君主ロードが出会うこと自体、ほぼありえない出来事なのだ。その院長が、近い時期に先代君主ロードとも出会っていたのも偶然だなんて、いくらなんでもできすぎている。

　だったら、あの村にハートレスも訪れていたという方が、まだつじつまが合うだろう。

　でも、それは一体どんな理由で？

ハートレスの行動には、どんなホワイダニットが隠されている？

「……」

胸の内側に、得体の知れぬ黒雲がわきあがる。

張り巡らされた蜘蛛の糸を想像した。小説フィクションの話だが、世界最高の諮問探偵のライバルは、自分の姿を現すことなく無数の人間を操って思い通りの結果を導き出したという。いつのまにか、そんな相手に搦め捕られていた気分。

「どうだろうね。彼がそういうタイプの策略家だとは、あまり思っていない」

不安を打ち明けると、師匠は軽くかぶりを振った。

「これまでの行動から察せられる彼の思考は、確かに賢明だが、迂遠ではない。通常の規格とは異なれど、むしろ積極的な方向性とただならぬ好奇心が見て取れるぐらいだ。でなければ、あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、私たちを観察することなどせずに、さっさと降車していただろう」

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンにおいて、彼の目的はサーヴァントを召喚することだったと、師匠は看破した。その目的さえ果たせばさっさと退場できたはずなのに、師匠を観察したくなって居座ってしまったのだと、ハートレスも告白していた。

確かに、こうした行動からすると、ハートレスはずいぶん積極的に思える。

「だったら、どうして……」

「……それは……」

言いかけて、師匠はかぶりを振った。

「いや、これ以上は推論に推論を重ねることになる。曖昧な推論まではいいが、いくつも重ねて思いこめば、真実を見過ごす可能性を増やすだけだろう」

「いいかな、兄上？」

　と、ライネスが手をあげたのだ。

「まあ探偵というのが大抵そうであるように、我々は受け身の姿勢になっていたわけだが、そろそろ攻守ところを変えたい。我が兄が言いたいのはそんなところだろう？　ハートレスの手がかりが見つかれば、先手を打てるかもしれないからね」

「……ああ」

　渋々うなずいた師匠に、続けてライネスは言葉をぶつけた。

「だが、このまま黙って見送るわけにはいかない。グレイは優秀な護衛だけど、相手がハートレスやあのフェイカーとなると万全と言えまい。だいたいグレイの話だと、彼女が時計塔にやってきた際の事件だって、解決しきったわけじゃないのだろう？」

「もちろん、その通りだ。サーヴァントは魔術師を超越している。私がもう少し有能なら、対霊の専門家として、グレイの能力をもっと活かせるかもしれんがね。……というわけで、今回はフラットとスヴィンに協力を願った」

「ほう。あのふたりに？」

　かすかに動揺した口調で、ライネスが瞬きした。

　自分もちょっと驚いて、師匠を見返してしまった。

「生徒に頼るなんて、珍しいですね」

「なにしろ、私では解決できなかった事件なのでね。万全を期すならば、恥を忍ぶしかあるまい」

　視線をそらして、憤然と師匠が言う。よほど気に入らないのだろう。

　でも、ひとつだけ嬉しかった。

　多分、覚えていてくれたのだ。

　先月の事件の最後に、師匠は「一緒に戦ってほしい」と言った。自分だけじゃなくて、フラットやスヴィンにもその依頼を持ちかけてくれた。あれは一時の弱気が口走らせた変節ではなくて、熟慮と

信頼による覚悟の言葉だったのだと思えて、今になって胸に染み入るようだった。

「……どう思う、アッド？」

　いつもならからかってきそうな相手が、今回はずっと黙っているので、こちらから声をかけてみる。

　もっとも、匣は沈黙のままだった。

　珍しく気を利かせたのか、まだ眠っているのか。

（……アッド？）

　一瞬疑念が頭をよぎったが、師匠が口を開いた。

「出発は明後日の予定だ。それまでに何かあれば、知らせてほしい」

　と、この場を締めくくったのであった。

2

　翌々日の朝は、あっという間に訪れた。

　一通りの準備をして、師匠の荷造りや時計塔を外している間のスケジュール作成を手伝い、必要な食事と睡眠を取るだけで、もう朝になっていた……という感じだ。

　ライネスが言ってた通り、早朝から列車に乗り込み、首都カーディフについてからはひたすらバスに揺られて、ほとんどほかの客がいなくなった停留所から、徒歩で山道を登り出す。

　やっぱり師匠の足にはきついみたいで、時々休憩をいれていた。

　それもライネスの話通りだな、と思うと、少しだけおかしかった。

「ほら、謎の沼でしょ！　ホラー映画だと、ここはホッケーマスクかぶった怪人の出番だと思うんだよ！　チェーンソーもってバルバルバルバルって！　やっぱりカップルとかからざっくり行くのがお作法かな。やるなら鉈なた？　それともナイフがいい？」

「その映画なら、チェーンソーは使ってないんじゃなかったか？　というか、トリムマウがまた余計な台詞を覚えてたのはお前の仕業だな」

「芝刈り機だってチェーンソーだって人殺しに使えば一緒だよ！　それに、名言再現最高じゃない！　きっと流行るよ！　特に意味なく映画やゲームやアニメの名言垂れながす人工知能が、世界中のインターネットを闊歩する日も近いって！」

「魔術師が言うのもなんだが、科学の無駄遣いにもほどがないか」

　フラットとスヴィンのふたりは、道中もずっと無駄話をしたり、フラットが笑って逃げ出したり、スヴィンが魔力を込めて歯を剝き出したりして、さまざまに交流していた。時々加熱しすぎて完全に魔術戦になる直前で、師匠が間に入ったりしてたけど、よほど仲が

いいのだろう。自分がその中に入れないのはちょっとだけ残念だけど。

　というか、近づくといまだにスヴィンに威嚇されるので、どうしても今一歩の距離が詰められない。師匠に止められているのもあるのだけど、やっぱり初対面がよくなかったのだろう。あのときはスヴィンがぽかんと口を開いたまま、こちらをずっと見つめていて、ただ鼻だけがひくついていたのを覚えている。自分の服装は確かに田舎臭かったかもと思うのだけど、あんなに見られるほどおかしかっただろうか。

「……んん」

　スカートをちょこんと引っ張ってみる。

　以前ライネスが選んでくれたそれは山歩き向きではないけれど、どの道、これぐらいの山道なら自分には平地と変わりない。

　後ろを振り向くと、二度目の休憩で、師匠は樹木にもたれかかっていた。

　思い切り息を荒らげたいだろうに、ゆっくり深呼吸を繰り返しているのは、自分や生徒に見栄を張っているからだ。そんな師匠を昔はいぶかしく思っていたが、今は親しみの方が強い。まったく同じことなのに、どうして世界はこんなにも違って見えるのだろう。

「……不思議な感じがします」

　と、自分は口にしていた。

「不思議？」

「はい。拙は、この山を下りたことがずっとなかったですから。それが山を下りて、こうして戻ってくることがあるなんて、それこそ夢にも思いませんでした。こんな風に、自分から望んで戻ってこられるとはもっと思いませんでした」

　自分の感想を、なるべく淡々と話す。

　そうしないと、何かが溢れでてしまいそうで。

「ありがとうございます」

　と、自分は頭を下げた。

「こんな風に、苦しいだけじゃなくて戻ってこられて、それだけでとても嬉しいです」

「……もとより自分のためだ。君に礼を言われる筋合いじゃない」

　と、師匠は唇をとがらせた。

　それから、少し言いにくそうに、表情を曇らせた。

「悪いが、顔は変えさせてもらう」

「顔、ですか」

「単なる幻術だが、村人には十分だろう。……もちろん私の術式じゃなくてフラットにやってもらうが」

　言って、師匠がちらりと視線を動かすと、その延長上でフラットならざるスヴィンがあわてて手をあげた。

「ぼ、僕じゃないんですか、先生！」

「獣性魔術はこうした技術に向いてないだろう」

「い、いえ！　それ以外の魔術だって修めてますし！」

「君の典位プライドは特化した獣性魔術が評価されたものだ。今の段階で、この手の技術に迂闊に手を出して、特質を鈍らせる必要はない」

「う、ううう……」

　なぜだか無念そうにスヴィンが肩を落とし、その隣で得意満面のフラットが胸を張る。

　このふたりは、いつも対照的だ。性格も行動も、扱う魔術だってまるで正反対に見えるのに、時々はっとするほど似ている。それとも、誰だってそんな風なんだろうか。……自分だって、誰かとこんな風になれるんだろうか。

「はい、というわけで俺にお任せ！」

ニコニコしたまま、フラットが躊躇なくこちらの顔に触れた。

「干渉開始ゲームセレクト」

気軽な声とともに、びりっ、と軽い電流のようなものが頬を走った気がした。

電流にふさわしく、刺激はほんの一瞬。炭酸水の泡が弾ける程度。

それで、

「はい、状況保存クイックセーブ」

ぱんぱんと手を叩いて、どこからか持ち出した鏡をこちらに向けたのだ。

「フラット、鏡に幻術は効かな──」

言い掛けた師匠の、声が止まった。

そこには、まったく違う人間の顔が映っていたからだ。

「ふふふ、周囲の光を歪めてみました！　だって鏡なんてどこの家にもあるでしょ。幻術をかけるなら人間じゃなくて光の方に限りますよ！」

師匠が茫然としていたのは、それがいつものように常識はずれなフラットの所業によるものもあるだろうが、今回はそれをとがめるより先に、こちらへ視線を戻して瞬きした。

頬に手をあてたまま、自分が硬直していたからだ。

「グレイ？」

「……えと、嫌だった？」

これはちょっと心配そうに、フラットが尋ねた。

さらに数秒して、

「……いいえ」

と、自分はぼんやり首を横に振った。

「……いいえ、ただ、凄いなって」

「凄い？」

「だって、違う、顔です」

と、頬に触れたまま、自分は口にした。

あんなたった一瞬で、ずっとずっと悩んでいたことが消え失せたんだから。

「本当に、違う、顔です」

どうしても、声が震えてしまった。

気まずい。

恥ずかしい。

なのに、こんなにも自由だ。

大したことないって、笑っていようと思ったのに、こんなにも気持ちが動いてしまって。嬉しいのかどうかも分からない。ただ、どうしても目尻に涙が浮かんで、止まらなかった。

そっと師匠がフードへ触れた。

「顔を見せるなと言ってるだろう」

「はい。申し訳ありません……」

ぐっと涙を拭って、自分は小さくうなずいた。

「魔術って、こんなこともできるんですね……」

「……」

　そんな自分に、師匠はさしたる言葉はかけなかった。

　代わりに、そっとフードを持ち上げてくれた。

「今日は隠さなくていい。それ以外の服装は山にいたときとずいぶん変わっているから、そのままでかまわないだろう」

「あ、幻術は服のボタンを起点にかけてるから、やめたいときはそれをもぐといいよ。でも俺がいないときにもぐと、かけなおせないから気をつけてね」

「……はい」

　小さくうなずくと、師匠はようやく体力を回復したらしく、さてと腰をさすりながら山頂近くの村の方向へと顔をあげた。

「まず、黒い聖母にご挨拶させてもらおうか。どういう理屈かは分からないが、でないとタブーにひっかかってバレるらしいからな」

「でも先生。それ自体ブラフという可能性もありますが」

「……いえ」

　スヴィンの指摘に、自分がかぶりを振った。

「それは、本当です。昔、拙が沼に近づこうとしたときもすぐにバレましたから」

「ほう。君は意外とおてんばだったんだな」

「……道に迷ったんです」

　師匠の言葉に、頬が熱くなる。

　この顔になりはてるより前のことだ。

　幼かった自分が森で迷って、沼の近くで怯えていたとき、すぐさまベルサックが駆けつけてくれたのだった。誰かが村に入り込んだ形跡もないから、墓地か沼だと思った……と、震えるこちらの頭を撫でながら、ベルサックが言ってくれたものだ。

　あれから時間が経って、自分は過去の英雄と同じ姿となり、霊に怯えるのはなおらぬままに村を離れて、そして今戻ってきた。師匠

と一緒に体験してきた事件のどれひとつとして、昔の自分には夢想だにできなかったことばかりだ。

「ところで、いいですか？」

　と、スヴィンが切り出した。

　師匠に申しつけられているせいか、自分とは少し距離を取ったまま、遠慮しいしいこんな質問をしてきたのである。

「先生とグレイたん……グレイさんがあの村から出てくるとき、何があったんです？」

「それは……」

　と、自分は口ごもった。

「……それは、どこまで聞いてるんですか」

「グレイさんが死んだ事件が契機になった……って聞きましたけど」

　なるほど、おおよそ師匠は、ライネスと同じ風に話したのだろう。

　確かに、自信を持って話せるのはそこまでぐらいだろうとは思う。自分もすべての場に居合わせたわけではないけれど、おおまかなあらすじは聞いている。

「出来事だけならシンプルだ」

　と、師匠が横から口を挟んだのだ。

「教会で、グレイの死体が出た」

「――――っ！」

　スヴィンが愕然と、フラットが興味津々に振り返った。

　あわてて、自分も手を振って、発言の一部を否定する。

「もちろん、拙じゃないです。拙によく似た、知らない人というだけで」

「グレイさんに、似た人？」

「……はい」

　身代わりの死体。

　でも、それは一体なんだろう。

　少なくとも、あの村で自分にはわけがわからない出来事が起きていたのは確かだ。

「その直後に、私がベルサックに呼び出されてな。グレイを押しつけられることになった。ベルサックにはすぐさまこの村を出て、二度と戻ってくるなと言われたよ。だから今回の帰還は彼の期待を裏切ってということになるな」

　当時のことを、自分も覚えている。

　ベルサックと師匠が何らかの話の後に別れ、翌朝ライネスを先に時計塔へと帰した。

　そして、翌々日の朝、今度は『自分の顔をした死体』が見つかったのだ。

　当然だが、村は大騒ぎになった。

　当時のライネスも気づいていたけれど、あの村での自分は特殊な位置にいる。おおよそはこの顔──この姿とアッドによるものだ。だからこそ、ベルサックは死体が発見されてすぐに師匠を呼びだして、自分を村から連れ出させた。

　──『いつか、お前は村の外を見るべきだ』

　以前から、そんな風に話していたから。

　本当にそんな日が来るなんて微塵も思っていなかったけれど、はたしてベルサックに促された通り、師匠は自分を連れて、村を出た。

だから、事件に関わるのを放棄することとなった。

もちろん、師匠は探偵というわけではない。村にやってきたのも、対霊の専門家を──サーヴァントと対峙できるブラックモアの墓守を求めてのことだ。だから、目的は果たしていたし、解決しようと乗り出さなかったのも当然ではある。

対して、自分は……

「……拙は、きっと、何も考えてなかったです」

あの村での自分は、息苦しかった。

本来の自分からどんどん離れていく身体も、そんな姿へ勝手に神性を見出す村の人々も、ただただ息苦しかった。

その中で、師匠だけがこの顔を嫌ってくれたから、まるで光のように思えたのだ。

だから、この人と逃げられるならそれでもよいと、思ってしまった。

（……母さんは、どうだったろう）

──『昨日は、どうだった？』

──『新しい客人の案内をしてたのでしょう？　エルメロイII世さんでしたっけ』

師匠と出会った翌朝、母と交わした会話。

だったら、自分が死んだことを、彼女はどんな風に感じたろう。

嘆いただろうか。苦しんだだろうか。それともベルサックがこっそり真実を告げてくれたりしただろうか。当時の自分には、そんなことを慮る余裕さえなかった。師匠には思うところがあるようだったが、結局自分が故郷についての話を拒んでいた以上、これといった手段は打てなかったようだ。

だからこそ、禍根は残った。

あの村にハートレスの手がかりがあるかもしれない、とはそういうことなんだろう。ズェピアが何をしていたかは知らないが、それは確実に深く、時計塔やアトラス院の闇に結び付いている。

かつて、自分が目をそむけていたことに。

「……」

顔に触れる。

今、フラットに幻術をかけてもらった顔。

その奥の──過去の英雄と同じそれに、なりはてた顔。

そして、同じ顔をして、半年も前にあの村で死んでいた少女。

あまりにも事件は怪異で、奇妙で、逃げ出してきた自分は目も耳も塞いだ。かつてのことは忘れ果てて、あの街で過ごすのだと思っていた。最初の二ヶ月は、どうやったら苦しくなる前に死ねるだろうと思っていた。

まさか、自分自身の意志で、村に戻ろうと考えるなんて。

一歩一歩が怖い。

ずっと間違えてばかりだった自分が、また間違えるのではないかと。今度は大切な人たちも巻き込んで、取り返しのつかない事態を引き起こすのではないかと、怯えている。

それでも、足は止まらなかった。

唇を引き結び、ぎゅっと拳を握りしめたまま、自分は山を登っている。

かつて見下ろすだけだった道を、逆に進んでいる。

（勇気が、欲しい）

と、思う。

どんどん重くなる足を踏み出し続ける勇気を。

最初の一歩だけじゃなくて、その決意が続けられるだけの精神こころを。

だから、一番近しい友達に聞いてみたくて、なんとなく囁いてみた。

「……アッド？」

返事はなかった。

鳥の鳴き声や、師匠や自分の足音だけが耳に届いた。

固フ定ッ具クでしまわれている右肩からは何の気配もしなくて、ただ虚空ばかりが張り付いているようだった。

「アッド？」

えもいわれぬ恐怖に突き動かされて、もう一度、少しだけ強く囁いた。

「ふぇ？」

と、今度はぼんやりした声があがったのだ。

「アッド……」

「イッヒヒヒヒ……いや、どうにも眠くてな……」

曖昧に、右肩でゆらゆらと匣が揺れる。そのいい加減な調子で、なんだか馬鹿馬鹿しくなった。別に勇気が湧いたりはしなかったけれど、諦めようとする弱気もどこかに消えてしまった。

「……寝ていて」

「そうするさ！」

今度は元気よく告げて、声は途絶えた。

足取りはほんの少しだけ軽く、かつて逃げるように下っていった坂道を、背中を押されるみたいにして登っていく。ひとりだけじゃないというのが、こんなに心強いなんて。

「あ、雪だ！」

フラットが、空を指さす。

ちらほら、と白いものが降りはじめていた。

雪の香りでも嗅いでいるのか、スヴィンは落ち着かなげにすんすんと鼻を鳴らし、師匠は相変わらず不機嫌そうにちらりとだけ視線をやっていた。いままで何度となく見てきた故郷の雪でも、その日の白さはひどく特別に映った。

―だけど。

そんな結果が待っているなんて、想像するはずもなかった。

3

村を前にして、自分の足は衝撃で止まっていた。

こんなに小さかったろうか。

かつて、自分の世界のすべてであった村。今も、自分の根っこと癒着して、一生剝がれることはないだろうと思われる場所。だけど、戻ってみれば、その姿はあまりにも小さくて、記憶の中の場所とどうしても一致してくれなかった。

（……いえ）

と、感傷を否定する。

（本当に、一致しない？）

「……どういうことだ」

師匠も、小さく唸りをあげた。

村は、変わってしまっていた。

建物ではない。地形でもない。風の香りでも光の色でもなかった。

「……誰も、いない？」

そう。

村人ひとりすら、姿が見えなかったのだ。

小さい村とはいえ、だからこそ忙しく誰もが行き来していた。不必要な人間なんて誰もいなかった。なのに、冬空の下、村を行く者は誰もいなかった。

実際に村へ辿りついても、やはり人影はなかった。

この村でよく遊んでくれた雑貨屋のお爺さんも、酒屋の奥さんもいない。

自分の実家に行っても、墓地に行っても、母親も、墓守のベルサックもいなかった。

さらに教会に入って、黒い聖母にまみえ、地下室を覗いても同じだった。せいぜい、がらんとして薄ら寒い応接室のテーブルに、ティーカップやクッキーの載った皿など、ほんの少し前まで皆で食していたような形跡が残されているきりだ。

あのでっぷりしたフェルナンド司祭も、不満そうに付き従っていたシスター・イルミアも見つからなかった。

「そんな……」

血が凍りつくようだった。

その隣から、そっと師匠が手を伸ばす。

応接室のテーブルに置かれたカップへ、そっと触れた。

「完全に冷め切っているな。マリー・セレスト号なら、紅茶がまだ淡く湯気をあげていたそうだが」

と、呟いた。

さらりと触れた船の名前は、いまだ世界のミステリーとして知られる、大洋の真ん中で突然乗員すべてが消え去った事件だった。確かに、今の村の状況と極めて近しいだろう。

今度は皿の縁をなぞり、かすかにこびりついた埃を見やる。

「いなくなってから、それなりの時間は経過している。……とはいえ、村人たちが消える直前まで、ゆっくり紅茶を飲むような状況だったのは確かだろう。ほかの家を見ても、なんらかの天災に襲われたとは思えないな」

たとえば、地震や嵐で避難したなら、もう少し跡が残ったはずだ。

村の外へ脱出したにせよ、考えたくもないが未知の怪物に襲われ

たにせよ、こんな穏やかなカタチですむとは思えない。

「スヴィン、臭いはどうだ」

「人の気配はまるでありません」

　と、鼻をうごめかしつつ、金髪の少年は答えた。

「ただ……あちこちから魔術の香りがします」

　魔術の香り。

　それはどんなものだろう。

　彼にしか分からない感覚に首を傾げると、フラットが応接室の天井を見上げながら、指をぐるぐると回したのだ。

「うーん。確かに、魔力の流れがおかしいんだよね。山中って魔力は濃くなりやすいけど、ここのは濃いというよりも異質な感じ。こう、きちんと流れなきゃいけないのに、ぐるぐるって円環を描いてるというか」

「円環よりは螺旋じゃないか。山なんだからそっちのが普通だろう」

「いやいや、これは円環でしょ間違いないよ！　同じところを堂々巡りだよ無限ループだよスーパー配管工のゲームでみんなハマったやつだよ！」

「早合点はよくない。それに、香りのすべてが同列に流れているわけじゃない。必要なのは全体の正しい理解で、フラットみたいに一足飛びに本質に辿り着こうというのは、それはそれで間違ってる！」

「本質ならいいじゃない！　日本のアニメでだって、真実はいつもひとつって言ってるんだし！」

「本質をつくことが正解になるのは、相手と術式が正しく働いてる場合だけだって、先生もよく言ってるだろ。フラットは自分が間違わないからって、ほかにそれをあてはめるのは必ずしも十全じゃない。こういう場合全体と部分とを同時に観察して確かめるべきだ」

スヴィンとフラットのふたりで、あれこれと議論する。

そんな様子を、師匠はつかのま不思議な目で見つめていた。どこか嬉しそうで、なぜだか、ほんの少し寂しそうな瞳に思えた。

ある程度議論が煮詰まったあたりで、ぱんと手をたたいた。

「一旦、そこで終わりだ。手がかりが少なすぎる。この段階で、ふたりともが仮説に仮説を積み上げても、わけがわからなくなるだけだろう」

と、指摘したのである。

ふたりとも自覚はあったのか、その言葉に沈黙する。

それから、師匠は軽く目を細めた。

「集団失踪事件か。まるで、『そして誰もいなくなった』だな」

古典ミステリーの名を口にして、小さくため息をつく。

それも無理はないだろう。過去の事件に決着をつけにきたはずが、まったく新しい事件に巻き込まれていたのだから。自分も一体何が起きているのか分からず、ただ狼狽えることしかできなかった。

（……みんな……どうして）

雲に消えたか、地に潜ったか。

自分の故郷が直面した異常事態を、到底受け容れられない。間違いなく自分の生まれ育った村で、記憶の中の光景とも違いがないだけに、人間だけが喪失しているという欠落を埋めきれなかった。

呼吸が浅く、速くなる。

胸が苦しい。今にも倒れてしまいそうだ。愚にもつかない思考だけがぐるぐる加速して、自分の内側を焦がしている。

ふと、鼻孔に、エキゾチックな香りが忍び入った。

いつのまにか、師匠はいつもの葉巻を吸っていた。

　その香りひとつで、妙に落ち着いてしまう自分が不思議だった。

　ゆっくり、指に挟んだ葉巻を持ち上げ、

「二手に分かれよう」

　と、師匠が提案したのだ。

「二手に？」

「ああ。こうして村人たちが全員行方不明になってる以上、私たちもまとまっていると同様の被害に遭う可能性がある。それなら定期的に魔術で通信しつつ、バラバラに行動した方がマシだろう。──スヴィン、フラット、お前たちふたりで周囲の魔術的な要素について洗い出しを頼めるか」

「フラットと、一緒にですか」

　先生に頼まれるなんて光栄だという喜びと、フラットと一緒にいなきゃいけないのかという迷惑さとで、実に複雑な心模様がスヴィンの顔に広がる。

「フラットだけじゃ、洗い出しが全部その場の気分と、わけのわからない戯言になるだろう。この場でなくても、ついていけるのはお前ぐらいだ」

「そんなに褒められると恥ずかしいですよ教授！」

「黙れ」

「あいたたたた！　ちょ、ちょっと教授！」

　たちまち、『強化』されたベアクローで持ち上がるフラットの身体。わたわたと浮き上がった両足がばたついて……ただ、今回ばかりはスヴィンの面持ちは硬かった。

「先生……その組み合わせじゃないとダメですか？」

「ん、どういうことだ？」

「いえ、先生なら、フラットの言葉も理解できるでしょうし……あ、いや、可能なら僕も先生と一緒がもちろんいいですし、そんな

のフラットに譲りたくなんかないんですが！」

「つまり、お前と、グレイのコンビで手がかりを探す？」

　名前が出て、どきりと胸が鳴った。

　指摘されたスヴィンも、一瞬動揺に息を詰まらせた。

　呼吸を止めたまま、わたわたと視線を交互にやって、耳の先まで真っ赤にする。どういう理屈になってるのか、癖のある金髪までざわざわ波打って、落ち着かない犬の耳みたいにぱたぱたしていた。

「……すみません。拙とコンビなんて、考えるだけで嫌とは思うのですが」

「あ、え、いや！　その！　そういう、わけじゃ！」

　と、スヴィンがもごもご言う。

　教室では一、二を争うほどに闊達な弁の持ち主が、これほど訥々となるのは、それだけ自分との組み合わせに困っているのだろう。仕方ないとは思うけど、少しだけ寂しい。悲しいにならないのは、それでも心底嫌ってるわけじゃないだろうと思えるぐらいには、信頼してるからなのだけれど。

　師匠は数秒考えてから、かぶりを振った。

「残念だが、その案は採択できないな。手がかりを探すにはお前の鼻とフラットの魔術が最適だ。村の痕跡を探る分についても、過去にこの村に来ていた私とグレイの組み合わせが最適だろう」

「……そうですよね」

　小さく、スヴィンが肩を落とす。

「ただ、懸念は分かる。連絡はこまめにとろう。フラットの手綱を取るのは困難だろうが、お前しかいない。すまないが、少しの間頼らせてほしい」

「っ、はい！　任せてください先生！　グレイたん！　少しの間と言わずいくらでも！」

　ぱっと顔を輝かせて、雄々しく、金髪の少年は胸を叩いたのだ。

　もっとも、

『──教授！　いいことを言うんだったら、ベアクロー外して俺も交ぜてください！　頼りにしてるとかどうとかいっぱい褒めて！』

　持ち上げられたままのフラットの言葉は、ふがふが、としか聞こえなかったのだけど。

4

スヴィン・グラシュエートは、昔から『異質』だった。

エルメロイ教室内で、現役最年少の典位プライドを取得したからではない。そんなことであれば、何の痛痒を覚えることもなかっただろう。時計塔で幾多の魔術に触れることは、少年にとっていつも愉しかったし、先代のロード・エルメロイのようにそれらの魔術のほとんどを修めるなんて芸当はできなかったが、自分なりに新たな見地を摑むことはできた。

獣性魔術はそのたびに研ぎ澄まされ、スヴィンも変わっていった。

そう。

変わっていったのだ。

結局のところ、獣性魔術は己をつくりかえる魔術である。魔術回路はもちろんのこと、それに連なる神経も、筋肉も、骨格も──現代科学ではありえないことに、新皮質や旧皮質をはじめとした大脳すら置き換わっていくのを感じていた。

当時の気持ちを、もうスヴィンは憶えていない。

怖がっていただろうか。それとも喜んでいただろうか。記憶として泣きはらしていたことだけは確かなのだが、それと感情とがまったくつながらない。涙が悲しみの表現なのか歓喜の表現なのか、かつての自我はどこまでも攪拌され、曖昧模糊に遠ざかり、『スヴィン・グラシュエート』なんて存在は単なる記号に成り果てていく。

ああ、記号だ。

（……区別するためだけの、名タ札グだろう）

静かに、スヴィンは思う。

それ以上の意味は何もない。ほとんどの魔術師は魔術刻印を受け取ったときから、自分が遠い遠い先祖の方向性ベクトルに呑み込まれたのを受け容れるそうだが、スヴィンの場合は遥かに熾烈だった。

もっと、単純なことに。

もっと、どうしようもないことに。

行き着く果ては、人間ですらなかったのだから。

辛いとは思わなかった。そんなことを考えるほどの余裕はなかった。獣性魔術を受け容れても精神が壊れないと見極められてから、スヴィンの身体には幾多の術式や実験が施された。あるいは背中の皮を剝がれて再生能力を確かめられ、あるいは煮えたぎった油へ腕を突っ込まされもした。そのひとつひとつに苦しんでいたのかさえ、今のスヴィンは分からない。獣に成り果てた自分ならば、それさえ快楽と感じた可能性さえあるのだ。

理性なんてとっくに剝奪された獣は、すでに魔術師からも遠いだろう。

時計塔に来て、エルメロイII世に出会って少しだけ救われたのは、多分、あの人がそうしたスヴィンを正しく理解してくれたからだ。普通の魔術師と異なり、魔術そのものの器でしかないスヴィン・グラシュエートを、エルメロイII世は正しく保護してくれた。

多分、少し遅れて入室したフラットを毛嫌いしたのも、同じ理由だ。

初対面のときから、そいつの匂いは、自分と同じ規格外であると訴えていた。他人とまったく折り合いのつかない、行きすぎた合格品なのだと、きっと最初から知っていた。欠陥なんて何もないからこそ、他人と理解し合えない他人を必要としないと、ふたりともとっくに諦めていた。

（……だから）

だから、グレイの香りこそ、スヴィンにとって特別だった。

ヒトのものではなく、魔術師のものですらなく、彼方の誰かにつくられた──薄くて冷たい香りこそが、少年を安心させた。

単なる憐憫かもしれない。

自己愛にも似た、醜い感情かもしれない。

だけど、そんな風に誰かを想うのは、初めてのことだった。脳内を直接くすぐられるようなその香りに誘われ、いつのまにか彼女を追っていたことが何度あったかも分からない。

この土地にいると、そんな彼女の手のひらで包まれている心地になれるのだった。

「……まるで、グレイたんの中にいるみたいだ」

「んん？　グレイちゃん？」

ぽつりと呟くと、すぐ前からひょこりと顔が振り返った。

鬱蒼と茂った森である。

村の周囲を包む、昼なお暗い一帯だ。エルメロイII世たちと分かれた後、ふたりは村の北側の森へと踏み入っていたのだった。いまだ、ちらほらと雪が降り続いており、枝葉の隙間から時々欠片がこぼれ落ちる。

冷たい指先にほうっと息を吐きかけてから、フラットは無邪気に続けた。

「あの黒い聖母様も、なんとなくグレイちゃんに似てなかった?!」

「グレイたんに似てる相手なんて存在しない。先生が唯一無二の偉人であるように、グレイたんも絶対なる美の化身だ」

「うん。ル・シアンくんの気持ちはよく知ってるよ！　日本だとＭＯＥとかＷＡＢＩ-ＳＡＢＩっていうんだよね！　で、俺たちは今回どこから調べるつもりだったっけ？」

「だから沼だ」

と、スヴィンは呆れ顔で答えた。

まっすぐ、一番の急所へと向かうつもりだったのだ。

「明らかに、この村の異常はそこに端を発している。先生たちは念

のためタブーを犯さずにいるべきだけど、僕たちまでそれに倣う必要はないだろう」

「いやあ面白いよねこの村！　いろいろ滅茶苦茶で！」

　ニコニコと笑って、フラットが言う。

　まあ、その意見には同意せざるを得ない。

「どう考えても、この村は妙な作為が多すぎる」

　と、スヴィンも結論した。

「そもそも村として機能するには、農耕地が少なすぎる。自給自足できない以上、昔から周囲の集落に食料を届けてもらっていたんだろうけれど、だったらこの村にそれだけの価値が必要となるだろう。金銭的に豊かとは見えない以上、何らかの信仰の対象が有力だ」

「それが、ブラックモアの墓地や、あの黒い聖母様ってこと？　ううん、ありえなくはないけど、だったらもう少し一般にも有名になってるんじゃないかな？」

「そういう可能性もあるってだけだよ。先生なら、もっと詳しく考えているかも──いや、もう僕なんかじゃ届かない深淵まで至ってるに違いないけれど」

　スヴィンがかすかに目を細める。

　ふんふんともっともらしくうなずくフラットがどこまで分かっているかは分からないが、とりあえずひとりよりは考えがまとまった。

「グレイちゃんが、なんだか崇められてるみたいだって話もあったよね。だったら、それも関係してると思う？　あ、ひょっとしてグレイちゃんが気にするかもだから、今の話をしなかったの？　グレイちゃんもそのへん話しにくそうにしてたもんね」

　その言葉に、スヴィンは口ごもる。

　時々、この級友はやたらと鋭い勘を発揮する。魔術関係についてはいつもそうなのだけど、人間関係についてもだ。細かな機微は何

ひとつ理解しないくせ、本質だけついてくるような相手をどう評価すべきだろうか。

　諦めて、少年は肩を落とした。

「……そうだよ。この村に来る途中も、ずっと切なくて、薄くて、ちぎれちゃいそうな香りをしてたんだもの」

「ル・シアンくんは、昔からまわりに気を遣ってるもんね。俺を警戒してたぐらい！」

　また、分かったようなことを言う。

　つい拗ねたくなるのだが、どうもこの相手はそうさせてくれない。

「だから、ル・シアン犬って言うな！」

　噛みつくように言って、スヴィンはすんと鼻をひくつかせる。

「確かに、妙な臭いがしてるんだ」

　と、呟いた。

　歩みは止めない。

　ほぼ一定の速度で、少年はずっと歩を進めている。凸凹ばかりの地面も、突き出した灌かん木ぼくの枝も、まるで問題にならないらしい。それについていくフラットも同様だった。

「土地ごとに臭いは違うし、時計塔だって魔力が濃いのは一緒だ。けれど、ここのはとりわけいびつだ。ねっとりと濃いのに、嗅ごうとしたらすぐさま消える。どす黒いのに洗い立てのシーツみたい」

「相変わらずスヴィンくんの言ってることは──すっごく分かりやすい！　名作ＦＰＳのチュートリアルみたいだね！」

　フラットが、ぱんと手を叩く。

　思わずつっこんでしまいたくなるやりとりだが、このあたりはいつものことだ。

　ふたりして、道なき道を半ばかき分けながら進んでいくと、不意

にスヴィンが顎をしゃくった。

「そこだ。分かるか？」

「うん、うん。もちろん分かるよ」

　と、フラットが訳知り顔でうなずいた。

　目を細めて、すうと手のひらを地面に近づける。接触はせずに、数センチの間をあけたままその手が地面と平行に流れた。

「結界があるね。わ、だいぶ古い。時計塔でも滅多に見ない古さだよこれ」

「解除は任せる」



「はいはい。──干渉開始ゲームセレクトっと」

　ぐるんとフラットの指が動いた。

　複雑精妙に流れて、ある種の図形を形成するが、このあたりはすべてアドリブだとスヴィンは知っている。フラットの魔術式はほぼすべてその場の気分でつくられている。普通ならばそんな魔術が成立するはずもないのに、あっさりと実現させてしまうのが、フラット・エスカルドスの異端たる由縁だ。

　スヴィンの獣性魔術にも相似した、時計塔ですら類型の少なすぎる在り方。

　すう、と視線が持ち上がるとともに、異変が生じた。

　最初からそうだったかのように、森へ小径が開けたのだ。

「こちらの認識に働きかけるタイプの結界だね。ほい、観測完了ゲームオーバー。じゃあ、さっさと行こうか」

　ピクニック気分でハミングしつつ、フラットが小径を駆けていく。

　その後ろからついていき、すぐにスヴィンが口を開いた。

「沼に行ってはならないなんてルールをつくった理由が、よく分かるな」

　と、囁いたのだ。

「沼に行かれたら困るからじゃない。そもそも、村人が沼に辿り着けないからだ」

「あ、辿り着けないことに気がつかれちゃ困るから、行かないことをルールにしてた？　なるほど辻褄は合うね！」

　これも、ある種のホワイダニットだろう。

　なぜそんなルールがつくられたのか、という話。

　明らかに、この村の沼には何かが隠されている。それを秘するため、神秘の守りさえ惜しまずに設けられている。だったら、先には

一体何があるのか？　村人たちが突然失踪した理由はなんだというのか？

　途中で、突然フラットが立ち止まった。

「おっと、まだあるね」

「ずいぶん厳重だな。フラット、この香りだと近いヤツはダミーじゃないか？」

「うん。うっかり触れると、自動反撃してくる攻性防壁ブラックアイスなヤツだね！　最初の結界を超えてきたんだから、次は殺す気でって感じ」

　再びフラットの指が組み合わされ、てきぱきと魔術が解かれていく。

　ただし、今度は一発とはいかなかった。

「──っくしょん！」

　くしゃみとともに、指がほどけたのだ。

　途端、樹木と樹木の間をつなぐ光の回路が生まれ、虚空に膨らんだ結節点から、ふたりに矢が放たれた。練り込まれた呪いの密度は、猛獣であろうが必ずや絶命させるだけの域に達していた。

「青ざめた死よPallida mors」

　刹那、スヴィンの唇から呪句が囁かれるや否や、その背中から長い半透明の触手が走り、光の矢すべてを打ち落としたのだ。

「あ、今の新技？」

「要は、尻尾のイメージだ。冠位魔術師に刺激を受けたのはお前だけじゃない」

「あはは、すごかったもんね橙子さんの蹴り！」

「そこで蹴りなのはお前だけだ！」

　スヴィンの抗議を尻目に、フラットが残った結界も解除する。

　このふたりにかかると、あらゆる扉が自ら開いていくようだった。

　しかし。

　今回の場合、それでも遅すぎたかもしれない。彼らが村に到着したときから、すでに顎は大きく開いており、いかな天才問題児たちといえども、たやすく踏破することを許さなかった。

　その殺意が、カタチを取る。

「……奥だ。今のは、ただの警告か」

　と、スヴィンが囁いた。

　フラットも気づいていたらしかった。

　彼らはブラックモアの墓地の西側から回り込むように、沼を目指していた。墓地を経由しなかったのは、例のルールに抵触するとしても、ひとつずつにしておきたいという腹積もりがあったからなのだが、正解だったかどうかは分からない。

　ぞろり、と森の陰から、少年たちと同じぐらいのカタチが分離したのだ。

「―んんん？　これってば自動防衛機構ってこと？」

　と、フラットが眉をひそめる。

「……っ！」

　スヴィンはただ立ちすくんだ。

　ゆっくりと、影が歩み寄ってくる。迷いなく、躊躇いなく。

「ル・シアンくん？」

　その言葉に改めて抗議できないほどに、スヴィンは驚愕していた。

人影であった。

小柄な体で、深くフードをかぶっている。

そして、馴染みのある細い手は、大きな鎌を握っていた。

*

師匠と自分は、丘に登っていた。

村からすぐ南、住人たちがいなくなっても、風車は無関係に回っていた。それは粉雪交じりの風に鈍い軋みをあげつつ、廃墟を睥睨する、ひとつ目の巨人のようにも見えた。

風車小屋である。

その手前で、自分はなんとなく納得していた。

「……あのふたりと分かれたのは、ここに来るつもりだったからですか」

「二手に分かれるのが最適解だとは思ってる」

憮然とした面持ちで、師匠が言う。

「ただ、万が一の場合、あいつらと会わせるのは避けたかった。どんな化学反応が起こるか予測できん」

言い分は、確かに嘘じゃない。

師匠の話に筋が通っているからこそ、スヴィンも納得したのだから。

だけど、けっしてそれだけでもない。

「わりと過保護ですよね、師匠。というか諦めが悪いんじゃないですか、ここまで連れてきてるのに」

「自覚はあるからやめてくれ」

苦み走った声音に、つい微笑してしまう。

「許してあげます。……ちゃんと、拙を連れてきてくれましたから」

「君がいないと死ぬ」

「はい。分かってくださってれば結構です」

こんな風にやりとりするようになったのは、いつ頃からだろう。

正直に言えば、まだ叫び出したいほどに恐ろしかった。故郷の人々が片端から行方不明になったなんて、そうそう受け容れられるはずもない。だからこそ、いつものように師匠を守るだけに集中できるのはありがたかった。

密やかに、呼吸を整える。

慎重に、風車小屋の入り口を開いた。

内側は、ライネスの話していた通り、奇妙な水晶の機器が煌めいていた。まるで神秘の洞窟のごとく、光を通信の媒介とする水晶たちは、機械などというよりも未知の世界に潜む生物のごとく、自分たちの目には映った。

しかし、自分と師匠が硬直した理由は、その奥である。

「これはこれは。墓守の娘が自ら戻って来るとは」

落ち着いた声が、自分たちを迎えたのだ。

師匠の、ごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

当然、そうした光景は予測していたはずだ。しかし、予測と現実とは違う。想像していた状況が目の前に立ち現れれば、やはり衝撃に囚われずにはいられない。

「……正直、あなたがまだここにいるとは思わなかった。何らかの手がかりが残っていればいいとは思っていたが」

「そんなに不思議かな、君主ロード」

くつくつと、相手は笑う。

淡く、ワインの香りを纏っていた。

こんな辺鄙な村の登場人物としては、そのワインにせよ、材質も定かならぬ華麗なケープにせよ、いかにも上質にすぎただろう。

「ああ、そうか。村人は全員消えているはずだ。私ひとりがここに残っていることに違和感を覚えるのも無理はない」

アトラス院の院長──ズェピア・エルトナム・アトラシアは、ゆっくりとうなずいてみせたのだった。

5

「―んんん？　これってば自動防衛機構ってこと？」

　フラットの言葉も、スヴィンの意識からは遠かった。

　大鎌を持ったその人影は、あまりにも知っている相手に酷似していた。同時に、この村で起きた事件を聞いたときから、ひょっとしたら、と考えていたそのままの光景過ぎた。

「グ、レイた……」

　茫然と立ちすくんだ少年の前で、黒い鎌が持ち上げられた。

　ごお、と打ち振られた一閃が、あらがえぬままの少年の首を通り過ぎたのだ。

　文字通り、通り過ぎた。

「……影絵？」

　少なくとも実体ではなかった。

　鎌を打ち振った直後、影もまた溶けるようにして消え去り、森にはスヴィンとフラットのふたりだけが残されていた。

「ル・シアンくん！　何してるの！」

「何してるの……って、いや待て。お前には何が見えてた？」

「え、ぼんやりした影にしか見えなかったけど？　というか、ル・シアンくんがずっと硬直してるからびっくりしたよ！　あの影、また消えちゃったけど！　何あれ、『ニューヨークの幻』みたい！」

　つまり、スヴィンとフラットで見えていたもの自体が違うということか。

　一体、あの幻にはどんな意味があったのか。

「それより、向こう！」

　と、フラットが指さした。

　沼の方角だ。

　異常な臭いが、彼らの鼻を刺激していた。犬よりも多くの香りを識別してきたスヴィンの嗅覚からしても、初めて認識する臭いだった。

　たちまち、白い狭さ霧ぎりが盛り上がった。

　いや、それは霧ではなかった。

「亡霊……?!」

　と、呻きがこぼれる。

　だが、そんな規模の霊など見たことがない。かつて剝離城アドラでエルメロイII世が遭遇したものならば肉薄しただろうが、スヴィンもフラットもその場には立ち会わなかった。

「ル・シアンくん、補助を！」

　フラットが指先をあげる。

　少年が即席でつくりあげた魔術式に、スヴィンも精オ気ドを叩き込む。可能な限りに強度をあげた魔力のドームへ覆いかぶさるようにして、亡霊の津波がふたりをのみこんだ。

「これって……」

「いやいやいやすごいよこれって！　ジェットコースターみたい！　でも、まるで……どこかから逃げてるような……」

　津波の奥へ、フラットの視線は向いていた。

　いつも好奇心を輝かせている瞳は、こんな状況ですらまっすぐ、きらきらと森の奥を見つめていた。沼があるはずの方角で、渦巻きねじれ、躍動し続ける魔力へと釘付けになっている。

「すごい！　あんなに濃密で繊細な式は初めて！　何がどうなって成立してるのか、まるで分からなくて最高！　ほらほら、一緒に見

ようよ、ル・シアンくん！」

「ああくそ、自分の結界から身を乗り出すな馬鹿！　補助してる僕の身になれ！　というか、あんなびりびりする臭いに近づいて何する気だ！　もう、いっそ死ね馬鹿！」

　片手でベルトを握って、今にも飛び出しそうなフラットを引っ張っている。

　しかし、この場合、無駄な努力だったかもしれない。

「あ、あ、あ、何か、動いてる！」

　フラットの叫びと、同時だった。

　ぐにゃあ、と何かが歪んだ。

＊

「ズェピア……さん……」

　絞り出すように、自分はその名を口にしていた。

　いつもなら、そんな問答は師匠に任せていただろうに、今回に限って自ら口火を切ってしまったのは、やはり故郷の出来事だったからだろうか。

「ふむ、このパターンでも、君には何度か言づてや資材の運搬をお願いしていたな。もっとも、たいていの場合はベルサック殿だったが」

「答えてください」

　と、自分は重ねて言った。

「ここで、何があったんですか」

「何があった、か」

ズェピアの声が、かすかに遠く聞こえた。

「質問の筋としては間違いじゃないが、よくはない。脚本で問うべきはテーマを軸にすべきだろう。テーマが大事だなんて陳腐なことじゃなく、物語における要素がテーマを中心として配置されるからという、単純な事実からだ」

「……」

冗長な台詞に、胸の一部が軋みをあげる。

苛立ちではない。恐怖とも違う。目の前の相手が、あまりにも隔絶している感覚。人間だと思って話していたのが精巧な人形だったとか、ほ乳類だと思っていた相手が虫だったとか、その類。

魔術師相手にはいつも感じていたが、この相手はそのいずれとも違う。

まがりなりにも慣れかけていた、時計塔の魔術師たちとはまるで異質の存在。

「その上で答えよう。ここであったのは、単なる古い契約だよ」

「契約？」

「私が院長になるよりも、ずっと前からなされていた契約だ。ああ、せっかく戻ってきてくれたんだ。──もう少し、内部事情についても話そうか」

と、ズェピアは視線を師匠へ動かした。

「仮にも君主ロードの立場だ。当然、アトラスの契約書はご存じだろう」

「世界に七枚ばらまかれたという、契約書のことか」

「そう、七枚の契約書だ。この契約を発動した対象に対して、アトラス院は必ずや協力しなければならない」

淡々と、ズェピアが言う。

魔術の内情には疎い自分だが、ひどく重大な話だというのはわか

る。

　アトラス院が従わなくてはならない、七枚の契約書。たとえば、アトラス院という言葉を時計塔に換えれば、その効力がどれほどの事態を発生しうるか、想像も及ばない。師匠以外に出会った君主ロードといえば、三大貴族たるロード・バリュエレータだが、あのクラスが契約に従って協力したならば世界にどれほどの爪痕を残すのか。

　ライネスは語ってなかったか。

　──アトラスの封を解くな。世界を七度滅ぼすぞ。

　一拍おいて、師匠が切り出した。

「単刀直入に訊く。ドクター・ハートレスが関係してるのか……？」

「ふむ。ドクター・ハートレスか」

　近くの机の上に、ズェピアが指を滑らせる。水晶が何かに響いて、きんと硬い音をたてた。美しくて、どこか寂しい音だった。

「確かに、私は彼と取引をした」

「――――っ！」

　師匠の拳が、ぎゅっと握りしめられる。

「今は、どこにいる。いや、何を考えてハートレスはあなたと接触した」

「おや、ずいぶん質問が直截になった。なるほど、私が精査しているのとは異なる範囲だが、あれはずいぶん君に印象深い接触を果たしたらしい」

「答えていただけないか」

　詰め寄った師匠の表情が、ふと揺れた。

水晶が、また音をたてたのだ。

共鳴はそれだけにとどまらなかった。幾重も続けて、自分たちをとりまくように鳴り響く。まるで音の結界のように、連鎖する響きは自分たちを追いつめ、ゆっくりズェピアが顔を上げた。

「ああ、起動したな。この村には、アトラスの兵器があるんだ」

「――っ！」

息が詰まる。

師匠も、大きく目を見開いていた。

「アトラスの七大兵器。かの性質は再演。私にとっても馴染み深いものだ。正式名はないが、ロゴスリアクトなどと呼んでいる」

「……何を、言ってる？」

「だから、事情説明だよ。ロード・エルメロイII世。君が聞きたがることばかりだ」

「……」

ライネスが話していたのと、同じだ。何もかもを先回りして、核心だけ伝えられる感覚。

一切合切わけがわからないのに、それでもひどく重大な事実を話していることだけが否応なく理解させられる。ああ、誤解を恐れずに言うなら、突然核兵器の場所と起動コードでも教えられているような気分だ。

あまりにも気軽に、フィッシュ＆チップスでも奢るよと言うみたいに。

「それは……」

口ごもった師匠を前に、ズェピアがすうと息を吸った。

雪崩のようにとめどなく、その唇から一連の『音』が発せられたのだ。

「まわせまわせまわせまわせまわせまわせまわせまわせまわせまわせまわ

せまわせまわせまわせ

「―夜を惑え」

　と、ズェピアの声は聞こえた。

「真実ならぬ虚構を探すがいい。君が解くべき虚構の謎を追い求めよ。それこそ、君が辿り着くための唯一の手段だ、ロード・エルメロイII世」

6

　──コード：ロゴスリアクト、再入力。

　──歪曲固定値：Ｂ。

　──摘出期間：■■■■■■■■■■■

　──■■■■■プログラムスタート。対象の変換を開始。

　──全工程、完了クリア。アトラスの──

　声を、聞いた気がした。

　自分には到底理解できない、声というよりももっと直接的な『情報コード』だった。

　気づくと、柔らかなベッドの上にいた。

「ここ……って……」

　自分の声が、ひどく曖昧に揺れる。頭が痛い。

　よろよろと起きあがって、いつものように一階のリビングへと降りていった。

「おはよう、グレイ。寝起きが悪かった？」

　おかしい。

　違和感を、身体が訴えている。

　世界が明るい。体内時間と一致しない。それに、この暖かさはどうだ？　雪がちらついていたのはどこへやら。ちょっと運動すれば汗が滲んでしまいそうな陽気である。

（初夏……？）

　それなら辻褄が合う。だけど、そんなことはありえない。

「グレイ？」

　ああ、そうだ。

　ここは、どこだ？

　ついさきほどまで、師匠と一緒に、ズェピアと対峙していたはずだ。アトラス院の院長なんて怪物は、到底自分の理解の及ぶところではなかったが、それでも師匠だけは守らなければと、強く思っていたはずだ。なのに、今の自分は……

「ちょっとグレイ、どうしたの」

　と、呆れた様子で、台所からまた声がかけられた。

　なんて耳に馴染んだ声だろう。とっくに気づいていたのに、表層意識が受け入れられなかったこと。自分の感覚器官を、自分の脳は信じられなかった。信じられるはずがない。こんな季節とこんな相手と、こんな組み合わせを。

「え……と、なんで……ここは……」

「何を言ってるの」

　と、穏やかな笑い声が聞こえた。

「ここは、あなたの家じゃないの。まだ寝ぼけてるの？」

　台所から、相手は焼きたてのパンを持って現れる。

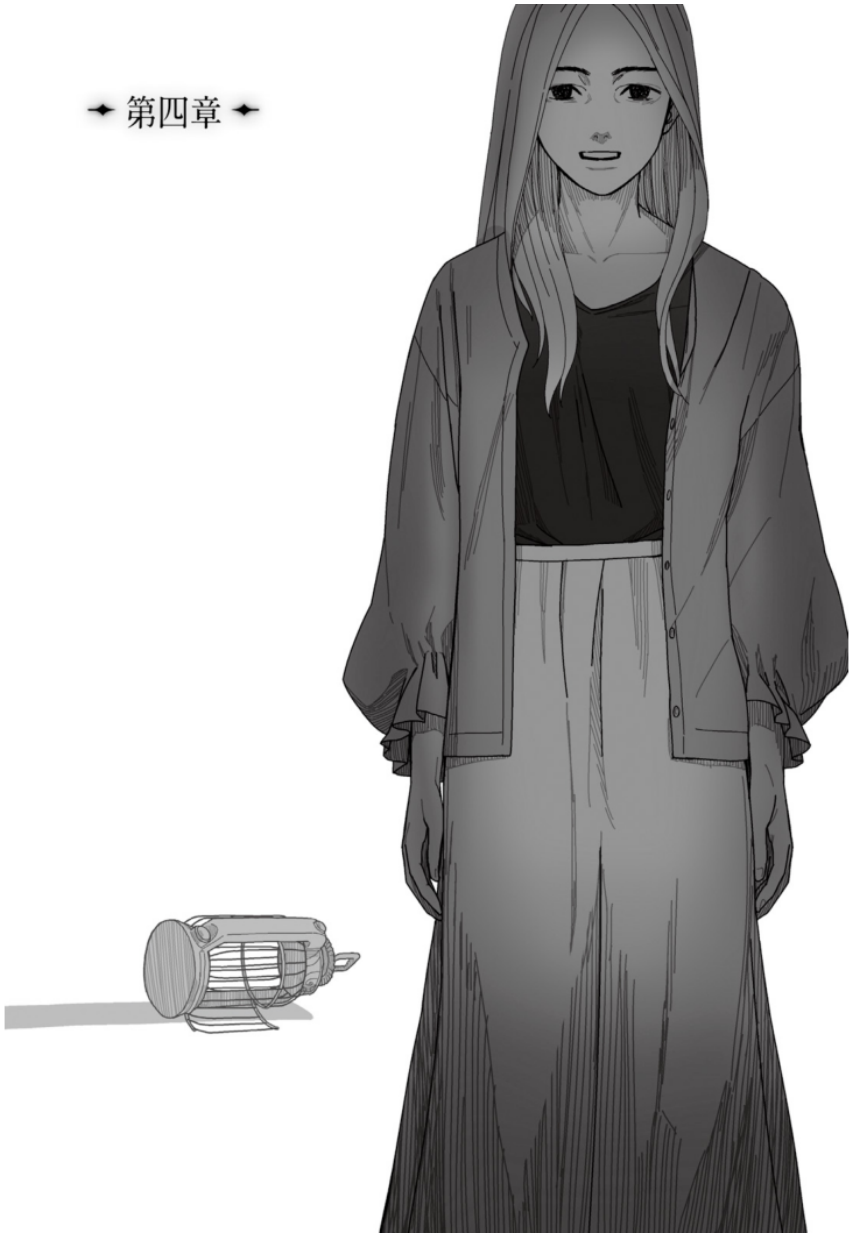
　ああ、知っている。その相手を、自分は誰よりも知っている。誰よりも忘れられない。当たり前だ。自分が生まれたときから一緒で、自分がこの姿になったことを、誰よりも喜んでくれた人なのだから。

　かぐわしいパンの香りに、たまらない郷愁と、同じだけの恐怖を感じていた。

「母……さん……」

と、自分は呻いたのだ。

第四章



1

「昨日は、どうだった？」

　柔らかな声が、耳朶を叩いた。

　自分は、茫然と立ち尽くしたままだった。どうして、こうなってるのか分からない。

「新しい客人の案内をしてたのでしょう？　エルメロイII世さんでしたっけ」

「え、あ……はい」

　その言葉にも、聞き覚えがあった。記憶が確かなら、初めて師匠と会った翌朝だ。この暑さも当時の季節だと思えば、納得はいく。

　だけど、一体何が起きている。

　過去に戻ったとしか思えないこのやりとりは、どういうことだ？

　何より、自分に話しかけたその相手は、紛れもなく母だ。当時の自分と同じやりとりを、同じ表情で行っている彼女を、自分はどんな風に受け止めたらいい？

「母さん……」

　ぼんやりと呟いて、とある事実に気がつき、猛然と振り返って鏡を見た。

　いつもの、自分の顔だった。フラットの幻術が解けてしまっている。過去に戻ったのだとしたら当然で、衣装も当時のものだった。ロンドンに着いてからの衣装はライネスや師匠に選んでもらうことが多く、昔の自分とはずいぶん趣が変わってしまっている。

　そんな変化への驚愕を抑え込みながらテーブルに着くと、母が手際よく朝餉をよそっていった。焼きたてのパンに新鮮な牛乳、玉ねぎのピクルスと朝の日差し。そのひとつひとつに震えてしまいそう

になってしまう。

「昨日は、おかしな夢を見たわ」

　と、対面に座った母が呟いた。

　パンをちぎり、バターを塗る。かすかに甘くて優しい香り。幼い頃はあんまりべったりと塗ってしまって、よく怒られたものだった。

「あの客人が、あなたを連れて行ってしまう夢。おかしいわね。そんなことありえるはずないのに」

「……はい」

　おそるおそる、うなずく。

　そんなやりとりも、かつてあっただろうか。記憶が判然としない。あまりの事態に、まだ困惑が抜けきってなくて、心臓がばくばくと鳴っている。

　自分もよそわれた朝餉を、口にする。

　何百回も食べた通りの味だった。ロンドンでご馳走された煌びやかな料理たちには、比ぶべくもない素朴さだが、その味わいは劣るものではない。なのに、今はひどく恐ろしくて、飲み込むことさえ躊躇してしまう。

　何度もつっかえながら、それでも腹におさめたところで、母が立ち上がった。

「じゃあ、聖母様へお祈りに行って、おばば様に会ってくるわ。ベルサックさんにもよろしく」

　二、三歩歩いてから、思い出したように振り返った。

「そうそう。墓守は大事な仕事だけれど、これ以上かかりきりになっちゃ駄目よ。あなたはとても大切な神み子こなんだから」

　何度も言い聞かされていたこと。

　けして忘れることはなく、それでもロンドンで生活する内に、多

くの事件と関わる内に少しずつ薄れていたこと。母の口から語られれば、それだけできゅっと喉元を締め付けられたような気持ちになった。

「……はい」

もう一度、頭を下げる。

今度こそ母が立ち去ってから、自分は這いずるようにして、部屋へ戻った。

部屋の隅で、小さな声で呼びかけた。

「……アッド」

と、懇願するみたいに。

当時のアッドならお喋りだったはずだ。しょっちゅう自分を愚図グレイと呼んでいた頃のアッド。何かあるたびにこちらをからかって、弄んで、いつも愉しげに笑っていた、いけすかない匣。自分にとって、この村でたったひとりの──

なのに、返事はなかった。

たまらず固フ定ッ具クを外して、右肩から籠を引きずり出した。小さな匣に彫刻された目は、最初からそうだったように、固く閉じられていた。

「……アッド。どうして、アッド……」

どうして、こんなときに目覚めてくれないのか。

籠を抱きしめたまま、しばらくの間、自分は微動だにできなかった。

2

家を出て、もつれる足で村を歩いた。

住人たちは、みんな戻っていた。故郷を離れるより以前の過去なら当然なのだが、突然初夏に立ち返った気候もあいまって、まるで自分が幽霊にでもなったような心持ちだった。

白昼夢ならばまだよい。

しかし、こうして吹き出る汗を拭いながら村を歩いていると、まったく別の妄想が湧き上がってくるのをこらえがたかった。

（まるで……）

故郷を出て、ロンドンに着いてからの事件の方が、夢幻だったかのようだ。

いいや、そう考えた方がよほど自然ではないか。こんな自分が魔術師たちの学舎へと招かれ、君主ロードのひとりの内弟子となって、何度も死線をくぐりぬけてきただなんて、想像力豊かにもほどがある。確かに自分は本好きで、暇を見つけては読みふけっていたけれど、いくらなんでもやりすぎだ。

「……違う。拙は、あそこにいた」

かぶりを振って、きちんと言葉にする。

そうしなければ、あっという間にこの場所に順応してしまいそうだった。高山特有の爽やかな空気も、強い日差しも、土の臭いも、古ぼけた家々も、あまりに親しみ深かった。生まれ育った場所だからこそ、怖いぐらいに。

教会の前で、ほとんど球形の人物と出会った。

でっぷりと三重になっている顎、象か河馬を思わせる腹まわりは、司祭服におさまっているのが不思議なぐらいだ。ちょこんと出

た手足をユーモラスと感じる者もいるかもしれない。

　フェルナンド司祭。

　その隣には、下唇の可愛くつきでた、そばかすのシスターが佇んでいた。

「あなた、どうしたの？」

　と、シスターの側が声をかけたのだ。

「な、なんですか」

「なんだか顔色が悪いもの。この村じゃ大切な身体なんでしょ。そんな表情でふらふら歩いてたら、何かと心配されるんじゃない？」

「……ありがとう、ございます」

　思いがけない言葉に、つい自分は瞬きしてしまった。フェルナンド司祭とシスター・イルミアは、この村で自分を神聖視しない数少ない人物だが、こんな風に声をかけられた記憶はなかったからだ。

　それを横目に見やり、

「ふむ。さきほどお母様が聖母様に祈りたいといらっしゃっていましたが、あなたもその用事で来られたのですか？」

　と、フェルナンド司祭もこちらへ水を向けた。

「え、いえ、拙は、そういうつもりじゃなくて」

「じゃあ、いつものベルサックどののところですな」

　と、司祭は首もとの肉を震わせてうなずいた。

「そういえば、昨日は、グレイどのが客人たちに村を案内したそうで」

「……あ、はい」

「どういう用向きで来られたのかはお聞きになりましたかな？」

「い、いえ、そんな話はしなかったので」

確か、そのはずだ。

半年前の状況に思いをはせたが、当時の自分は墓地と村の説明ぐらいしかしてなかった。さすがに細かいところまでは覚えてないが、おおよそは間違いないと思う。

「そうですか。もちろん観光でもなんでもよろしいのですが、いささか村人がぴりぴりしているようです。……私が教会に赴任してきたときもそうでしたが、外部因子に過敏なところはありますな」

最後はこちらへではなく、独り言のようだった。

「もしも何かお困りのことがあれば、言ってください。教会の門はいつも開かれておりますし、いつも申しておりますが、聖母様以外にもご用があれば、私としてはうれしく思いますので」

「……ありがとうございます。司祭様とシスター様は、どちらへ？」

「買い物よ。今日は行商の日だから」

ひらひらと、シスターが手を振る。

外からは電気も通ってない村だが、定期的に業者に天然ガスなどの資源を運んでもらっている。自分がたまに本を買ってもらうのも、そうした経路を通じてのことだった。

「じゃあイルミア。行きましょうか」

「はいはい、司祭様。あまり急ぐと膝がやられますよ。もう年なんですから」

「んぐ」

肩をすくめたシスターを睨みつけて、のしのしとフェルナンド司祭は歩いていった。

何にせよ、ふたりとの会話で、少しだけ落ち着いたのは本当だった。

一瞬だけ瞼をつむった。

（……一体）

　一体どうなっているのかは、やはり分からない。

　だけど、これが以前の日常だとしたら、行くべき場所は決まっている。

　はたして、教会の裏からあばら屋に辿り着くと、小気味よい音が自分を迎えた。

　黒衣の老人が、ちょうど今日の分の薪を割っていたのだ。

　刃渡りだけで成人女性の腰まわりほどもありそうな、巨大な斧を片手で持って、リズムよく木材を割っている。自分にとっては見慣れた光景だが、ベルサックの年を考えればとんでもないことだと、今は理解できた。

　振り向きもせずに、ベルサックは背後のこちらへと尋ねる。

「今日は遅かったな、グレイ」

「ちょっと……まごついちゃいまして」

　呼吸を落ち着けつつ、胸を撫でて、ひそやかに周囲を観察した。

　あばら屋にも、ベルサックにも変わった様子はない。かつての自分が知っているままだ。淡々と薪を割り続ける墓守の姿に、少し間をおいて、こちらから話しかける。

「あの、ベルサック……さん」

「……」

　相づちはない。

　いつものことだ。寡黙というのとは少し違って、必要となればむしろ饒舌にもなるあたり、日常の会話そのものに興味を持ってないようだった。だから、こちらも気にせずに、質問をぶつける。

「……この村に、何かあったと思いませんか？」

　斧を持ち上げる手が、止まった。

　額に薄く浮いた汗を拭い、ベルサックがこちらを振り向いた。

「何のことだ」

「い、いえ、その、たとえば、みんな突然消えてしまったとか、冬だったのに夏に巻き戻ってしまったようなとか」

「……何を言ってる？」

　ベルサックの眉間が、皺を深くする。

　悩みばかりが具現化したような師匠の皺と違い、ベルサックの皺は長年墓守を続けて風雨を浴び、時には狩りに出て何日も山中にこもることで形成されたものだ。内面と外面の違いなんて言ってしまうと、浅はかだろうか。

　浅い呼吸を無理矢理深くしながら、自分は上目遣いに呟く。

「……ちょっと本で、そんなのを読んだから、妙な夢を見ただけです」

「そうか」

　と、あっさりベルサックは納得した。

　そういえば、この人も意外と本好きだから、そういう心理は分かったのかもしれない。何事にも消極的だった自分が、現実逃避の先として読書を選んだのも、この人の棚で探偵小説やら冒険小説やらを見つけたせいだった。

「それより、昨日の客人についてだ」

　斧を置いて、ベルサックが改めて言う。

「何か、ありましたか？」

「お前の、顔について訊かれた」

　どきりとして、自分の頬に触れた。フラットの幻術の解けた顔。

「拙の、顔ですか」

「過去の英雄と、お前の顔が同じものであることだ。なんで、そん

なことを時計塔の君主ロードが知ってるのやら」

　ああ、そうだ。そんな会話をした。当時どれほどの衝撃で立ち尽くしただろう。まさか外部からやってきた人間が、自分の顔について触れるだなんて。

　同時に、知っていたからこそ、刷り込みみたいに染み込んだ。

　──だって、あの人は、自分の顔を怖がってくれた。

　──知っていたのに、怖がってくれたんだ。

　あのとき、その言葉は闇の中の光だった。

　単に、自分の顔を知らないだけならば、フェルナンド司祭たちもそうだ。

　でも、顔の意味を知っている上で、この顔を怖がってくれた相手は初めてだった。

　ずっと苦しんでいた自分で他人の顔について、あの人は嫌ってもらうという選択肢を与えてくれた。だからこそ、この後、あの人の内弟子になるなんて未来を進むこともできた。

　改めて、それは奇蹟みたいな出来事だったと噛みしめる。

「……どうした？　まだぼうっとしてるぞ」

「な、なんでもないです。で、でもどうして、顔の話を？」

「あの客人は、ブラックモアの墓守を雇いたいらしい」

　そう言って、ベルサックがこちらを見やる。

「お前も、そのひとりには違いない。だが、普通に考えれば、この村はお前を手放さないだろう。ずっと昔から、ここはそういうシステムでできているのだから」

「……はい」

もちろん、その通りだ。

だから、当時も話はここで終わった。たまたま奇蹟のような出会いが降ってわいたが、やはり自分とは縁のないことだったと、そんな風に納得させられるだけ。少しだけ哀しかったが、それ以上の感慨を覚えることもない。

なかった、はずだ。

「……あの、それで、ベルサックさんは客人に何を話したんですか？」

「ん？」

そう言うと、ベルサックは妙な顔をして視線を戻した。

「珍しいな。お前がそんなことを気にするなんて」

「そ、そうでしょうか。……でも、自分のことですから」

「それはそうだがな。さすがに、時計塔の君主ロードとなれば適当な言い逃れもできん。お前の顔の起源と、アッドとの関連について、正直に話したさ」

自分の顔の起源。

つまりは、ブリテンに冠たる大英雄──アーサー王。

ああ、笑わないでほしい。アーサー王が女だなんて、それはおかしな話だと自分でも思う。ただ、この村にはずっとそのような伝説が残っていて、かの英雄が使ったとされる宝具さえも保存されていた。

つまり、アッドが。

ベルサックが、ふとこちらの右肩のあたりを見つめた。

「今日はそっちも静かだな。いつもなら、余計なまぜっかえしを入れるあたりだろうに」

「……その、なんだか、どっちも寝起きが悪いみたいで」

「ふむ。そういうこともあるか」

　と、ベルサックは無精髭を撫でた。

　アッドは相変わらず、沈黙したままだ。ずっと胃の底が冷えたみたいな気分だった。

「いずれにせよ、もう少し腹を探る必要があるだろう。今日も客人の案内はお前にやってもらうつもりだが、問題ないか？」

　その言葉に、今度こそ凍りつきそうになった。

　師匠に会えと、ベルサックが言う。だけど、今のとおりなら師匠も同じだろう。自分との半年間など知らない師匠と出会えば、今度こそ自分は砕け散ってしまうのではないか。

「どうした？　何か嫌な目にでもあったか。魔術師なら、何かおかしな性癖で、信じられないことをやらかしても不思議はないが……まさかあの君主ロード……」

「ち、違います！」

　遮って、あわててかぶりを振る。

　しばらく訝しげにベルサックはこちらを窺っていたが、当時の自分の性質からして隠し事もしないだろうと判断したのか、近くのバスケットを持ち上げた。

「昼飯代わりだ。客人のところにこれを持って行ってくれ」

「……わ、わかりました」

　受け取った自分に、ベルサックがもう一度問うた。

「どうした？」

　と、男らしい眉をひそめる。

「やはり、いつもと違う。夏風邪でもひいたか？　それとも今日は行商の日だから、何か買うものでも思いついたのか？」

「……なんでも、ないです」

　否定して、振り切るように自分は踵を返した。

客人に貸し与えられた、狩り用の小屋まではすぐだった。

すぐに、着いてしまった。もっと遠回りすれば良かったのに、そんな知恵もまるで働かなかった。自分の骨と肉が、いつのまにか歯車と発ば条ねにすりかわり、絡繰り仕掛けの人形になっていた気分だった。

扉の前で、ぴたりと硬直してしまっている。

その先へと踏み出すのが、喉がひりつくほどに恐ろしかった。

唇を噛む。

鉄錆びた味を舌先に感じながら、自分は命を投げ出すみたいに、扉を押し開いた。

相手は、すぐ先のテーブルについていた。

長い髪に、しなやかな指先。唇にはいつもの葉巻。あのときと同じ夏用のジャケット。扉を開いたこちらを、値踏みするように見つめている。

どうしよう。

どうすればいい？

こんなにも恐ろしくて、こんなにも心細い。一体何をどんな風に伝えたら、あなたと私はこの半年以上もの間一緒に過ごし、数々の事件をくぐりぬけてきたなんて分かってもらえる？　そんなのは妄想よりも性質が悪い。いや妄想と取られたならまだマシだ。田舎娘が何か悪い夢でも見たのかなんて、優しくあしらわれてしまったら、この先どうして生きていけばいい？

それでも、嗄れた声は勝手にこぼれた。

「し、しょう……」

しん、と静寂が張りつめる。

それから、

「……良かった」

　と、師匠が深くため息をついたのだ。

「どうやら、君は、私が知っているグレイだな」

「師匠！」

　その一言で、どれだけ安心しただろう。

　この過去に飛ばされてからずっと感じていた不安が、一度に解けた気分だった。

　あまりのことに、その場にくずおれてしまった。

「グレイ」

「だ、大丈夫です。大丈夫ですから」

　片手を挙げて制止しつつ、力の入らない膝を軽くさする。

　うっかりすると泣き出してしまいそうだった。潤んだ目尻をさりげなく擦って、うつむいたまま、何度もうなずく。

「本当に……大丈夫です……本当に……良かった……」

　まだ顔をあげられない。フードがあって良かったと、本当に思う。

　師匠もせかさなかった。沈黙はあまりに優しすぎて、また泣きそうになってしまった。こういうのはずるい。葉巻の香りは昔のままなのに、沈黙には半年以上の時間を実感させられてしまって、あまりにも胸の内側に響いた。

　預けられていたバスケットを置き、なんとか鼓動を鎮めて訊いた。

「あの、師匠はいつ──」

「私が気づいたのは、数時間ほど前だよ。何人か村人と話したが、どうやら君と出会った時点での過去に似た場所らしいな」

　慎重に言葉を選びながら、師匠が言う。

　つまりは、おおよそ自分と同じぐらいの時刻に目覚めたらしい。

「フラットとスヴィンは？」

「分からん。魔術での探知にもひっかからん」

　と、師匠が首を横に振る。

　今度は、沈痛な色が混じっていた。

「……連れてくるべきじゃなかったか」

「そんなこと、ありません」

　と、自分はかぶりを振った。

「だって、ふたりとも簡単にやられたりするような生徒じゃないでしょう。少々連絡が取れなくても、勝手に自分たちで暴れて、状況をややこしくしてくれるに決まっています」

「……それはそうだな」

　苦笑して、師匠は葉巻を唇から外した。

　ぷかりと煙が小屋の天井へと浮いた。その様子を見ながら、ずっと気になっていたことを、自分は師匠へと問いかけた。

「ここは、過去の世界なのでしょうか」

「どうだろうな」

　と、師匠が首を傾げる。

「そのように目には映る。肌には感じられる。だが、だからといって過去の世界なのだと軽々に判断できるわけじゃない。いくらなんでも、妄言にすぎるだろう」

「魔術でも、そんなことは無理ですか？」

「ふむ」

　師匠が、眉間の皺を深くする。

　すぐに、答えを口にした。

「結論を言えば、完全に不可能というわけではない。第五魔法や、魔法の域に達した大魔術であれば、そうした現象も可能だという話を聞いたこともある」

「……だったら、アトラス院ならできたりも？」

「……」

　師匠が、沈黙する。

「いや、術者だけならともかく、魔術に協力もしていない他者を過去に送り込むのは困難だろう。そんな技術を確立するには、アトラス院だけでは不可能だ」

「もしもハートレスが協力していても？」

「馬鹿馬鹿しい」

　と、師匠はかぶりを振った。

「たとえ理論的に可能だとしても、法政科を擁するバルトメロイが貴族主義すべてに呼びかけたところで、まずかなうまい。それだけの大魔術だ。魔術世界どころか、表側の全面協力もまず不可欠。いかにハートレスが謎めいた能力を持っており、アトラス院と全面的に協力したところで、そうそう成しうるようなものじゃない」

「そう、なんですか」

　師匠がそこまで言うなら、確かなんだろう。

　少なくとも自分は、魔術についての師匠の見立てが間違ったのを見たことがない。仮説の段階では、ひたすらああだこうだとこねくりまわす師匠だが、自信をもって断言したことについてはまず的を外さない。

　もちろん、自信がないことをひとつひとつ丹念に潰しているから……という普段の自信のなさの裏返しでもあるのだろうが。

「ついでに言えば、ライネスもすでに帰した後だった。あれは早朝だったからな」

　時系列的に、そんな頃合いか。

確か、師匠が稀に見る強硬な態度で、ライネスを時計塔に帰したとか、そんな風に聞いていた気がする。

「ライネスさんを帰した理由は、やっぱり、拙の顔のせいですか」

「ああ。前にも話したが、君の顔が、過去の英雄と一致することを確認した。この村にアーサー王にちなんだ宝具が現存するということもな」

さきほど、ベルサックも話していたことだ。

アーサー王と自分の関連。この村がずっと続けてきた歴史。アッドを──その内側に封じられた宝具を使えるものをつくりだすのだという、あまりにも長すぎる計画の果て。

もはや、その意味さえ忘れられても無惨に続いてしまった行為。

「……当時は、詳しく訊けなかった」

師匠が、呟く。

「訊くはずだったのに、それどころではない事件が起きたからだ」

「……はい」

と、自分はうなずいた。

師匠の言葉の続きを、引き取った。

「……明日、この村で、拙が死ぬからです」

それが、過去の事件の終わり。

師匠とともに故郷を離れることになり、時計塔に足を踏み入れるきっかけ。本来なら師匠はもっと事件に深く関わっただろう。しかし、ベルサックの言葉や、当時の自分と村の状況を鑑みてそれを放棄して、時計塔へと連れ帰ることになった。

小さく、師匠が舌打ちする。

「明日、教会で、君がか。思い返してもふざけた話だ」

「……」

　ああ、怒っているのは分かる。

　つまり、今度こそ、この自分が死ぬのではないかと思っているからだ。怒ってくれていることが、どうしても嬉しくなってしまう。自分が死ぬ話題で嬉しくなるなんて、きっとおかしなことだろうに。

「誰が、どうしてそんなことを？」

　フーダニット。

　ホワイダニット。

　師匠は、魔術のかかわる事件ではホワイダニット以外は意味を持たないと、何度も言っていた。ならば、今回はどうなのだろうか。

「……君が解くべき虚構の謎を追い求めよ」

　ズェピアの言葉を思い出して、ふと呟いた。

「あれは、そういう意味だったのでしょうか？」

「くだらない」

　と、師匠がかぶりを振った。

「だが、そういう挑戦状かもしれないな。アトラス院の院長からの」

　つまり、こうだ。

　自分が──墓守のグレイがここで死んだ理由を解け、と。

　あのとき死んでいたグレイが誰だったのか、自分には分からない。そもそも、死体も直に見たわけではないのだ。

　死ぬのは、この自分だろうか？

　それとも、いまだ見ぬ、うりふたつの他人だろうか。

ひどく嫌な予感がしていた。抑えきれない悪寒は、骨の髄からしみ出てくるようにさえ思えた。いままでだって不可解な事件には何度も巻き込まれてきたが、今回はとびきりの例外だ。なにしろ謎は自分自身から湧きだしているといってもいい。

「いかにもありそうな話だ」

と、師匠もうなずいた。

「つまり、その謎を解かない限り、この過去めいた場所──ひとまず二周目とでも定義しようか──から、元の世界には戻れないとか、そういう類の挑戦状か」

「……はい、拙も、そう思います」

自分たちが解くべき謎。

あのアトラス院の院長が、自分たちに押しつけた問い。

半年後の村がどうして無人になっていたかも分からないが、きっとそれも同じようなところに、端を発しているのだろう。ひょっとしたら、ドクター・ハートレスがズェピアと接触した理由も。

「いいだろう。受けてやる。どうせ、その謎は挑まねばならなかった」

「っ、はい！」

師匠の言葉に、強くうなずく。

「じゃあ、どこから調べましょうか」

「そうだな。……過去の通りなら、夕方にベルサックともう一度会うことになっている。そのあたりも含めて、一旦過去の時系列で起こったことを書き出そうか」

ジャケットの懐から手帳を出して、師匠が万年筆ですらすらと書き留めていく。

それを見ながら、

「過去の通りなら、大事なことが、もうひとつあります」

と、自分は小声で付け足した。

「師匠とライネスさんが村に着いてから三日目の──今日の昼に、拙は、師匠についていくことを決めました」

恥ずかしくて、顔が熱くなる。

顔のことを嫌ってくれた師匠に、当時の自分は話しかけた。

すると、偶然とはいえ君の恥部に触れてしまったのだからと、師匠は己の目的も話してくれたのだ。──若かりし頃、未熟なままに参戦してしまった戦いで、どうしても拭いきれない過ちを犯した。過ちはもはや正せない。愚かさは今も変わっていない。ただ、自分に関わった者たちは気高く、誇り高く、もっと賞賛されるべき存在だったのだという、その証明をしたい。そのためにブラックモアの墓守の力を借りたいと。

正直、当時はほとんど師匠の言葉が理解できなかった。

聖杯戦争どころか、魔術だってろくに知らなかった頃だ。細かく説明されても、おそらく理解できなかっただろう。

だけど、その心だけは伝わった。

生まれてこの方、一度も浴びたことのないほどの情熱を味わってしまった。

そして、墓守が必要ならば、自分が引き受けてもいいと、当時からすれば信じがたいことを口にしてしまっていた。母やベルサックをどう説得するかも考えていなくて、今にしてもそこまで踏み込んでしまった理由はよく分からない。

だけど、突然人生が変わることは、きっと誰にだってあるのだろう。

こんな風に、誰かを想えるのなら、自分もその助けになってみたいと、思わされてしまったのだから。

ただ、ひとつだけ、約束した。

―『拙の顔のことは……嫌ったままでいてください』

「……そうだったな」

と、師匠がほんの少し笑みをこぼす。

自分と師匠のつながりは、そこから始まっている。初めて出会ったときではなく、互いの過ちと傷を分かち合ったときから。

すらすらと、師匠がメモを書き上げていく。

時系列をまとめると、こうだ。

一日目朝：エルメロイII世とライネスが、ロンドンを発つ。

一日目夕方：エルメロイII世とライネスがベルサックに会い、村に到着する。

一日目夕方：エルメロイII世とライネスが教会を訪れ、小屋に泊まる。

二日目朝：グレイが、エルメロイII世とライネスに、村や墓地を案内する。

二日目昼：エルメロイII世とライネスが、ズェピアと出会う。

二日目夕方：エルメロイII世とベルサックが会談する。

三日目早朝：エルメロイII世が、ライネスをロンドンに帰す。

三日目昼：グレイが、エルメロイII世に勧誘される。

三日目夕方：ベルサックとエルメロイII世が話す。

四日目朝：偽グレイの死体が発見される。

四日目朝：エルメロイII世、グレイとともに村を脱出する。

「……うむ」

書きあげたメモにうなずき、師匠が指をなぞらせる。

「細かい会話や出会った人物に漏れはあるが、おおよそ私たちが取った行動はこんなところだな」

「……だと思います」

ライネスの話や、自分の記憶とも一致する。

改めて見ると、ライネスが師匠とともにいたのは三日目の早朝まで。師匠が故郷にいた時間の七割ぐらいということになるだろう。

「過去とは違うパターンを取るしかないな」

と、師匠が言う。

「やはり、沼でしょうか？」

「いや、沼にはタブーがある。タブーそのものは場合によっては無視してもいいが、なんらかの魔術的な防衛機構がある可能性が高い。フラットやスヴィンなら対策が取れるかもしれないが、私の能力では難しいだろう」

確かに、そうでなければ、過去の内に師匠が調査していただろう。

「じゃあ、ズェピアは」

「ああ。そっちは、この場所で気づいて最初に会いにいった」

「――っ」

一瞬、絶句した。

「師匠」

言葉に、ちょっと怒りが混じってしまった。

ずかずかと近づいて、間近で師匠を見上げる。

「グ、グレイ」

怯えた様子の師匠に、拳を振り上げた。

上品なジャケットの薄い鎖骨あたりを、ぽか、と叩いたのだ。

「拙を隣におかずに、危険なことをしないでください」

「む、すまない。いや、だが、しかし……」

曖昧に口ごもって、視線を泳がせてから、やがて観念したように瞼を閉じて、師匠が頭を下げた。

「申し訳ない。私のことを知らない君と、会う勇気がなかった」

「……」

ずるい。

その言い方は、あまりにずるい。ずるすぎる。ついさっきまでの自分がどんな思いだったか、ちっとも分かってないくせに。

ぽかぽかぽか、とまた叩いてしまった。

信じられなくて、何度もそうしてしまった。この人は何度自分を泣かせる気なのだ。

うつむいたまま、

「……許して、あげます」

と、やっとのことで言った。

「ありがとう」

「……で、ズェピアはどうだったんですか？」

「うむ。結局留守にしていてね。本来の三日目以降にも彼とは会わなかったから、もともとそうなのか、それともこの二周目における

特別措置なのかは分からないが」

　もう一度時系列のメモを確認しながら、師匠が呟く。

「今日は行商が来る日で、ほとんどの村人は村はずれの広場で時間を過ごすそうだな」

　そうだ。

　あのフェルナンド司祭とシスター・イルミアが教会を外したのもそういう理由だ。おそらく、母も黒い聖母に祈った後は広場に向かっているだろう。

　だから、過去の自分と師匠はあの教会で話し合う機会を得た。

「よし、決まりだ」

　と、師匠が結論した。

「もう一度、あの教会を探るぞ。グレイ」

3

　がらんとした教会は、初夏だというのに、どこか薄ら寒かった。

　こぢんまりとした村なのに、意外と広い聖堂の面積もそれに拍車をかけている。自分はちゃんと魔力を操る訓練を受けていないが、この場所にはいつも落ち着いた印象を受けていた。まるで、この区画だけ世界が切り取られているような、そんな安心感を覚えたことも、何度かあったものだ。

　ぐるりと見回して、師匠が呟く。

「記憶通りに、誰もいないな」

「小さな村ですから、何かを盗むような人も出ません。だから、いちいち鍵をかけることもないそうです」

「……なるほど。まあ、私たちには好都合だ」

　長椅子の間を歩き、ステンドグラスを見上げ、祭壇に触れる。ひっそりと置かれた聖餅用の皿や杯も、ひとつずつ丹念に確認していった。

　そして、もちろん一番奥に配された黒い聖母を。

「以前は聞く余裕がなかったが、気になっていた。この教会はフェルナンド司祭が管理してるようだが、昔からではないのか？」

「……ええ、フェルナンド司祭は数年前に派遣された方ですから。シスター・イルミアはもっと最近で、昨年やってきたばかりです」

「ふむ。君を神聖視してる村人たちに比べて、フェルナンド司祭とシスター・イルミアの態度が違うのもそのせいか？」

「……はい」

　だから、フェルナンド司祭は自分の顔についても興味を示していなかった。

好悪のどちらでもなく無関心だった。何度となく顔を合わせても、彼等は村の中では余所者にすぎない。また十年なり二十年なりすれば、別の教会へ赴任するだけのこと。ちょっとおかしな閉鎖された村としか、彼等の記憶には残らないだろう。

「つまり、教会が黒い聖母を用意したのではなく、先に黒い聖母があって、後からそれを中心として教会がつくられたということか？　地方の特殊な宗教が、中央と妥協するパターンとしては一般的だが……いや、そもそもアトラス院が出てきている以上、聖堂教会単体という方がむしろありえないか？」

顎もとに指をおいて、師匠が目を細めた。

困ったことに、いつものように考え込む様子に、少し安堵してしまった。ひとりが寂しかったせいで、妙な反動が起きている気がする。二度寝する師匠とかを甘やかしてもいいことはないので、気を引き締めなければ。

「ともあれ、人が戻らない内に、調べさせてもらおうか」

丹念に、黒い聖母を観察する。

最初は距離をおいて全体を、やがてじっくりとルーペも使って、細かく検分していった。懐から取り出した試薬は、いつも持ち歩いているものらしい。軽く埃を払ってその試薬に入れて、色の変化などを逐一確かめていった。

「何らかの魔術の影響下にはあるようだが……この像自体が発生源ではないな。どちらかといえば中継点に近い」

そんな風に言って、今度は細い金属の鎖を取り出したのだ。

先端には紫水晶の重りがついていて、じゃらりと音をたてた鎖が、やがて弧を描き出す。

「ダウジング、ですか」

自分も講義で習ったことのある、ごく初歩的な魔術だ。調査や探索に使われることで有名で、魔術世界ならずとも、井戸や石油を掘り当てるのに使われているとか。

「当時持っていた品もそのままだったのでね。あのときは、まさか

君に会うとは思わなかったから、使う余裕がなかったが」

　師匠が肩をすくめる。

　つまり、当時も教会を調べるつもりではあったらしい。そのタイミングで、行商に交ざることも出来ず、教会に辿り着いた自分と遭遇したのだろう。ちょっぴり運命的だと思っていた当時の自分が、ちょっとだけ恥ずかしいが、この羞恥心はずっと閉じこめておきたい。どうせ、師匠が気づくことはないだろうし。……ライネスにくらいは、話してもいいだろうか。

　数呼吸ほど、紫水晶の弧を確認してから、

「こちらだ」

　と、ぐるりと聖堂を歩き出す。

　黒い聖母像の裏だった。狭苦しい隙間に身体をのめりこませて、さっと師匠が手で埃を払う。ごく平凡な石床で、押しても叩いても変化はなかった。

「……何も、ないですね」

「む。さすがに、それほど単純ではないか」

　しばらく考えてから、師匠はもう一度ダウジングチェーンを指先から垂らした。

　白い指に絡まった鎖は、なんとなく二匹の蛇を想起させた。

　今度は、ずいぶん長かった。

　師匠が瞼を閉じたまま、鎖は微動だにしなかった。

「どうしたんです？」

「イメージの問題だ」

　と、答えが返ってくる。

「ダウジングの結果は、意識・無意識含めて術者の知覚している情報とリンクしている。その上で、さっきは二次元的な地図を思い描いていたが、今度は……」

言っている内に、突然、紫水晶がくるりと不自然に捻れた。

ごく一部だけが、妙に膨らんだ揺れ方。

「こちらだな」

聖堂を離れて、師匠は脇の扉を開いた。

古めかしい階段を下りて廊下を曲がると、ワインなどを置いてある貯蔵室に着いた。聖せい餐さんではパンとワインは必須なので、当然この教会にも保存されている。

「ここが、どうかしましたか？」

「……あっちか」

師匠の手元で、水晶が揺れた。

見比べながら、ワインの詰まった棚を動かして、その下の絨毯を剝がす。意外と軽そうなのは空き瓶が多いためだろうか。

変哲もない床を睨みつけた後で、

「この地下室は、さっきの聖堂の真下だな」

と、師匠が天井を見上げる。

「もともとは、別の場所に、あの黒い聖母が置かれていたのかもしれない」

「……それは、動かしても、大丈夫なものなんですか？」

「術式にもよるが、聖像の場所を少々移動しても、たいていは問題ない。地域によっては神を移動するための専門の魔術があるぐらいでな」

言いながら、もう一度、師匠が床を撫でた。

力を入れて、ぐっと押し込む。

今度はぐらり、と床が傾いで、そのまま横にずれた。

「……階段？」

　がらんとした空間とともに、土を剝き出しにした階段が、床下へ開いていたのである。

＊

　行商は、賑わっていた。

　小さなトラックが二台きり。運転手を含めても六人ほどの訪問だが、村にとっては月に一度、ある種のお祭りみたいなものである。入り口は、フリーマーケットに似た様相となっていて、百人近い人々が群がっている。

　子供たちが笑いさざめき、大人たちは新たな品を狙い定めて、老人たちは少し離れた場所からその様子を和やかに見守っていた。行商はある種の慰安活動も兼ねているらしく、ちょっとした生演奏なんかも供されていた。

　ただ、村の多くが知らない機能も、その行商にはあった。

　安物のバイオリンに浮かれている村人の間を抜けて、行商のひとりが村の住人と接触したのである。

　そして、いくつかの会話も交わされていた。

「司祭様」

「おお。ベルサックどのも来られているとは」

「壊れたラジオの部品が必要でして。雑貨屋が切らしてました」

「ははは、それはお疲れ様です。今日はこのあと、ダンスなんかもあるようですが」

「あいにく、祭りには慣れていなくて、すぐにお暇させていただくつもりです」

「それは残念」

「ところで、グレイのやつは来てましたか？」

「いえ、朝に教会の前でお見かけしたきりですが」

「そうですか。では、また」

　そっけなく言葉を交わし、何人かが挨拶し、また別れていく。

「こんにちは、シスター・イルミア」

「あら、こんにちは」

「さきほど、行商の方とお話しされてましたけど、何か約束でも？」

「いえ、街の友達から手紙を届けてもらっただけです」

「おお、文通とは羨ましい。わしはこの村以外のこととか知らなくて」

「この村はいいところですよ。私こそ羨ましいです」

「ははは。シスター様にそう言ってもらえると嬉しい。わしにはここしかないのだから、ここが一番だったんだと死ぬまで信じていたいものさ」

「ええ、きっとそうです」

　雑貨屋の老人と別れてから、話題になった封筒を持ち上げ、シスター・イルミアは淡く眉宇を曇らせた。

「……ああ、来たんだ」

　と、可憐な唇で囁いたのだ。

　そして、もうひとつ。

　村でも最長老で、おばば様と敬われている老婆だった。

　周囲の言の通りなら、百歳は優に越えているはずだ。古い民族衣装に身を包んだ彼女は、とても小さく見える。まるで人形のようだった。おびただしい皺と皺の間に、目も鼻も唇も埋もれている。

　そのおばば様の、枯れ葉みたいな口が動いた。

「地下から、声がしよる」

「地下からですか」

「そうさ。遠い遠い声だ。私が幼かった頃に、たった一度だけ聞いて、いまだに忘れられなかった声だ」

　老婆の言葉は、低く這いずるようだった。

　それこそ、百年も昔から届いてるかのごとくにも思えた。

「グレイは、よくできあがっておるな」

「……はい」

　と、幸せそうに女は微笑した。

　待ち焦がれた恋人を、数十年ぶりに迎えた花嫁のようだった。とりたてて目立つところのない顔立ちだったが、ぱっと明るい花が咲いたかにも見えた。

「ようやく、あの子のときが来たんですね」

　グレイの、母親であった。

4

　地下の階段を下りながら、自分は何度も周囲を確認していた。

　きちんと補強はされてない土壁だ。自然にできたものかもしれない。かすかに濡れた手触りが、狭苦しさと圧迫感をいや増しにしていた。

「ここは……」

「君も知らないのか」

　師匠に問われて、小さく何度かうなずく。

「……初めて、見ました」

「なるほど」

　と、師匠が呟く。

「念のため、空気を確保しておこう」

　師匠の指が動いて、呪文を唱えた。

　ゆるりと風の通る感触が、肌に伝わる。入り口から新鮮な空気を循環させるべく、師匠の魔術が働いたらしい。

　つい、不思議な気持ちになって、苦笑してしまった。

「なんだね？」

「いえ、珍しく師匠が魔術師っぽいなと思って」

「二流には二流なりの使い方がある。今となっては科学の方が、安くて使いやすいようなことばかりだとしてもな」

　ふてくされたような師匠が、手を掲げると、今度は淡い光が灯った。

ひとまず、先を見通すには十分な光量だ。

「足跡はある」

師匠の掲げた光が、足下を照らし出す。

地面には何度も踏み固められた跡が生々しく残っていた。長い長い年月、多くの巡礼者を迎えてきたようなその跡に、自分は小さく喉を鳴らした。

「教会の本体がこちらなのか。それとも、これを隠すための教会なのか」

鼓動がうるさかった。

自分が知らない、自分の村の正体。

この先に踏み込んでいいのかと、もうひとりの自分が囁いている。己とうりふたつの死体があがった理由を知ってしまっていいのかと、問いかけている。

あまりにも、それは恐ろしい。

十分覚悟をして来たつもりなのだが、自分の脳が受け入れきってない。

こんな地下道が、本当に自分の世界にもあったのか？　ズェピアが加工したでたらめではないのかとか、益体もないことをずっと吹き込んでくる。

だけど、足は止めない。ぎゅっと胸元をつかみながら、一歩ずつ進んでいく。

「……かつて、世界の多くで、地下とは冥界そのものだった」

歩きながら、師匠が呟いた。

どこまで道は続くのか。途中で何度も道が曲がりくねり、上がったり下がったりして、方向感覚も定かではない。延々と下りた距離はもう数十メートルにはなりそうだが、実はほとんど下りてないといわれても納得しそうだ。

「冥界とも陰府とも、あるいは影の国と呼ぶものもいただろう。いずれにせよ、死の世界と現実は地続きで、その気になれば歩いてだっていける場所だった」

　ライネスの話でも、師匠がそんな講義をしていたのを思い出した。

　ああ、自分たちは死の底へと向かっている。

　びくり、と自分の足が止まった。

「霊か？」

「い、いえ」

　かぶりを振って、自分はもう一度地下道の先を見やった。

「からっぽ……なんです」

　実のところ、いかなる場所でも、自分は霊の存在を感じている。

　この地球に人が死ななかった場所などほとんどなく、その古い息づかいが刻まれてない場所も数少ない。自分が怯えてしまうのは、その濃度の問題である。霊となりはてても、現実を蹂躙する我欲の生々しさが、怖くてたまらないからだ。

　死んでいるのに生々しいなんて、その矛盾が恐ろしいからだ。

　だが、ここはおかしい。

　霊のエネルギーどころか、かすかな魔力の波紋さえ感じられない。

　これだけ足跡が残ってるのだから、何らかの残留思念ぐらいはこびりつくはずだ。言葉として読みとれるようなレベルではないにせよ、それとなく分かるぐらいの波動は残る。なのに、この先にはがらんとした空虚しか残されていない。

　それは、一体──

　突然、狭い地下道が開けた。

　驚くほど広い空間がぱっと目の前に現れ、同時に師匠が硬直する

のが分かった。

　自分も、呻きを殺すのが精一杯だった。

　広い空間のそこら中に、大量の骨がばらまかれていたのだ。

　それも一体や二体ではない。数十、数百にはなろうかという膨大な数の人骨だ。見渡す限りに人骨が転がり、足の踏み場さえない有様だった。

「……ブラックモアの墓地」

　と、師匠が低く呟いた。

　唾を飲み込んで、ゆっくりと瞳を動かし、膝をつく。

　花のごとく地面を覆い尽くした人骨の数々を、ひとつずつ見比べながら、師匠は呆然と言葉を残す。

「もしも……地上ではなく……こっちが墓地の本体だとしたら……？」

「……えっ？」

「いや、そもそも、これは墓地なのか？　時計塔でも地下は特別だ……。それは地表と違って、神秘のいくらかがまだ結晶化して残されているからだ……だったら、ここもそうなのでは……」

　師匠の呟きとともに、空間に異変が生じた。

　骨が揺れた。

　見えない糸に操られるように、それぞれが浮き上がり、組み合わさった。

　そうやって、続々と、骨の兵士たちが立ち上がったのだ。いずれもが、同じく骨でできた武器を携えていた。あるいは剣であり、あるいは槍であり、あるいは弓矢であった。おそらく古い時代の兵士であろうことだけは、その装備から理解できた。

　これらが、魔力を貪っていたのか。

　一体の骨兵がこちらを向き、剣が振りかぶられた瞬間、弾けるよ

うに体が動いた。

「―師匠、どいて！」

　一瞬不安に思ったが、固フ定ッ具クから外れたアッドが変形する。

　ルービックキューブのごとく回転し、たちまち現れた大鎌がすんでのところで、骨兵の剣を受け止める。

　ビリビリと手を痺れさせる威力に、思わず目を見張った。

　ばかりか、次々と骨兵たちはこちらへ突撃してきた。

（霊じゃ、ない……？）

　その様子に、目を剝いた。

　強大さに比して、我執や妄執が薄すぎる。現世にしがみつく霊とは、感情の濃さそのものといってもいい。墓守の仕事とは、そうした感情を鎮めることだといっても間違いではないだろう。

　こんな風に、整然と行動する霊は基本的にありえない。

　だったら、これはなんだ。

　自分が向かい合っているものは、何なのだ？

「霊基が……足りないのか？」

　師匠が、囁いた。

「……なんです？」

「おそらく、単なる霊とは異なる存在だ。周囲の魔力が、空間に刻まれた記録帯へ流れ込み、骨を媒介にすることで、かろうじてそれらしいカタチをつくっているらしい。……ああ、これじゃまるでサーヴァントのなりそこないだ」

　師匠の呻きに、ごくりと唾を飲み込む。

　だったら、この異様な能力もうなずける。野獣のごとき速度。冷たく研ぎ澄まされた殺意と動き。なるほど、魔術師の使い魔などと

いうよりも、サーヴァントのなりそこないという方がふさわしいだろう。

　ほぼ同時に、気づいた。

　もうひとり、いた。

　次々と立ち上がっていった骨の兵士たちの後ろから、ひとつだけ、明らかに様相の違う人影がこちらを観察していたのである。

「え……？」

　こちらも、ほぼ同時にその人影を見つめていた。

　まるで、その少女は。

　影の英霊たちを引き連れた女王のごとき、その姿は。

　金属の仮面をかぶっていて、その素顔は見えない。だけど、その立ち姿はあまりにも酷似していた。何度となく鏡で見つめていた――砕け散ってしまえばいいと思っていた、なれの果て。かつての英雄を模してしまった、とある田舎娘の結末。

【なぜ、来た？】

　声ではない。

　しかし、そんな風に問われたと感じた。

【まだ時には早い。未来の王は目覚めていない。お前は地上、私は地下。そこで待っているべきだったろう】

　問いかけに、何も返せない。

　返す言葉など、持っているはずもない。

（もしかして……）

　ただ、疑念だけが渦巻いた。

（もしかして、あのとき、あの場所で死んでいたのは……）

　その疑いが黒雲のごとく持ち上がり、思考を染めていく。あそこで死んでいたはずの自分。しかし、それを言葉にするよりも早く――



【帰るがいい】

　ぐるり、と仮面の少女が踵を返す。

　洞窟のさらに奥へと遠ざかっていく。

「待って！」

　立ち上がる。

　骨兵たちが、それを阻もうと群がってきた。一体や二体ならばともかく、十数体となれば蹴散らすにはこの鎌では分が悪い。

（―破城槌で！）

「アッド、第一段階応用限定解除！」

　ぐん、と手を振りかぶる。

　魔力を込めて、大鎌のカタチを裏返すよう念じる。

　しかし、返ってきたのは変化ではなく、掠れきった吐息だった。

「すまん……グレイ……」

「アッド？」

　ようやく聞けた匣の声に、喜びよりも、不安が先立った。

　そんな声音だった。本来は出してはならないものを、無理やり押し出したような。

「アッド?!」

　それきり、返事はなかった。

　形状もまた、大鎌から変わらない。

ずっと沈黙していたアッドは、今度こそ息を引き取ったみたいに、ありとあらゆる反応を停止させてしまっていた。

「グレイ！」

「――っ！」

師匠の叫びで、襲いかかる骨兵の刃を条件反射的に躱かわしつつ、自分の意識もまた凍結してしまっていた。一体何が起こったのか、まるで分からない。いいや半ばは分かっているのに、その事実を到底受け止められない。

がくり、と膝から力が抜けた。

身体の『強化』が間に合わない。

ああ、周囲の魔力を吸収する機能すら、半分以下に低減していた。もともと、この場の魔力自体が極端に少ないのだから、今の自分は並の魔術師と大して変わらない――！

「っ、グレイ！」

師匠の手が、横に振るわれた。

かろうじて魔力を固めた、弱々しい魔弾が骨兵を打つ。

しかし、そんなもの牽制にしかなりはしない。なりそこないと言っても、サーヴァントのようと表現される代物なのだ。師匠の魔術でどうにかなるはずもない。今こそ守るための力が必要なのに、自分からは立ち上がるための気力さえ欠け落ちていた。

「アッド！　アッド！　アッド……！」

ダメだ。

何ひとつ、返してくれない。

その事実が、地獄の溶岩のように肺腑を焼いた。刃よりも鋭く、矢よりも深々と、自分の心臓を抉っていた。いつも憎まれ口を叩く相手がいないという想像は、いかなる傷よりも壮絶に、自分の精神を砕いていた。

「アッド！　お願いアッド！」

　大鎌を抱きしめて、叫ぶ。

　この一瞬、ありとあらゆるものを忘れて、自分は子供のように泣き叫んだ。

「起きて、アッド！」

　大鎌が、突然光を発した。

5

　教会の内側で、一枚の封筒が翻った。

　さきほど、行商から渡された手紙である。

　その手紙をこれ見よがしに持ち上げ、シスター・イルミアがつんと顎先を持ち上げて、問いただしたのだ。

「……お分かりですね、司祭」

「ええ」

　と、フェルナンド司祭はうなずいた。

　この教会に赴任してきたときから、そうした可能性については言い聞かされていた。しかし、実際に自分の代でその可能性が発芽するとは思っていなかった。とっくに風化したならわしは、けして実を結ばぬまま腐敗して終わると思っていたのに。

　ああ、いや。

　分かっている。目をそむけていただけだ。

　自分が赴任した際、すでにあの娘は変化していた。だったら、こうなる確率はけして無視できないものだった。むしろ、この数百年ほどでは最大だったのではないか？

「もしも機が熟してしまったなら、私はこの土地の神子を殺すことになるでしょう」

　シスターとともに歩きながら、フェルナンド司祭が十字を切った。

「かつてこの土地で、ブラックモアを名乗った強大なる死徒が、我らが先達の手によって彼方へと導かれたように」

　しばらくして、ふたりともが立ち止まる。

地下の、保存室である。

一瓶のワインが落ちて、割れ目からこぼれた酒が、床に空いた穴から滴っていた。

「ああ、やはり……」

と、司祭は顔を覆った。

「ハートレスとやらが、言っていた通りになりましたか」

*

あばら屋に戻ってから、ベルサックは不意に顔をあげた。

鴉の鳴き声を、聞いたのだ。

「……またとなけめネバーモア」

魂を運ぶという、凶兆の鳥。

彼は、その鳥たちとともに、ずっと生きてきた。おそらくはその声を聞いて、死ぬのだろうと思っていた。先祖たちが残らずそうだったように、自らもブラックモアの墓守としての使命を後継に受け渡して、何ひとつ果たさぬままに朽ちていくのだろうと。

それでよい、とも思っていた。

今時ではないかもしれないが、この時間が止まったような村を、意外とベルサックも気に入っていた。

すべて、あの少女が変わってしまうまでのことだ。

鴉の鳴き声が特別であることに、もうベルサックは気づいていた。

「……グレイ」

乾いた唇が、乾いた声で、名前を呟いた。

　抑えていたつもりなのに、こぼれでてしまった。

「この日に、この夜に、来て欲しくなかったぞ」

　ベルサック・ブラックモアは、あばら屋にたてかけていた斧を、ゆっくりと持ち上げたのであった。


転章

　因果はもつれあう。

　時間は絡み合う。

　ほとんどの者の眼球には映らぬが、それは複雑に張り巡らされた糸のように、互いに影響を与えあっている。人々はそれぞれの流れで、それぞれの意志で、その因果と時間を結びあわせることによって生きていき、朽ちていき、やがては死に至る。

　──だが、ここに、その糸を見つめる者がいる。

*

　いずこともしれなかった。

　薄闇だったが、実際にそうなのかも分からない。少なくとも、視覚としてはそう認識しているというだけのこと。はたして時間が流れているのかも怪しい静まり返った空間で、ゾンビに襲われてるような呻きと手があがったのだ。

「ううううううう、教授違いますよ。ゾンビにはとりもち、ラバーリングアクションには釣り竿がないと……」

「……やあ、目が覚めたかね」

　と、声がかかった。

　それで、唸っていた少年がびくんと跳ねて、起き上がる。きゅきゅっと瞼を擦り、ケープを纏った男の名を脳内から検索するのには、もう数秒かかった。

「あ、ダメだ！　知らない人ですね、あなた！」

「ふむ。自己紹介した覚えはないから、その問いは正しい」

　と、男はうなずいた。

「まさか、あそこから術式に干渉するとはね。アトラス院の構成は、根本からして時計塔のそれとは違う。なのに、ほとんど即興で解析して、逆流さえしてのけた。正直魔術師としての腕とはほぼ関わりのない領域だが、常識はずれには違いない。一体君たちは何者なんだい？」

「はい！　フラット・エスカルドスと、ル・シアンくんです！」

「っだから、お前！　のんきに自己紹介してるな！　というか僕の名前はそれか！」

　背後から、もうひとりの癖っ毛の少年が、怒鳴りつけたのだ。

「いやだって、挨拶は人間の基本だって教授が言ってたし！　ル・シアンくんの魔力がなかったら、あんなの無理やり干渉なんかできなかったし！」

「しろなんて言ってない！　勝手に人の魔力をひっぺがして悪用しやがったのはお前の勝手だろう！　僕が協力したみたいに触れ回るな！」

　きゃいきゃいと騒ぐ少年たちを見下ろし、

「ああ。やはり噂のエルメロイ教室か」

　と、男は合点した。

「君たちふたりは、あの時点の村にはいなかったからね。再演に適用できなかった。大変申し訳無いのだが、そのことを受け入れていただきたい」

「どういうことです？」

「言ったままだよ」

　と、視線を移す。

　すぐ隣に、水晶玉のごとき球体が浮かんでいた。表面にはどこかしらの暗い景色が映っていて、どうやら男は、その映像をずっと眺めていたらしかった。

　ぼんやりと映った人影に、フラットも目を見張った。

「教授！　グレイちゃん?!」

「……だが、実のところ、私もあれは想像しなかった。幾多の脚本を用意して、幾多の結末を甘受してきたが、このようなシーンは考えたこともなかった」

　男の目が、ゆっくりと細められる。

「与えた謎はごくシンプルだ。想定であれば、彼らはその謎を解決することになる。あの場で亡くなった少女について、探ることとなろう。どうして彼女が死んだのか、どうしてあの時間だったのか、地下の墓地や村に秘められた古い謎に向けて邁進することとなっただろう。探偵小説であればおなじみの流れだ。彼らの思想と性能スペックで配役すれば、遅かれ早かれどうやってもそこに辿り着く。もちろん成否とは別だから、その過程で彼らが死んでいる可能性も高かったが」

　どこまでも饒舌に、錬金術師が語る。

「ああ、ひょっとしたら君たちのせいかもしれないな。念のため言っておくと怒っているわけではない。舞台や役者のトラブル、観客の反応如何で、劇が千変万化することなんて当然のことだ。欠片もアドリブのない劇は、完璧かもしれないが生きていない。少なくとも、生き物が行う、生き物に見せるための劇は生きているべきだろう」

　言葉の意味は理解できない。

　この男の言葉は、男の中で完結しきっている。他人に向けた言葉でない以上、表層の意味と実際の意味とで、どれほど外れてしまっているかは見当がつかない。そもそも数百年以上存在し続けてるような怪物と、本当に言語概念が共有されているかも怪しいものだ。

「だが……しかし、ああ、イレギュラーとは、なんて懐かしい」

　陶然と、声はこぼれた。

　いつまでも、ズェピア・エルトナム・アトラシアはそれを凝視していた。

＊

　アッドから放たれた光は一瞬。

　しかし、自分はずっと長く硬直していた。

　師匠も、その現象に息を止めていた。自分たちの前に新しく現れた人影は、それだけ衝撃的であった。

　白銀の騎士。まるでおとぎ話のような──

「……おいおい」

　と、剣を持ち上げて、騎士が嘆息する。

　刃が走った。

　その鋭さと力強さは、野獣の爪と紛うほどだった。

　地下の暗闇に幾筋かの銀線が走り、襲いかかった骨兵たちがたちまち倒れ伏していったのだから。

「身勝手な奴らだな。無理矢理降ろしたのかよ。儀礼マナー知らずにも程がある。おかげで、霊基カラダもきちんとできあがってないだろうが」

　その姿は、ひどく曖昧であった。

　おそらく、もとはサーヴァントと同じ霊エーテル体なのだろうが、前に見たフェイカーなどとは違って、きちんと具現化できていない。鎧も肌も、全身があたかも霧に包まれたかのように朧で、霞がかっている。

「だいたい、他の騎士あほうどもならともかく、英霊なんざクソくらえなオレを再現してどうするって話だ。死なずの騎士でもない。働きものでもない。せいぜい、こいつら三人分の力しかない。まあ、阿呆な巨人であれば、舌先三寸で首ぐらいは落としてみせるが」

　勝手に言いながらも、騎士の剣は巧みに骨兵たちを捌いている。

　強い。確かにフェイカーのような、超人的な身体能力こそないものの、その技術は達人のものと言ってよい。長年に渡り、正式な訓練を受けた上で、幾多の戦場を渡り歩いたものの手並み。

「ああいや、違うか。お前がオレを起こしたんだな。自分から魔力を振るえるような構造でもないだろうに、ご主人思いなこった」

　こちらが携えた大鎌を──眠ったままのアッドを、騎士は見下ろした。

「……あなたは……誰ですか」

　問いかけると、大きく肩をそびやかした。

「イッヒヒヒヒヒヒ！　誰だって、そいつはひどいじゃないか！　長い付き合いだろう愚図グレイ！」

　その声に、愕然と身体を強ばらせた。

　眠っているアッドじゃなくて、騎士の発した言葉だったからだ。

　手のひらで、騎士が自らのこめかみを叩く。

「おっと。一緒に眠ってて長かっただけに、ちょっと混じってるな。本来こうじゃないんだが、まあいい。別にオリジナルのまねをしなきゃならんわけでもあるまいし、人間変わるときには変わる方がそれらしい」

　振り向きざまに、騎士が剣を振るうと、また骸骨兵が倒れた。

「どうもご同輩と見えるが、互いにこんな有様だ。勘弁してくれよ」

　軽く胸を叩いて、騎士が一礼する。

　同時に、自分は妙な既視感と高揚感を覚えてもいた。

　この村にいた頃の、たったひとりの友達。口を開いては自分をからかって、愚図グレイと何度も言っていた、その相手。

　どうして、彼に対するのと同じ感情を、この騎士に覚えているのだろう。

　仕草や言葉のひとつずつに、たまらない懐かしさを感じるのだろう。

「とりあえず、ケイって名前を覚えておいてくれ」

　朧な顔で、くすりと騎士が笑った。

　そして、自分はとある伝説を思い出す。

　あの『十三拘束』で触れた、誓いのひとつ。

　サー・ケイ──アーサー王の義理の兄が、同じ名前で呼ばれていたことを。

あとがき

三田　誠

　──人は、死と向き合わずにいられぬ。

　　それは、いかなる者も最後には覗き込む深淵なれば。

　　ゆえに定義する。『死後の宮殿』にして『現世との窓』。つまり、墓とは人がつくりだした、極小の死後の世界であった。

　いよいよ、物語はここに至りました。

　第一巻から示唆していたグレイの故郷。かの英雄と縁深いと言われていた墓地へと、このエピソードでは迫ります。

　墓というのは、人類に共通した概念でありながら、その扱いには文化圏ごとに意外と大きな差があります。宗教の違いはさることながら、たとえば墓地を生活圏の近くに置くか遠くに置くか、喪に服す期間の概念、山に置くか森に置くか、周囲の水源の有無、権力構造の関与など、さまざまなバリエーションが存在するのです。

　現代でも、墓や葬儀は、最も身近で非日常な魔術のひとつといえるでしょう。

　また、今回中盤で登場したゲストには、驚いた方も多いのではないでしょうか？　同時に、「お、お前、二十七祖だったんじゃ……」と思われた方も。

　というわけで、以下、ネタバレかつディープな内容ですので、段落を分けますね。

――ネタバレ――

　アトラス院の院長、ズェピア・エルトナム・オベローン（もしくはアトラシア）は、『月姫』では二十七祖と呼ばれる特別な吸血鬼だった存在です。

　ただ、少し前から各作品で提示され、最近はカルデアエースのＣＤドラマや竹箒日記でも言及されたので、すでにご存じの方もいるとは思いますが、Fate世界と月姫世界では根本的な部分からいろいろ異なるのです。

　とはいえ、これはあまりに予想外かつ重大事でした……。なにしろ事件簿一巻よりも以前、奈須さんから打ち明けられたとき、スピンオフのライター陣ですら全員固まったぐらいですから。以下、いつもの再現劇場（全ライター台詞監修済み）。

きのこ「あ、実はね。Fate世界では二十七祖は二十七祖になってないから」

ライター陣「……！！！！！？？？？」（全員硬直＆何を言われてるか分からない）

きのこ「二十七祖が二十七祖たりえるのは月姫を基幹にする世界だけなんじゃ。逆に月姫世界にはサーヴァントなんてとんでも使い魔おらんじゃろ？」

三田「コンマテーっ!?」

きのこ「それは人理焼却によって焚書になった。そうそう、成田さんのFakeは気にしなくてよい。二つの中間にある特殊領域だし」

成田「あ、あ、はい。あ、ありがとうございあｍすｓ……ｔ？」

きのこ「でも三田さんの事件簿は準拠してね。話すと長くなるけど、月姫Ｒだとこのへんは……」

三田「ウェイトウェイトウェイト！　きのこウェイト！　今から質問事項書き出して全員共有用のレジュメにまとめるからきのこウェイト！」

きのこ「えー、メンドくさーい。それよりこのピザ、美味しいね」

東出「ホホホ、麿は完結しておるので後はよろしくでおじゃる」

桜井「（慎重に質疑を聞きながら）……私もとりあえず影響はないみたいですねホッ」

　あれほどの衝撃が走った日はほかになかったかもしれません。
あ、いや、あったかもあった気がするあったような記憶も……

　Fake四巻のあとがきと合わせて読んでいたければ、あちらとこちらで『何が』違っているかの一端が分かるかと思います。成田さんたちと悲鳴をあげながら設定をすり合わせたり、どこが違うのかを詰めたりの作業は、文化祭前夜のような楽しい時間でした。

　――ネタバレここまで――

いよいよ本編では、終盤への助走が始まりました。

結果として、物語の趣も少しだけ変わっています。これまでの事件は単独で完成していて、どこからでも読めるよう配慮してましたが、この第六巻からはいままでの話を踏まえたものになっています。新たに事件簿を買い始めた方は、少しだけお気をつけください。

かつて、『TYPE-MOON Fes.』の熱に衝き動かされて執筆を始めた『ロード・エルメロイII世の事件簿』は、最新の『Fate/stay night』の第五次聖杯戦争へ向けて、加速しています。彼らの速度に、どうか僕の筆が追いつきますように。

また、ご存知の方も多いかと思いますが、『ヤングエース』にて、『ロード・エルメロイII世の事件簿』コミカライズが発表されました。手がけられるのは東冬さん。僕も『嵐ノ花　叢ノ歌』のタッチには痺れており、決定の報を聞いたときには驚いたものです。こちらもどうぞご期待ください。

最後になりましたが、不気味な田舎という新たな事件簿の側面を描いてくださった坂本みねぢさん、今回も微に入り細を穿つ魔術考証を提供くださった三輪清宗さん、フラットなどの台詞を監修いただいた成田良悟さん、奈須さん、武内さん、ＯＫＳＧさんを始めとしたTYPE-MOONのスタッフにお礼を申し上げます。

そして、もちろんこの第六巻を手にとってくださったあなたにも。

下巻は、冬の頃にお届けできるかと思います。

二○一七年六月

城平京＆片瀬茶柴の『虚構推理』を読みながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」（著：和智正喜 / 富士見書房）

「Lord of Knights」（Aming）

イラスト／坂本みねぢ

装丁／ＷＩＮＦＡＮＷＯＲＫＳ

ロード・エルメロイII世の事件簿

6「case.アトラスの契約(上)」

著者：三田 誠

イラスト：坂本みねぢ

文章校正：鴎来堂

角川文庫

2017年10月18日　発行

ver.002

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 6「case.アトラスの契約(上)」』

2017年8月11日　初版発行

発行者　郡司 聡

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

（「お問い合わせ」へお進みください）

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only



BOOK☆WALKER